

地域型保育事業所

指導検査基準（令和5年10月5日適用）

杉並区子ども家庭部

【居宅訪問型保育事業を除く】

指導検査基準中の「評価区分」

評価区分	評価形態	考え方
A	助言	関係法令及び通知等のいずれにも適合する場合、水準向上のための助言を行う。
B	口頭指導	関係法令又は通知等のいずれかに違反している場合又は基準を満たしていない場合は、原則として、口頭により指導する。ただし、事業運営上、支障が大きいと認められる場合又は正当な理由なく改善を怠っている場合は、文書により指導する。
C	文書指導	関係法令又は通知等のいずれかに著しく違反する場合又は基準を満たさない場合で、事業運営上、支障が大きいと認められる場合は、原則として、文書により指導する。ただし、改善中の場合又は特別な事情により改善が遅延している場合は、口頭により指導する。

運 營 管 理 編

目 次

1	利用者の利用状況等	
(1)	利用定員の遵守	1
(2)	認可・確認内容の変更	1
2	基本方針及び組織	
(1)	保育サービスの基本的理念	2
(2)	子どもの人権の擁護、虐待の防止	2
(3)	個人情報保護	3
(4)	秘密保持	3
(5)	苦情解決	4
(6)	サービスの質の評価等	4
(7)	事業計画	5
(8)	事業報告	5
(9)	運営委員会	5
(10)	運営規程の策定及び重要事項の揭示	6
(11)	分掌事務	6
(12)	業務日誌(園日誌)	6
(13)	職員会議	6
(14)	感染症及び食中毒の予防及びまん延の防止	7
3	就業規則等の整備	
(1)	就業規則	7
(2)	給与規定	8
(3)	育児休業規程等	9
(4)	旅費	13
(5)	労使協定等	13
(6)	周知等の措置	14
4	職員の状況	
(1)	職員配置(共通事項)	14
(2)	職員配置(家庭的保育事業)	16
(3)	職員配置(小規模保育事業A型)	17
(4)	職員配置(小規模保育事業B型)	18
(5)	職員配置(小規模保育事業C型)	19
(6)	職員配置(保育所型事業所内保育事業)	20
(7)	職員配置(小規模型事業所内保育事業[A型基準])	21
(8)	職員配置(小規模型事業所内保育事業[B型基準])	22
(9)	職員の資格保有	23
(10)	採用、退職	23
(11)	関連帳簿の整備	24
5	勤務状況	
(1)	勤務体制	25
(2)	均等な待遇の確保	25
(3)	妊娠した労働者等の就業環境の整備	25
(4)	勤務状況の帳簿の整備	25
6	職員給与等の状況	
(1)	本俸・諸手当	26
(2)	社会保険	26
(3)	賃金台帳	26
7	健康管理	
(1)	安全衛生管理体制	26
(2)	健康診断	27
8	職員研修	28
9	施設長の責務	28
10	建物設備等の管理	
(1)	建物設備の状況	29
(2)	建物設備の安全、衛生	30
(3)	環境衛生の状況	31
11	災害対策の状況	
(1)	管理体制(防火管理者)	32
(2)	防火対策	32
(3)	消防計画等	33
(4)	消防署の立入検査	33
(5)	防災訓練等	34
(6)	災害発生時への備え	34
(7)	保安設備	35
(8)	安全対策	36

12 利用手続等

- (1) 情報提供及び虚偽・誇大広告の禁止 37
- (2) 重要事項の説明 38
- (3) あっせん等に対する協力 38
- (4) 受給資格等の確認 38
- (5) 給付認定の申請に係る援助 38
- (6) 支給認定保護者に関する区への通知 38
- (7) 利益供与等の禁止 38

〔凡例〕

以下の関係法令及び通知等を略称して次のように表記する。

No.	関係法令及び通達等	略称
1	平成24年8月22日法律第65号「子ども・子育て支援法」	子ども・子育て支援法
2	平成26年6月13日政令第213号「子ども・子育て支援法施行令」	子ども・子育て支援法施行令
3	平成26年6月9日内閣府令第44号「子ども・子育て支援法施行規則」	子ども・子育て支援法施行規則
4	昭和22年12月12日法律第164号「児童福祉法」	児童福祉法
5	昭和23年3月31日厚生省令第11号「児童福祉法施行規則」	児童福祉法施行規則
6	平成29年3月31日厚生労働省告示第117号「保育所保育指針」	保育所保育指針
7	平成26年10月14日条例第27号「杉並区家庭的保育事業等の設備及び運営の基準に関する条例」	区家基条例
8	平成27年3月31日規則第41号「杉並区家庭的保育事業等の設備及び運営の基準に関する条例施行規則」	区家基施行規則
9	平成26年10月14日条例第28号「杉並区特定教育・保育施設及び特定地域型保育事業の運営の基準に関する条例」	区特基条例
10	平成26年12月12日雇児発1212第6号通知「家庭的保育事業等の認可等について」	雇児発1212第6号通知
11	平成27年6月3日雇児保発0603第1号「家庭的保育事業等の設備及び運営に関する基準に定める職員の要件について」	雇児保発0603第1号通知
12	令和3年4月26日内閣府「公定価格に関するFAQ」Ver.19	公定価格に関するFAQ
13	平成10年2月13日児保第3号通知「保育所への入所の円滑化について」	児保第3号通知
14	昭和22年4月7日法律第49号「労働基準法」	労働基準法
15	昭和22年8月30日厚生省令第23号「労働基準法施行規則」	労働基準法施行規則
16	平成12年6月7日障第452号・社援第1352号・老発第514号・児発第575号通知「社会福祉事業の経営者による福祉サービスに関する苦情解決の仕組みの指針について」	児発第575号通知
17	昭和26年3月29日法律第45号「社会福祉法」	社会福祉法
18	平成5年6月18日法律第76号「短時間労働者及び有期雇用労働者の雇用管理の改善等に関する法律」	パートタイム・有期雇用労働法
19	平成13年7月23日雇児発第488号・社援発第1275号・老発第274号「社会福祉法人の認可等の適正化並びに社会福祉法人及び社会福祉施設に対する指導監督の徹底について」	雇児発第488号通知
20	平成3年12月20日基発第712号通知「育児、休業制度の労働基準法上の取扱いについて」	基発第712号通知
21	平成3年5月15日法律第76号「育児休業、介護休業等育児又は家族介護を行う労働者の福祉に関する法律」	育児・介護休業法
22	平成3年10月15日労働省令第25号「育児休業、介護休業等育児又は家族介護を行う労働者の福祉に関する法律施行規則」	育児・介護休業法施行規則
23	平成28年8月2日雇児発第0802第3号「育児休業、介護休業等育児又は家族介護を行う労働者の福祉に関する法律の施行について」	雇児発第0802第3号
24	平成28年8月23日府子本第571号「特定教育・保育等に要する費用の額の算定に関する基準等の実施上の留意事項について」	留意事項通知
25	昭和47年7月1日法律第113号「雇用の分野における男女の均等な機会及び待遇の確保等に関する法律」	均等法

項目	基本的考え方	観 点	関係法令等(準拠を含む)	評価事項	評価
<p>1 利用者の利用状況等 (1)利用定員の遵守</p>	<p>1 利用定員 特定地域型保育事業の利用定員は以下の数とする ① 家庭的保育事業の定員は1人以上5人以下とする。 ② 小規模保育事業A・B型 6人以上19人以下 ③ 小規模保育事業C型 6人以上10人以下 ④ 保育所型事業所内保育事業 20人以上 ⑤ 小規模型事業所内保育事業 19人以下</p> <p>2 利用定員の区分 利用定員を区分ごとに定めるものとする。特定地域型保育事業者(家庭的保育事業、小規模保育事業、または事業所内保育事業を行う者をいう。以下、「事業者」という。)は、特定地域型保育事業所(特定地域型保育事業を行う事業所をいう。以下、「事業所」という。)ごとに、利用定員を年齢ごとに定めること。 事業所内保育事業については、利用定員数の区分に応じて、地域枠(従業員以外のその他の乳幼児の枠)の定員を設定する。</p> <p>3 定員の弾力化 事業者は、利用定員の範囲内で受け入れることを基本とする。ただし、条例に定める面積及び職員配置基準を下回らない範囲内で、利用定員を超えて保育を実施することができる。連続する過去の5年度間常に利用定員を超えており、かつ、各年度の年間平均在所率(当該年度内における各月の初日の在籍児童数の総和を各月の初日の利用定員の総和で除したものをいう。)が120パーセント以上のときは、利用定員の見直しを行うこと。</p>	<p>1 利用定員は遵守されているか。</p> <p>1 区分ごとに利用定員を定めているか。</p> <p>2 事業所内保育事業所は定員枠を設けているか。</p> <p>1 定員の弾力化は認められる範囲内となっているか。</p>	<p>(1)児童福祉法第34条の15 (2)児童福祉法第6条の3第9項、第10項、第11項、第12項 (3)区家基条例第36条、附則第5条 (4)区特基条例第37条第1項 (5)雇児発1212第6号通知第13(1)</p> <p>(1)区特基条例第37条第2項</p> <p>(1)区家基条例第43条</p> <p>(1)区特基条例第48条 (2)留意事項通知別紙6V1, 7V1, 8V1 (3)平成10年2月13日雇児発73号「保育所への入所の円滑化について」 (4)平成28年4月7日雇児発0407第2号「待機児童解消に向けて緊急に対応する施策について」の対応方針について」</p>	<p>(1)入所者の定員超過により、職員、設備、面積等が基準を下回り、その結果施設運営に重大な支障が生じている。</p> <p>(1)区分ごとの利用定員が定められていない。</p> <p>(1)定員枠を設けていない。</p> <p>(1)入所者数が利用定員を超え、かつ弾力化の認められる範囲を上回っている。</p> <p>(2)利用定員の見直し等を行っていない。</p>	<p>C</p> <p>C</p> <p>C</p> <p>B</p> <p>B</p>
<p>(2)認可・確認内容の変更</p>	<p>事業者は、事業の認可・確認事項について変更が生じた時は、杉並区保育課へ変更届を提出すること。</p> <p>① 事業所(施設)の名称 ② 事業所(施設)の所在地 ③ 事業の種類・類型 ④ 事業者(法人または個人)の名称 ⑤ 事業者の住所(法人の場合は主たる事務所の所在地) ⑥ 事業者の代表者(氏名・生年月日・住所・職名)</p>	<p>1 認可・確認内容の変更を届け出ているか。</p>	<p>(1)児童福祉法施行規則第36条の36第3項、第4項 (2)子ども・子育て支援法第44条、第47条 (3)子ども・子育て支援法施行規則第40条、第41条 (4)杉並区家庭的保育事業等の認可に関する規則第4条</p>	<p>(1)認可・確認内容の変更を届け出していない。</p>	<p>C</p>

項目	基本的考え方	観 点	関係法令等(準拠を含む)	評価事項	評価
2 基本方針及び組織 (1)保育サービスの基本的理念	<p>1 子どもの国籍、信条、社会的身分等、又は保育の提供に要する費用負担の有無によって差別的な取扱いをしてはならない。なお、宗教上の行為、祝典、儀式又は行事への参加を強制したりすることは、厳に慎まなければならない。 また、職員に対し、国籍、信条又は社会的身分等を理由として、賃金、労働時間その他の労働条件について、差別的取扱いをしてはならない。</p> <p>2 事業者は、良質かつ適切な内容及び水準の保育の提供を行うことにより、全ての子どもが健やかに成長するために適切な環境が等しく確保されることを目指し、子どもの意思及び人格を尊重し、子どもの立場に立った保育を提供するように努めなければならない。</p>	<p>1 国籍、社会的身分等により差別的な扱いをしたり、信条等を強制したりしていないか。</p> <p>2 子どもの立場に立った保育サービスを提供するよう努めているか。</p>	<p>(1)区家基条例第12条 (2)区特基条例第50条により準用第24条 (3)労働基準法第3条</p> <p>(1)区特基条例第3条</p>	<p>(1)国籍、社会的身分等により差別的扱いをしたり、信条等を強制したりしている。</p> <p>(1)子どもの立場に立った保育の提供に努めていない。</p>	<p>C</p> <p>C</p>
(2)子どもの人権の擁護、虐待の防止	<p>事業者は、子どもの人権に十分配慮するとともに、一人ひとりの人格を尊重して運営を行わなければならない。 また、事業者の職員は、子どもに対し、心身に有害な影響を与える行為をしてはならない。 事業者は、子どもの人権の擁護、虐待の防止等のため、責任者を設置する等必要な体制の整備を行うとともに、職員に対し、研修を実施する等の措置を講ずるよう努めること。</p>	<p>1 子どもの人権の擁護、虐待の防止等のため、責任者を設置する等必要な体制を整備しているか。</p> <p>2 子どもの人権の擁護、虐待の防止等のため、研修を実施する等必要な措置を講じているか。</p>	<p>(1)区家基条例第6条第1項、第13条 (2)区特基条例第3条第4項、第50条により準用第25条 (3)児童福祉法第33条の10 (4)児童虐待の防止等に関する法律(平成12年法律第82号)第3条 (5)保育所保育指針第1章1(5) (6)令和5年3月27日子発0327第5号「保育士による児童生徒性暴力等の防止等に関する基本的な指針について」</p>	<p>(1)子どもの人権の擁護、虐待の防止等のため、必要な体制を整備していない。</p> <p>(2)子どもの人権の擁護、虐待の防止等のため、必要な措置が不十分である。</p>	<p>C</p> <p>B</p>

項目	基本的考え方	観点	関係法令等(準拠を含む)	評価事項	評価
(3)個人情報保護	<p>事業者が事業を行うに当たって個人情報を取り扱う場合、個人情報保護の重要性に鑑み、その取り扱いに適性を期し、個人の権利利益を侵害することのないよう努める必要がある。保有する個人情報について、次のように取り扱うこと。</p> <p>① 利用目的をできる限り特定すること。</p> <p>② 個人情報を取得した場合、速やかに本人に利用目的を通知又は公表すること。</p> <p>③ 個人情報を適正に取得し、またその内容を正確に保つこと。</p> <p>④ 個人情報漏えいの防止及び漏えい時の報告連絡体制等、安全管理措置を講じること。</p> <p>⑤ 法令に基づく場合等を除き、個人情報を第三者に提供する際はあらかじめ本人の同意を得ること。</p> <p>⑥ 例外規定に該当する場合を除き、本人から個人情報の開示を求められた場合は開示すること。</p>	1 個人情報保護に関して、法律等に基づいて適切な措置を講じているか。	<p>(1)個人情報の保護に関する法律(平成15年法律第57号)第15条～第33条</p> <p>(2)杉並区個人情報保護条例(昭和61年条例第39号)第4条</p> <p>(3)個人情報の保護に関する法律についてのガイドライン(通則編)</p> <p>(4)平成25年3月29日雇児発0329第2号、社援発0329第5号「福祉分野における個人情報保護に関するガイドラインについて」</p> <p>(5)保育所保育指針第1章1(5)ウ、第4章1(2)イ</p> <p>(6)区家基条例第20条</p> <p>(7)区特基条例第50条により準用第27条</p>	(1)適切な措置を講じていない。	B
(4)秘密保持	<p>1 事業所の職員は、正当な理由なく、業務上知り得た子ども又はその家族の秘密を漏らしてはならない。</p> <p>事業者は、職員であった者が、正当な理由なく、業務上知り得た子ども又はその家族の秘密を漏らすことがないよう、必要な措置を講じなければならない。</p> <p><必要な措置の例></p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 規程等の整備 ・ 雇用時の取決め <p>2 事業者は、小学校、他の特定教育・保育施設等、地域子ども・子育て支援事業を行う者その他の機関に対して、教育・保育給付認定子ども(以下この項で「子ども」という。)に関する情報を提供する際には、あらかじめ文書により当該教育・保育給付認定保護者(以下この項で「保護者」という。)の同意を得ておかなければならない。</p>	<p>1 事業者は秘密を漏らすことがないよう必要な措置を講じているか。</p> <p>2 情報提供の際に、文書により、保護者の同意を得ているか。</p>	<p>(1)区家基条例第20条</p> <p>(2)区特基条例第50条により準用第27条第1項、第2項</p> <p>(3)保育所保育指針第1章1(5)ウ</p> <p>(1)区特基条例第50条により準用第27条第3項</p>	<p>(1)必要な措置を講じていない。</p> <p>(2)必要な措置が不十分である。</p> <p>(1)文書により保護者の同意を得ていない。</p>	<p>C</p> <p>B</p> <p>C</p>

項目	基本的考え方	観 点	関係法令等(準拠を含む)	評価事項	評価
(5) 苦情解決	<p>1 事業者は、その提供した保育サービスに関する子ども又はその保護者等からの苦情に迅速かつ適切に対応するために、苦情を受け付けるための窓口を設置し、苦情解決の体制や手順等、苦情解決の仕組みを作り、周知する等の必要な措置を講じなければならない。なお、苦情解決に客観性を確保し、利用者の立場や特性に配慮した適切な対応を推進するため第三者委員を設置すること(家庭的保育事業については、設置するよう努めること。)。第三者委員は、中立・公平性の確保のため複数選任が望ましい。</p> <p>2 事業者は、前項の苦情を受け付けた場合には、当該苦情の内容等を記録し、その完結の日から5年間保存しなければならない。また苦情に関して区が実施する事業に協力するよう努めるとともに、苦情に関して区が行う調査に協力し、区からの指導又は助言を受けた場合は、当該指導又は助言に従って必要な改善を行わなければならない。</p> <p>3 事業者は、その提供した特定教育・保育に関し、子ども・子育て支援法第14条第1項の規定により区が行う報告若しくは文書その他の物件の提出若しくは提示の命令又は区の職員が行う質問若しくは当該事業所の設備若しくは帳簿書類その他の物件の検査に応じ、区からの指導又は助言を受けた場合は、当該指導又は助言に従って必要な改善を行わなければならない。</p> <p>4 事業所は、区からの求めがあった場合には、区からの指導等に従って行った改善の内容を区に報告しなければならない。</p>	<p>1 苦情を受け付けるための窓口を設置するなど苦情解決に適切に対応しているか。</p> <p>2 事業所内への掲示、文書の配布等により、苦情解決の仕組みが利用者に周知されているか。</p> <p>1 苦情を受け付けた場合、苦情の内容等を記録、保存しているか。</p> <p>2 苦情に関して区が行う事業、調査に協力し、指導等に従って必要な改善を行っているか。</p> <p>1 区が行う報告、提出、提示の命令又は質問、検査に応じ、指導又は助言に従って必要な改善を行っているか。</p> <p>1 区からの求めに応じ、改善の内容を報告しているか。</p>	<p>(1) 社会福祉法第82条 (2) 児発第575号通知 (3) 13 福総監第917号 (4) 区特基条例第50条により準用第30条第1項</p> <p>(1) 区特基条例第50条により準用第30条第2項 (2) 区特基条例第34条第2項 (3) 区特基条例第50条により準用第30条第3項 (4) 区特基条例第50条により準用第30条第4項</p> <p>(1) 子ども・子育て支援法第14条第1項 (2) 区特基条例第50条により準用第30条第4項</p> <p>(1) 区特基条例第50条により準用第30条第5号</p>	<p>(1) 苦情の受付窓口、苦情解決の仕組みを整備していない。 (2) 苦情解決の仕組みが不十分である。 (3) 利用者への周知が行われていない。 (4) 利用者への周知が不十分である。 (5) 第三者委員を設置していない。(家庭的保育事業は除く) (6) 苦情への対応が不十分である。</p> <p>(1) 苦情に関する記録がされていない、または保存していない。 (2) 苦情に関する記録が不十分である。 (3) 区の事業に協力するよう努めていない。</p> <p>(1) 区の求めに適切に対応していない。</p> <p>(1) 改善の内容を区に報告しない。 (2) 報告が不十分である。</p>	<p>C</p> <p>B</p> <p>C</p> <p>B</p> <p>C</p> <p>C</p> <p>B</p> <p>B</p> <p>C</p> <p>B</p>
(6) サービスの質の評価等	<p>1 事業者は、自らその提供する保育の質の評価を行い、常にその改善を図らなければならない。 また、事業者は、3年に1回程度定期的に外部の者による評価(「福祉サービス第三者評価」、または、利用者によるサービス内容のアンケートなど)を受け、それらの結果を公表し、改善を図るなど、サービスの質の向上に努めなければならない。</p> <p>2 事業者は、運営に当たって地域住民や地域の活動等との連携及び協力を行うなどの、地域との交流に努めなければならない。</p>	<p>1 サービスの質の自己評価等を行い、改善を図っているか。</p> <p>2 定期的に外部の者による評価を受け、その結果を公表し、サービス内容の改善を図っているか。</p> <p>1 地域との交流に努めているか。</p>	<p>(1) 区家基条例第6条第3項、区特基条例第45条第1項 (2) 区家基条例第6条第4項、区特基条例第45条第2項 (3) 平成26年9月5日雇児発0905第2号「家庭的保育事業等の設備及び運営の基準の運用上の取り扱いについて」2(1)</p> <p>(1) 区家基条例第6条第2項 (2) 区特基条例第50条により準用第31条</p>	<p>(1) 自己評価等、サービスの質の向上のための取組を行っていない。 (2) 定期的に外部の者による評価を受け、その結果を公表し、サービス内容の改善を図っていない。</p> <p>(1) 地域との交流に努めていない。</p>	<p>C</p> <p>B</p> <p>B</p>

項目	基本的考え方	観点	関係法令等(準拠を含む)	評価事項	評価
(7)事業計画	<p>1 事業計画は単なる理念やスローガンのものではなく、法人及び事業所が当該年度に実施する基本的な事項を具体化するものでなければならない。また、計画を実施するためには、内容を職員が十分に理解している必要がある。事業計画の作成にあたって職員と十分に討議し、決定後はよく周知することが求められる(家庭的保育事業については、作成するよう努めること)。</p> <p>2 事業計画の内容</p> <ul style="list-style-type: none"> ・運営の基本方針(サービス内容、行事、健康管理等) ・組織管理(職員構成、職務分担、職員研修等) ・安全管理、防火管理 <p>3 立案の方法・内容</p> <p>事業計画は前年度の事業の反省及び職員の意見等を反映した上で立案することが必要である。</p> <p>なお、予算、保育所保育指針に基づく全体的な計画との関連が十分であることが求められる。</p>	1 事業計画を適切に作成しているか。	(1)区家基条例第19条 (2)区特基条例第49条	(1)事業計画書を作成していない。 (2)内容、決定の方法等が不適切である。	C B
(8)事業報告	<p>1 事業報告書は当該年度の実施した事業の総括であり、各事務所に備えておくこと。</p> <p>社会福祉法人が運営する事業者においては、定款の規定により作成の上、社会福祉法第45条の27の定めにより、毎会計年度終了後3か月以内に作成し、各事務所に備えておく必要がある(家庭的保育事業については、作成するよう努めること)。</p> <p>2 事業報告の内容</p> <ul style="list-style-type: none"> ・運営の基本方針(サービス内容、行事、健康管理等) ・組織管理(職員構成、職務分担、職員研修等) ・安全管理、防火管理 <p>3 立案の方法・内容</p> <p>事業報告の作成に当たっては、事業計画に沿い、事業の総括を行った上で作成することが必要である。</p>	1 事業報告書を適切に作成しているか。	(1)区家基条例第19条 (2)区特基条例第49条 (3)社会福祉法第45条の27 (4)雇児発1212第6号通知第13(4)	(1)事業報告書を作成していない。 (2)内容、決定の方法等が不適切である。	C B
(9)運営委員会 【社会福祉法人又は学校法人以外が設置する家庭的保育事業等】	<p>社会福祉法人又は学校法人以外が設置する事業者については、社会福祉事業について知識経験を有する者、保育サービスの利用者(これに準ずる者を含む。)及び実務を担当する幹部職員を含む運営委員会(家庭的保育事業等の運営に関し、当該家庭的保育事業等の設置者の相談に応じ、又は意見を述べる委員会をいう。)を設置し、適正に運営する必要がある。</p> <p>ただし、経営者に保育サービスの利用者(これに準ずる者を含む。)及び実務を担当する幹部職員を含む場合を除く。</p> <p>※家庭的保育事業は、設置するよう努めること。</p>	1 運営委員会を設置し、適正に運営しているか。	(1)平成26年12月12日雇児発1212第6号「家庭的保育事業等の認可等について」第13(3)ウ	(1)運営委員会を設置していない。 (2)運営委員会の運営が不適正である。	B B

項目	基本的考え方	観点	関係法令等(準拠を含む)	評価事項	評価
(10) 運営規程の策定及び重要事項の揭示	<p>1 事業者は、次の各号に掲げる事業の運営についての重要事項に関する規程(運営規程)を定めておかなければならない。</p> <p>なお、全部又は一部について、別途規定している場合、重ねて規定する必要はなく、別途定めている規定を示せば足りる。</p> <p>① 事業の目的及び運営の方針 ② 提供する保育の内容 ③ 職員の職種、員数及び職務の内容 ④ 保育の提供を行う日・時間、提供を行わない日 ⑤ 保護者から受領する費用の種類、その額及び支払いを求める理由 ⑥ 乳児、幼児の区分ごとの利用定員 ⑦ 利用の開始、終了に関する事項及び利用に当たっての留意事項(区特基条例第39条第2項の規定による選考の方法を含む) ⑧ 緊急時等における対応方法 ⑨ 非常災害対策 ⑩ 虐待の防止のための措置に関する事項 ⑪ その他家庭的保育事業等の運営に関する重要事項</p> <p>2 事業者は、事業を実施する事業所の見やすい場所に、運営規程の概要、職員の勤務の体制、利用者負担その他利用申込者の特定教育・保育施設の選択に資すると認められる重要事項を掲示しなければならない。</p>	<p>1 運営規程を適切に定めているか。</p> <p>2 事業所の見やすい場所に、運営規程の概要等、利用者の施設選択に資する重要事項を掲示しているか。</p>	<p>(1) 区家基条例第18条 (2) 区特基条例第46条 (3) 平成26年9月5日雇児発0905第2号「家庭的保育事業等の設備及び運営に関する基準の運用上の取扱いについて」2(4) (4) 平成26年9月5日雇児発0905第4号「子ども・子育て支援新制度に係る児童福祉施設の設備及び運営に関する基準の一部改正について」(参考)</p> <p>(1) 区特基条例第50条により準用第23条</p>	<p>(1) 運営規程等を定めていない。</p> <p>(2) 運営規程の内容が不十分である。</p> <p>(1) 事業所の見やすい場所に、運営規程の概要等の重要事項を掲示していない。</p>	<p>C</p> <p>B</p> <p>B</p>
(11) 分掌事務	<p>職員の分掌事務を明確にすることは、適切に職務を遂行し、かつ責任の所在を明らかにする観点から必要なことである。</p>	<p>1 各職員の職務分掌は明確になっているか。</p>	<p>(1) 区家基条例第19条 (2) 区特基条例第47条</p>	<p>(1) 職務分掌が明確でない。</p>	<p>B</p>
(12) 業務日誌(園日誌)	<p>事業所の状況を的確に把握するため、業務(園)日誌は事業所の日常業務を一覧できる内容である必要がある。</p> <p>施設長等が日々の施設運営上重要と認めることを記録する。 <例> 職員及び子どもの出欠状況、園行事、会議、出張、来訪者等</p>	<p>1 業務(園)日誌を適切に作成しているか。</p>	<p>(1) 区家基条例第19条 (2) 区特基条例第50条により準用第12条 (3) 区特基条例第49条</p>	<p>(1) 業務(園)日誌が未作成である。</p> <p>(2) 記録、保管が不十分である。</p>	<p>B</p> <p>B</p>
(13) 職員会議	<p>事業運営の良否は、施設長の意思決定とリーダーシップによることが大であるが、全職員が一体となって運営に協力してはじめてサービスの向上を図ることができる。そこで施設長は職員を招集して、事業所の運営方針及びその内容等を十分協議し、民主的運営を図る必要がある。</p> <p>職員会議の実施内容は、全体職員会議(各担当部門の代表者参加による場合も含む。)、保育カリキュラム会議、給食(献立)会議、事務連絡会議等多様である。職員会議の開催時間は、基本的には事業者側の判断に委ねられる。 記録は、日時、場所、出席者、欠席者、会議内容等を記録する。</p>	<p>1 職員会議の開催方法等は適切か。</p> <p>2 会議録を作成しているか。</p>	<p>(1) 保育所保育指針第1章1(5)ウ、3(5)イ、第5章1 (1) 区家基条例第19条 (2) 区特基条例第49条</p>	<p>(1) 職員会議の参加者等が不適切である。 (2) 単なる情報伝達場となっており、職員の意見が出やすいような配慮をしていない。 (3) 欠席者等へ周知していない。</p> <p>(1) 会議録を作成してない。</p>	<p>B</p> <p>B</p> <p>B</p> <p>B</p>

項目	基本的考え方	観点	関係法令等(準拠を含む)	評価事項	評価
(14) 感染症及び食中毒の予防及びまん延の防止	児童福祉施設は、職員に対し、感染症及び食中毒の予防及びまん延の防止のための研修並びに感染症の予防及びまん延の防止のための訓練を定期的実施するように努めなければならない。	1 定期的に研修・訓練を実施しているか。	(1) 区家基条例第 14 条第 2 項	(1) 感染症及び食中毒の予防等について研修・訓練を実施していない。	B
3 就業規則等の整備 (1) 就業規則	<p>1 就業規則は当該事業所職員の労働条件を具体的に定めたものであり、職員の給与とともに、職員処遇の中心をなすものである。事業所の円滑かつ適正な運営を期す上からも、これらを踏まえた職員処遇が適正に行われていることが必要である。</p> <p>2 非常勤職員就業規則 事業主は、短時間労働者について、労働基準法、最低賃金法、労働安全衛生法、労働者災害補償保険法等の労働者保護法令を遵守する必要がある。</p> <p>3 職員 10 人以上の事業所にあつては就業規則の作成と労働基準監督署への届出が義務付けられており、変更届についても同様である。 10 人未満の事業所については、作成の義務はないが、労働条件の明示の観点から作成することが望ましい。</p> <p>4 就業規則に記載すべき事項 (1) 絶対的必要記載事項(就業規則に必ず記載しなければならない事項) ① 労働時間に関する事項…始業及び終業の時刻、休憩時間、休日、休暇(産休、育児休業、介護休業、子の看護休暇を含む。)並びに交替制の場合は就業時転換 ② 賃金に関する事項…賃金の決定、計算、支払の方法、賃金の締切り及び支払の時期並びに昇給 ③ 退職に関する事項…退職の条件及び方法並びに解雇の条件及び方法</p>	<p>1 就業規則を整備しているか。</p> <p>2 非常勤職員就業規則を整備しているか(就業規則において非常勤職員に関する事項を定めていない場合)。</p> <p>3 就業規則の内容は適正か。また、就業規則の内容と現状に差異はないか。 ・有給休暇の付与日数は労働基準法で定められた日数であるか。 ・勤務時間及び休憩時間は法定時間を遵守しているか。 ・65 歳までの定年の引上げ、継続雇用制度の導入等を定めているか(平成 25 年 4 月 1 日施行)</p> <p>4 労働基準監督署に届け出ているか。</p>	<p>(1) 労働基準法第 32 条～41 条、第 89 条、第 90 条</p> <p>(1) パートタイム・有期雇用労働法第 7 条 (2) 平成 19 年 10 月 1 日厚生労働省告示第 326 号「事業主が講ずべき短時間労働者の雇用管理の改善等に関する措置等についての指針」</p> <p>(1) 労働基準法第 32 条～41 条、第 89 条、第 90 条 (2) 高年齢者等の雇用の安定等に関する法律(昭和 46 年法律第 68 号) 第 9 条</p> <p>(1) 労働基準法第 89 条、第 90 条第 2 項</p>	<p>(1) 就業規則を作成していない。</p> <p>(1) 非常勤職員就業規則を作成していない。</p> <p>(1) 必要記載事項を規定していない。 (2) 就業規則の内容が不適正である。 (3) 就業規則と現状に差異がある。</p> <p>(1) 労働基準監督署に届け出していない。</p>	<p>B</p> <p>B</p> <p>B</p> <p>B</p> <p>B</p> <p>B</p>

項目	基本的考え方	観点	関係法令等(準拠を含む)	評価事項	評価
	<p>(2) 相対的必要記載事項(当該事業所に適用されるべき一定の「定めをする場合」には、就業規則に必ず記載しなければならない事項)</p> <p>① 退職手当に関する事項…適用される労働者の範囲、手当の決定、計算及び支払の方法並びに手当の支払時期</p> <p>② 臨時の賃金及び最低賃金額に関する事項</p> <p>③ 労働者に負担させる食費、作業用品その他に関する事項</p> <p>④ 安全及び衛生に関する事項</p> <p>⑤ 職業訓練に関する事項</p> <p>⑥ 災害補償及び業務外の傷病扶助に関する事項</p> <p>⑦ 表彰及び制裁に関する事項…種類及び程度</p> <p>⑧ 上記以外の当該事業所の労働者のすべてに適用される事項</p> <p>なお、「定めをする場合」とは、新たに規程を設ける場合のみにとどまらず、「不文の慣行又は内規がある場合」も該当する。従って、「定めをする場合」に該当する事項がある場合には、必ず成文化する必要があり、その範囲では絶対的必要記載事項と同じ扱いとする。</p>				
(2)給与規程	<p>1 給与規程は、就業規則の一部であるから、作成、改正、届出等についても就業規則と一体のものであるが職員の給与が職員の処遇上極めて重要であることから適正に整備されていることが必須である。</p> <p>2 職員の給与の支給については、労働基準法(差別的扱いの禁止、男女同一、賃金支払い方法、非常時払い、時間外勤務手当等)及び最低賃金法で定める事項の外は、当該法人における労働契約、就業規則、労働協約が尊重される。</p> <p>3 給与及び諸手当の支給基準が明確であり、また、基準に従って支給すること。</p>	<p>1 給与規程を整備し、労働基準監督署に届け出ているか。</p> <p>2 給与規程の内容は適正であるか。また、規程と実態に差異はないか。</p> <p>3 給与及び諸手当等の支給基準が明確になっているか。</p>	<p>(1)労働基準法第 89 条、第 90 条</p> <p>(1)労働基準法第 3 条、第 4 条、第 24 条～第 28 条、第 37 条、第 89 条</p> <p>(1)労働基準法第 15 条、第 89 条 (2)雇児発第 488 号通知 5 (3)オ</p>	<p>(1)給与規程を整備していない。</p> <p>(2)労働基準監督署に届け出していない。</p> <p>(1)給与規程の内容が不適正である。</p> <p>(2)給与規程と実態に差異がある。</p> <p>(1)給与及び諸手当の支給基準が明確でない。</p>	<p>B</p> <p>B</p> <p>B</p> <p>B</p> <p>B</p>

項目	基本的考え方	観点	関係法令等(準拠を含む)	評価事項	評価
(3) 育児休業規程等	<p>1 育児休業</p> <p>(1) 育児休業とは、1歳(一定の条件下で2歳)に満たない子を養育する労働者が休業を申し出ることにより労働契約関係が存続したまま労働者の労務提供義務が消滅することをいう。ただし、次の労働者について育児休業をすることができないとの労使協定がある場合、事業主は申出を拒むことができる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・雇用された期間が1年に満たない場合 ・申出の日から1年以内(1歳6か月及び2歳まで育児休業する場合には6か月以内)に雇用関係が終了することが明らかな場合 ・1週間の所定労働日数が2日以下の場合 <p>※両親ともに育児休業をする場合は、子が1歳2か月に達するまで1年間以内の休業が可能。</p> <p>育児休業は就業規則の記載事項である「休暇」に含まれることから、就業規則において次の事項を定め、労働基準監督署に届け出る必要がある。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・育児休業の対象となる労働者の範囲等の付与要件 ・育児休業の取得に必要な手続 ・育児休業期間 <p>※出生時育児休業(産後パパ育休)</p> <p>養育する子について、休業を申し出ることにより、子の出生後、8週間以内に4週間以内の期間を定めてする休業。ただし、次の労働者について育児休業をすることができないとの労使協定がある場合は事業主は申出を拒むことができる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・申出があった日から8週間以内に雇用関係が終了することが明らかな場合 ・1週間の所定労働日数が2日以下の場合 <p>(2) 雇用環境の整備及び雇用管理等に関する措置</p> <p>事業主は、育児休業申出等が円滑に行われるようにするため、次の各号のいずれかの措置を講じなければならない。</p> <ol style="list-style-type: none"> ① その雇用する労働者に対する育児休業に係る研修の実施 ② 育児休業に関する相談体制の整備 ③ その他厚生労働省令で定める育児休業に係る雇用環境の整備に関する措置 	<p>1 育児休業に関する規程を整備し、労働基準監督署に届け出ているか。(就業規則において育児休業に関する事項を定めていない場合)</p> <p>2 雇用環境の整備及び雇用管理等に関する措置をしているか。</p>	<p>(1) 労働基準法第89条、第90条 (2) 基発第712号通知 (3) 育児・介護休業法第5条～第10条、第16条の8、第17条、第19条、第21条、第21条の2、第23条、第24条 (4) 育児・介護休業法施行規則第8条、第21条の2～第22条の2 (5) 雇児発第0802第3号</p> <p>(1) 育児・介護休業法第22条 (2) 育児・介護休業法施行規則第71条の2</p>	<p>(1) 育児休業に関する規程を整備していない。</p> <p>(2) 育児休業に関する規程の内容に不備がある。</p> <p>(3) 労働基準監督署に届け出していない。</p> <p>(1) 育児休業に関する研修等の措置がされていない。</p>	<p>B</p> <p>B</p> <p>B</p> <p>B</p>

項目	基本的考え方	観点	関係法令等(準拠を含む)	評価事項	評価
	<p>(3) 妊娠又は出産等についての申出があった場合は、育児休業に関する制度その他の厚生労働省令で定める事項を知らせるとともに意向確認のための面談等の措置を講じなければならない。</p> <p>《周知事項》</p> <p>①育児休業・産後パパ育休に関する制度 ②育児休業・産後パパ育休の申し出先 ③育児休業給付に関すること ④労働者が育児休業・産後パパ育休期間について負担すべき社会保険料の取り扱い</p> <p>《周知・意向確認の方法》</p> <p>①面談 ②書面交付 ③FAX ④電子メール等のいずれか</p> <p>また、育児休業期間中の待遇、休業後の賃金、配置その他の労働条件に関する事項をあらかじめ定めるよう努めなければならない。</p> <p>加えて、その雇用する労働者のうち、その小学校就学の始期に達するまでの子を養育する労働者に関して、労働者の申出に基づく育児に関する目的のために利用することができる休暇を与えるための措置を講ずるよう努めなければならない。</p> <p>(4) 育児休業の取得の状況の公表 常時雇用する労働者の数が千人を超える事業主は、厚生労働省令で定めるところにより、毎年少なくとも一回、その雇用する労働者の育児休業の取得の状況として厚生労働省令で定めるものを公表しなければならない。</p>	<p>3 育児休業および勤務時間の短縮等の措置を職員に周知しているか。</p> <p>4 毎年少なくとも一回、その雇用する労働者の育児休業の取得の状況として厚生労働省令で定めるものを公表しているか。</p>	<p>(1) 育児・介護休業法第 21 条第 1 項、第 2 項 (2) 育児・介護休業法施行規則第 69 条の 3、第 69 条の 4</p> <p>(1) 育児・介護休業法第 22 条の 2 (2) 育児・介護休業法施行規則第 71 条の 3、第 71 条の 4</p>	<p>(1) 職員に周知していない。又は不十分である。</p> <p>(1) 労働者の育児休業の取得の状況を公表していない。</p>	<p>B</p> <p>B</p>

項目	基本的考え方	観点	関係法令等(準拠を含む)	評価事項	評価
	<p>2 介護休業 介護休業とは、要介護状態にある対象家族を介護する労働者が休業を申し出ることにより労働契約関係が存続したまま労働者の労務提供義務が消滅することをいう。対象家族1人につき通算 93 日まで3回を上限として分割して取得することができる。 ただし、次の労働者について介護休業をすることができないとの労使協定がある場合、事業主は申出を拒むことができる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・雇用された期間が1年に満たない場合 ・申出の日から 93 日以内に雇用関係が終了することが明らかな従業員 ・1週間の所定労働時間が2日以下の従業員 <p>介護休業は就業規則の記載事項である「休暇」に含まれることから、就業規則において次の事項を定め、労働基準監督署に届け出る必要がある。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・介護休業の対象となる労働者の範囲等の付与要件 ・介護休業の取得に必要な手続 ・介護休業期間 <p>また、介護休業期間中の待遇、休業後の賃金、配置その他の労働条件に関する事項をあらかじめ定めるとともに、これを労働者に周知させるための措置を講ずるよう努めなければならない。</p> <p>3 労働時間の制限等 (1) 勤務時間の短縮等の措置 ① 3歳に満たない子を養育する労働者であって育児休業をしていないものについては、事業主は、労働者が就業しつつ子を養育することを容易にするため、労働者の申出に基づき、1日の所定労働時間を6時間とする短時間勤務制度が義務付けられる。 なお、労使協定により適用除外とした場合、以下の代替措置を講じなければならない。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・育児休業の制度に準ずる措置 ・フレックスタイム制 ・始業・終業時間の繰り上げ、繰り下げ ・託児施設の設置運営その他これに準ずる便宜の供与 	<p>5 介護休業に関する規程を整備し、労働基準監督署に届け出ているか。(就業規則において介護休業に関する事項を定めていない場合)</p> <p>1 育児・介護休業及び勤務時間の短縮等の措置を適切に講じているか。</p>	<p>(1)労働基準法第 89 条、第 90 条 (2)育児・介護休業法第 11 条～第 16 条、第 18 条、第 20 条、第 23 条 (3)雇児発第 0802 第 3 号通知</p> <p>(1)育児・介護休業法第 16 条の 8～第 20 条の 2、第 23 条～24 条</p>	<p>(1)介護休暇に関する規程を整備していない。 (2)介護休業に関する規程の内容に不備がある。 (3)労働基準監督署に届け出していない。</p> <p>(1)育児・介護休業および勤務時間の短縮等の措置を講じていない。</p>	<p>B B B</p> <p>B</p>

項目	基本的考え方	観点	関係法令等（準拠を含む）	評価事項	評価
	<p>②要介護状態にある対象家族を介護する労働者については、事業主は、労働者が就業しつつ要介護状態にある対象家族を介護することを容易にするため、次のいずれかの方法を講じる必要がある。介護休業とは別に利用開始から3年の間で2回以上の利用が可能。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 短時間勤務制度 ・ フレックスタイム制 ・ 始業・終業時間の繰り上げ、繰り下げ ・ 介護サービスを利用する場合の費用の助成その他これに準ずる制度 <p>(2) 時間外労働の制限 小学校就学前の子を養育する者から、当該子を養育するために請求があったとき又は要介護状態にある対象家族を介護する労働者から、当該対象家族を介護するために請求があったときは、制限時間を超えて労働時間を延長してはならない。ただし、事業の正常な運営を妨げる場合は、この限りではない。(制限時間1月24時間、1年150時間)</p> <p>(3) 深夜労働の制限 小学校就学前の子を養育する者から、当該子を養育するために請求した場合又は要介護状態にある対象家族を介護する労働者から、当該対象家族を介護するために請求があった時は、午後10時から午前5時までの間において労働させてはならない。ただし、事業の正常な運営を妨げる場合は、この限りではない。</p> <p>4 子の看護休暇 小学校就学前の子を養育する労働者は、申し出ることにより、病気・けがをした子の看護のほか、予防接種、健康診断を受けさせるために、労働者1人につき1年度において5日（子が2人以上の場合、10日）休暇を取得できる。看護休暇は1日単位又は時間単位で取得することができる。</p> <p>5 介護休暇 要介護状態にある対象家族の介護を行う労働者は、事業主に申し出ることにより、1年度において5日まで（その介護、世話をする対象家族が2人以上の場合、10日）、介護のために休暇を取得することができる。介護休暇は半日（所定労働時間の1/2）単位で取得することができる。</p> <p>6 労働者の配置に関する配慮 事業主は、労働者を転勤させようとする場合には、子の養育又は家族の介護の状況に配慮しなければならない。</p>	<p>2 子の看護休暇制度について、適切に実施しているか。</p> <p>3 介護休暇制度について、適切に実施しているか。</p> <p>4 労働者の配置について、配慮しているか。</p>	<p>(1) 育児・介護休業法第16条の2～第16条の4</p> <p>(1) 育児・介護休業法第16条の5～第16条の7</p> <p>(1) 育児・介護休業法第26条</p>	<p>(2) 時間外労働の制限について、適切に実施していない。</p> <p>(3) 深夜労働の制限について、適切に実施していない。</p> <p>(1) 子の看護休暇制度について、適切に実施していない。</p> <p>(1) 介護休暇制度について、適切に実施していない。</p> <p>(1) 労働者の配置について、配慮していない。</p>	<p>B</p> <p>B</p> <p>B</p> <p>B</p>

項目	基本的考え方	観点	関係法令等（準拠を含む）	評価事項	評価
(4) 旅費	職員が業務又は研修のため出張する場合は、その旅費(実費及び手当)を支給するものとする。旅費、日当の支払い、宿泊費の定額払いを行う場合は根拠となる規程が必要である。	1 旅費に関する規程を整備しているか。また、規程と実態に差異はないか。	(1) 労働基準法第 89 条、第 90 条	(1) 旅費に関する規程を整備していない。 (2) 旅費に関する規程が内容不備又は規程内容と実態に差異がある。	B B
(5) 労使協定等	<p>1 36 協定 時間外及び休日に労働させる場合は協定を締結する必要がある。締結に当たっては、労働者の過半数で組織する労働組合の代表者、代表者がいない場合は労働者の過半数を代表する者と使用者との間で書面による協定を結び、労働基準監督署に届け出る必要がある。 なお、届出の様式は労働基準監督署の窓口に備えられており、有効期間は1年が一般的である。また、協定は法の適用単位である事業場ごとに締結しなければならない。</p> <p>2 24 協定 賃金から給食費や親睦会費など、法令で定められている税金、社会保険料等以外の経費を控除する場合は、36 協定と同様の手続きをもって「賃金控除協定」を締結する必要がある。</p> <p>3 変形労働時間制 (1) 1 か月以内の変形労働時間制 1 か月以内の期間を単位とする変形労働時間制を行う場合には、労使協定の締結又は就業規則その他これに準じるものによる規定をし、労働基準監督署に届け出る必要がある。 (2) 1 か月超 1 年以内の変形労働時間制 1 か月を超え 1 年以内の期間を単位とする変形労働時間制を行う場合には、労使協定を締結し、労働基準監督署に届け出る必要がある。また、1 年単位の変形労働時間制を採用した場合は、始業・就業、休憩時間、休日を就業規則に定め、労働基準監督署に届け出る必要がある。 (3) フレックスタイム制 3 か月以内の一定の総労働時間を定め、労働者がその範囲で各日の始業及び就業の時刻を選択して働く場合には、労使協定の締結及び就業規則その他これに準じるものによる規定をし、労働基準監督署に届け出る必要がある。なお、期間が 1 か月以内の場合は、労使協定については労働基準監督署への届け出を必要としない。</p>	<p>1 36 協定を締結し、労働基準監督署に届け出ているか。(時間外及び休日に労働させる場合)</p> <p>2 24 協定を適切に締結しているか。(賃金から法定外経費を控除する場合)</p> <p>3 変形労働時間制に関する協定を締結し、労働基準監督署に届け出ているか</p>	<p>(1) 労働基準法第 36 条</p> <p>(1) 労働基準法第 24 条</p> <p>(1) 労働基準法第 32 条の 2、第 32 条の 4</p>	<p>(1) 36 協定を締結していない。 (2) 労働基準監督署に届け出していない。 (3) 協定内容と現状に差異がある。</p> <p>(1) 24 協定を締結していない。 (2) 協定内容、手続きが不適切である。</p> <p>(1) 変形労働時間制(1 か月以内)に関する協定を締結せず、就業規則等にも規定していない。 (2) 変形労働時間制(1 か月超 1 年以内)に関する協定を締結していない。 (3) フレックスタイム制に関する協定の締結及び就業規則等の規定がない。 (4) 労働基準監督署に届け出していない。</p>	B B B B B B B

項目	基本的考え方	観点	関係法令等（準拠を含む）	評価事項	評価
(6)周知等の措置	<p>1 就業規則及び協定等については、職員に周知しなければならない。</p> <p>2 賃金は、通貨による支払が原則であるが、個々の労働者の同意を得た場合には、口座振込により支払うことができる。なお、労働者が賃金の振込先として本人名義の預金口座を指定していれば同意を得ていると解される。</p>	<p>1 就業規則等を職員に周知しているか。</p> <p>2 口座振込に関する個人の書面による同意を得ているか。</p>	<p>(1)労働基準法第106条 (2)育児・介護休業法第21条の2</p> <p>(1)労働基準法施行規則第7条の2 (2)昭和63年1月1日基発第1号「改正労働基準法の施行について」</p>	<p>(1)職員に周知していない。又は不十分である。</p> <p>(1)個人の同意を得ていない</p>	<p>B</p> <p>B</p>
4 職員の状況 (1)職員配置(共通事項)	<p>1 特定地域型保育事業における職員の配置は、区家基条例及び「留意事項通知」に基づく要件をすべて充足した配置とすること。 施設類型別職員配置基準は、以下(2)職員配置(家庭的保育事業)から(8)職員配置(小規模型事業所内保育事業{B型基準})までのとおりとする。</p> <p>2 保育に直接従事する職員の数は、児童の定員及び入所児童数のそれぞれについて、区家基条例及び留意事項通知における基本分単価に定める計算式により算出し、いずれか多い方の員数とする。 ただし、保育所の開設後において、子ども・子育て支援法(平成24年法律第65号)により定める利用定員(以下「利用定員」という。)を定員と異なる人数に設定した場合においては、利用定員及び入所児童数のそれぞれについて、同様に算出し、いずれか多い方とする。 <常勤職員の定義> 各事業所の就業規則等で定めた常勤のうち、以下の要件をすべて満たすもの。 ① 期間の定めのない労働契約を結んでいる者(ただし、1年以上の労働契約を結んでいる者を含む。) ② 労働基準法施行規則第5条第1項第1号の3により、明示された就業場所が当該事業所であり、かつ従事すべき業務が保育であること。 ③ 1日6時間以上かつ月20日以上常態的に勤務し、当該事業所を適用事業所とする社会保険の被保険者であること(ただし、常時従業員が5人未満の事業所は除く)。 ※ 同一敷地内に設置されている社会福祉施設の職員の施設間の兼務を行うことができる。 なお、原則として、小学校教諭が行う保育は5歳以上児、幼稚園教諭が行う保育は3歳以上児とすることが望ましい。</p>	<p>1 職員配置は適正に行われているか。</p>	<p>(1)区家基条例第23条、第29条、第32条、第35条、第46条、第50条、附則第4条 (2)区特基条例第47条 (3)区家基施行規則第8条、第10条、第13条、第15条 (4)留意事項通知 別紙5、別紙6、別紙7、別紙8</p> <p>(1)平成10年3月31日9福子推第1047号「保育所設置認可等事務取扱要綱」第24職員(1)職員配置基準ア(準拠)</p>	<p>(1)職員配置が適正に行われていない。</p>	<p>C</p>

項目	基本的考え方	観点	関係法令等（準拠を含む）	評価事項	評価
	<p>3 短時間勤務の職員及びその他の常勤以外の職員の導入 保育に直接従事する者は、子どもを長時間にわたって保育できる常勤の職員をもって確保することを基本とするが、施設本来の事業の円滑な運営を阻害せず、保育時間や利用者数の変化に柔軟に対応すること等により、子どもの処遇水準の確保が図られる場合には、区条例上の定数の一部に短時間勤務職員及びその他常勤以外の職員を充てても差し支えない。 ただし、この場合、常勤の職員に代えて短時間勤務の職員及びその他の常勤以外の職員を充てる場合の勤務時間数が、常勤の職員を充てる場合の勤務時間数を上回ることを。</p> <p>4 保育士配置に係る特例について (1) 保健師、又は看護師 (小規模保育事業A型、小規模保育事業B型、保育所型事業所内保育事業、及び小規模型事業所内保育事業) 認可基準上定員見合いで必要となる保育士数の算定にあたっては、保健師又は看護師を1人に限り(以下「保健師等1人」という。)、保育士とみなすことができる。</p> <p>(2) 年齢別配置基準により算定した保育士数が1人となる時間帯における「区長が認める者」 (小規模保育事業A型及び保育所型事業所内保育事業) 朝夕等の児童が少数となる時間帯で、登園児童に対する必要保育士数が1人となる場合、保育士(児童福祉法第18条の18第1項の登録を受けた者をいう。以下同じ。)1名に加え、保育士と同等の知識及び経験を有すると区長が認める者(以下「区長が認める者」という。)を置かなければならない。 <区長が認める者> 次のaからcのいずれかに該当する者であって、かつ、当該保育施設の施設長及び設置者代表者が、当該職員の保育者としての能力を確認した上で適当と認める者。 a 児童福祉法第7条に規定する児童福祉施設等、児童福祉法第6条の3第8項、第10項、第12項に係る事業、東京都認証保育所事業実施要綱に基づく認証保育所又は区市町村が独自に行う保育施設・事業であって区市町村長が適当と認める事業所・事業のいずれかで、継続して1年以上、乳幼児の直接処遇を担当した経験を有する者。 なお、継続して勤務した期間中の勤務実績は少なくとも月平均80時間以上とする。 b 児童福祉法第6条の3第9項に定める家庭的保育者 c 子育て支援員研修事業実施要綱(平成27年5月21日雇児発0521第18号)に基づく子育て支援員研修(子育て支援員専門研修(地域保育コース)のうち選択科目を地域型保育とする研修)を修了した者</p>		<p>(1) 令和3年3月19日子発0319第1号「保育所等における短時間勤務の保育士の取扱いについて」(準拠) (2) 公定価格に関するFAQ No. 9</p> <p>(1) 区家基条例 第29条第3項[小規模A型]、 第32条第3項[小規模B型]、 第46条第3項[保育所型事業所内] 第50条第3項[小規模型事業所内]</p> <p>(2) 雇児発0218第2号通知</p>		

項目	基本的考え方	観点	関係法令等（準拠を含む）	評価事項	評価
	<p>(3) 幼稚園教諭、小学校教諭、養護教諭（小規模保育事業A型及び保育所型事業所内保育事業） 幼稚園教諭若しくは小学校教諭又は養護教諭であつて当該保育施設の施設長及び設置者代表者が、当該職員の保育者としての能力を確認した上で適当と認める者(以下「幼稚園教諭等」という。)を保育士とみなすことができる。</p> <p>(4) 1日8時間を超えて開所する施設における「区長が認める者」（小規模保育事業A型及び保育所型事業所内保育事業） 8時間を超えて開所する日において、開所時間を通じて必要となる保育士数が、利用定員の総数に応じて配置すべき保育士数を超えるときは、その超える数の範囲内で、当該事業所が雇用した者で「区長が認める者」を、保育士とみなすことができる。</p> <p>(5) 上記(3)(4)の特例を適用する場合の制限 (小規模保育事業A型及び保育所型事業所内保育事業) 上記(3)(4)を適用する事業所においては、保育士(上記(1)(3)(4)により保育士とみなされる者を除く。)を、年齢別配置基準で必要となる保育士数の3分の2以上置かなければならない。</p>				
(2)職員配置(家庭的保育事業)	<p>1 保育従事者 乳幼児3人につき家庭的保育者1人(家庭的保育補助者を配置する場合は乳幼児5人まで保育可。)</p> <p>(1) 家庭的保育者 区長が行う研修(区長が指定する東京都等の他の機関が行う研修を含む。)を修了した者で、以下の①～④のいずれにも該当する者</p> <p>i 子育て支援員専門研修(地域保育コース(地域型保育))</p> <p>ii 家庭的保育者基礎研修 「保育士と同等以上の知識及び経験を有すると区長が認める者」は、i及びii(認定研修も修了)のほか、小規模保育運営支援事業実施要綱(平成26年5月29日付け雇児発0529第19号別紙。以下「旧小規模保育要綱」という。)、グループ型小規模保育事業実施要綱(同第20号別紙)又は家庭的保育事業実施要綱(同第22号別紙)に基づき、家庭的保育者としてこれらの事業に従事していた者</p> <p>① 保育を提供している乳幼児の保育に専念できる者</p> <p>② 児童福祉法第18条5各号及び第34条の20第1項第3号のいずれにも該当しない者</p> <p>③ 保育士となる資格その他規則で定める資格を有する者</p> <p>④ 規則で定める経験を有する者</p>	1 職員配置は適正に行われているか。	(1)区家基条例第23条 (2)留意事項通知 別紙5 (3)雇児保発0603第1号通知	(1)職員配置が適正に行われていない。	C

項目	基本的考え方	観点	関係法令等（準拠を含む）	評価事項	評価
	<p>(2) 家庭的保育補助者 区長が行う研修(区長が指定する東京都等の他の機関が行う研修を含む。)を修了した者であって、家庭的保育者を補助するもの。 ① 子育て支援員基本研修及び専門研修(地域保育コース(地域型保育)) ② 家庭的保育者基礎研修 ③ 旧小規模保育要綱に基づき実施された②と同等の研修</p> <p>2 非常勤調理員等 調理業務全部委託の場合、または連携施設等から食事を搬入する場合は、調理員を置かないことができる。</p> <p>3 非常勤事務職員 乳幼児が3人以下の場合で家庭的保育補助者加算の適用を受ける事業を除く。 家庭的保育者等が兼務する場合または業務委託する場合、配置は不要。</p> <p>4 嘱託医</p>	<p>1 職員配置は適正に行われているか。</p>	<p>(1) 区家基条例第 32 条 (2) 留意事項通知 別紙 6 (3) 雇児保発 0603 第 1 号通知</p>	<p>(1) 職員配置が適正に行われていない。</p>	<p>C</p>
<p>(3) 職員配置(小規模保育事業 A 型)</p>	<p>1 保育従事者 (1) 保育従事者(常勤) 1・2 歳児 6 人につき 1 人、乳児 3 人につき 1 人、これに加えて 1 人。 上記はすべて保育士であること。</p> <p>(2) 保育従事者(非常勤) ① 保育標準時間認定を受けた子どもが利用する事業所については、非常勤保育士 1 人配置。 ② (1)、(2)①の合計数と別に、非常勤保育士 1 人配置。</p> <p>2 保育従事者以外の職員 (1) 施設長(管理者)(以下「施設長」という。) 1 人(下記同項目「(9) 職員の資格保有 3」を参照)</p> <p>(2) 非常勤調理員等 調理業務全部委託の場合、または搬入施設から食事を搬入する場合は、調理員を置かないことができる。</p> <p>(3) 非常勤事務職員 施設長等の職員が兼務する場合または業務委託する場合は、配置は不要。</p> <p>(4) 嘱託医</p>	<p>1 職員配置は適正に行われているか。</p>	<p>(1) 区家基条例第 29 条 (2) 留意事項通知 別紙 6 (3) 雇児発 0218 第 2 号通知</p>	<p>(1) 職員配置が適正に行われていない。</p>	<p>C</p>

項目	基本的考え方	観点	関係法令等（準拠を含む）	評価事項	評価
	<p>【保育士配置に係る特例】 ※詳細については、「4 職員の状況（1）職員配置（共通事項）4 保育士配置に係る特例について」（P.12～14）を参照。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・特例（1）保健師等1人を1人に限り、保育士とみなすことができる。 ・特例（3）（4）を適用する事業所においては、保育士（上記同項目の特例（1）（3）（4）により保育士とみなされる者を除く。）を、年齢別配置基準で必要となる保育士数の3分の2以上置かなければならない。 ・特例（2）「年齢別配置基準により算定した保育士数が1人となる時間帯における「区長が認める者」」を適用できる。 				
<p>（4）職員配置（小規模保育事業B型）</p>	<p>1 保育従事者</p> <p>（1） 保育従事者（常勤） 1・2歳児6人につき1人、乳児3人につき1人、これに加えて1人。 上記のうち、6割以上は保育士であること。</p> <p>（2） 保育従事者（非常勤）</p> <p>① 保育標準時間認定を受けた子どもが利用する事業所については、非常勤保育従事者1人配置。</p> <p>② （1）、（2）①の合計数とは別に、非常勤保育従事者1人配置。</p> <p>2 保育従事者以外の職員</p> <p>（1） 施設長 1人（下記同項目「（9）職員の資格保有 3」を参照）</p> <p>（2） 非常勤調理員等 調理業務全部委託の場合、または搬入施設から食事を搬入する場合は、調理員を置かないことができる。</p> <p>（3） 非常勤事務職員 施設長等の職員が兼務する場合はまたは業務委託する場合は、配置は不要。</p> <p>（4） 嘱託医</p> <p>【保育士配置に係る特例】 ※詳細については、「4 職員の状況（1）職員配置（共通事項）4 保育士配置に係る特例について」（P.12～14）を参照。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・特例（1）保健師等1人を1人に限り、保育士とみなすことができる。 	<p>1 職員配置は適正に行われているか。</p>	<p>（1）区家基条例第32条 （2）留意事項通知 別紙6 （3）雇児保発0603第1号通知</p>	<p>（1）職員配置が適正に行われていない。</p>	<p>C</p>

項目	基本的考え方	観点	関係法令等（準拠を含む）	評価事項	評価
(5)職員配置(小規模保育事業C型)	<p>1 保育従事者 乳幼児3人につき家庭的保育者1人(家庭的保育補助者を配置する場合は乳幼児5人まで保育可。)</p> <p>(1) 家庭的保育者 上記、「(2)職員配置(家庭的保育事業)」の「(1) 家庭的保育者」と同様とすること。</p> <p>(2) 家庭的保育補助者 上記、「(2)職員配置(家庭的保育事業)」の「(2) 家庭的保育補助者」と同様とすること。</p> <p>(3) 保育従事者（非常勤） 保育標準時間認定を受けた子どもが利用する事業所については、非常勤保育従事者1人配置。</p> <p>2 保育従事者以外の職員</p> <p>(1) 施設長 1人（下記同項目「(9) 職員の資格保有 3」を参照）</p> <p>(2) 非常勤調理員等 グループのうち、いずれかの利用者が3人以下の場合は、家庭的保育補助者が兼ねることができる。 調理業務全部委託の場合、または搬入施設から食事を搬入する場合は、調理員を置かないことができる。</p> <p>(3) 非常勤事務職員 施設長等の職員が兼務する場合はまたは業務委託する場合は、配置は不要。</p> <p>(4) 嘱託医</p>	<p>1 職員配置は適正に行われているか。</p>	<p>(1)区家基条例第35条 (2)留意事項通知 別紙7 (3)雇児保発0603第1号通知</p>	<p>(1)職員配置が適正に行われていない。</p>	<p>C</p>

項目	基本的考え方	観点	関係法令等（準拠を含む）	評価事項	評価
(6)職員配置（保育所型事業 所内保育事業）	<p>1 保育従事者</p> <p>(1) 保育従事者（常勤）</p> <p>① 1・2歳児6人につき1人、乳児3人につき1人、これに加えて1人。 上記はすべて保育士であること。</p> <p>② 利用定員20人以上の事業所については保育士1人。</p> <p>③ 保育標準時間認定を受けた子どもが利用する事業所については、保育士1人。ただし、事業所全体の利用定員に占める保育標準時間認定を受けた子どもの人数の割合が低い場合は非常勤の保育士としても差し支えないこと。</p> <p>2 保育従事者以外の職員</p> <p>(1) 施設長 1人（下記同項目「(9)職員の資格保有 3」を参照）</p> <p>(2) 調理員等 利用定員40人以下の事業所は1人、41人以上の事業所は2人 調理業務全部委託の場合、搬入施設から食事を搬入する場合は、調理員を置かないことができる。</p> <p>(3) 非常勤事務職員 施設長等の職員が兼務する場合はまたは業務委託する場合は、配置は不要。</p> <p>(4) 嘱託医</p> <p>【保育士配置に係る特例】 ※詳細については、「4職員の状況 (1)職員配置(共通事項) 4保育士配置に係る特例について」(P.12～14)を参照。</p> <ul style="list-style-type: none"> 特例(1) 保健師等1人を1人に限り、保育士とみなすことができる。 特例(3)(4)を適用する事業所においては、保育士(上記同項目の特例(1)(3)(4)により保育士とみなされる者を除く。)を、年齢別配置基準で必要となる保育士数の3分の2以上置かなければならない 特例(2)「年齢別配置基準により算定した保育士数が1人となる時間帯における「区長が認める者」」を適用できる。 	<p>1 職員配置は適正に行われているか。</p>	<p>(1)区家基条例第46条 (2)留意事項通知 別紙8 (3)雇児保発0603第1号通知 (4)雇児発0218第2号通知</p>	<p>(1)職員配置が適正に行われていない。</p>	<p>C</p>

項目	基本的考え方	観点	関係法令等（準拠を含む）	評価事項	評価
<p>(7)職員配置（小規模型事業 所内保育事業（A型基 準））</p>	<p>1 保育従事者（※小規模保育事業A型の基準が適用される事業 所の場合）</p> <p>(1) 保育従事者（常勤） 1・2歳児6人につき1人、乳児3人につき1人、これに 加えて1人配置。 上記はすべて保育士であること。</p> <p>(2) 保育従事者（非常勤）</p> <p>① 保育標準時間認定を受けた子どもが利用する事業所につ いては、非常勤保育士1人配置。</p> <p>② (1)、(2)①の合計数と別に、非常勤保育士1人。</p> <p>2 保育従事者以外の職員</p> <p>(1) 施設長 1人（下記同項目「(9)職員の資格保有 3」を参照）</p> <p>(2) 非常勤調理員等 調理業務全部委託の場合、または搬入施設から食事を搬入 する場合は、調理員を置かないことができる。</p> <p>(3) 非常勤事務職員 施設長等の職員が兼務する場合または業務委託する場 合は、配置は不要。</p> <p>(4) 嘱託医</p> <p>【保育士配置に係る特例】 ※詳細については、上記同項目の「(1)職員配置（共通事項）4保 育士配置に係る特例について」（P.12～14）を参照。 ・上記同項目の特例(1)保健師等1人を1人に限り、保育士と みなすことができる。</p>	<p>1 職員配置は適正に行われて いるか。</p>	<p>(1)区家基条例第50条 (2)留意事項通知 別紙8 (3)雇児保発0603第1号通知</p>	<p>(1)職員配置が適正に行われていな い。</p>	<p>C</p>

項目	基本的考え方	観点	関係法令等（準拠を含む）	評価事項	評価
<p>(8)職員配置（小規模型事業所内保育事業（B型基準））</p>	<p>1 保育従事者（※小規模保育事業B型の基準が適用される事業所の場合）</p> <p>(1) 保育従事者（常勤） 1・2歳児6人につき1人、乳児3人につき1人、これに加えて1人。 上記のうち、6割以上は保育士であること。</p> <p>(2) 保育従事者（非常勤）</p> <p>① 保育標準時間認定を受けた子どもが利用する事業所については、非常勤保育従事者1人配置。</p> <p>② (1)、(2)①の合計数とは別に、非常勤保育従事者1人配置。</p> <p>2 保育従事者以外の職員</p> <p>(1) 施設長 1人（下記同項目「(9)職員の資格保有 3」を参照）</p> <p>(2) 非常勤調理員等 調理業務全部委託の場合、または搬入施設から食事を搬入する場合は、調理員を置かないことができる。</p> <p>(3) 非常勤事務職員 施設長等の職員が兼務する場合はまたは業務委託する場合は、配置は不要。</p> <p>(4) 嘱託医</p> <p>【保育士配置に係る特例】 ※詳細については、上記同項目の「(1)職員配置(共通事項)4保育士配置に係る特例について」(P.12～14)を参照。 ・上記同項目の特例(1)保健師等1人を1人に限り、保育士とみなすことができる。</p>	<p>1 職員配置は適正に行われているか。</p>	<p>(1)区家基条例第50条 (2)留意事項通知 別紙8 (3)雇児保発0603第1号通知</p>	<p>(1)職員配置が適正に行われていない。</p>	<p>C</p>

項目	基本的考え方	観点	関係法令等（準拠を含む）	評価事項	評価
(9)職員の資格保有	<p>1 保育士、家庭的保育者、家庭的保育補助者及び嘱託医等については、それぞれの資格を有していなければならない。</p> <p>2 調理員については、必ずしも栄養士の資格を要するものではない。</p> <p>3 施設長については、児童福祉事業に2年以上従事した者（注1）又はこれと同等以上の能力を有すると認められる者（注2）で、常時実際にその事業所の運営管理の業務に専従し、かつ給付費からの給与支出があるものに限る。 （注1）児童福祉事業に従事した者の例：児童福祉施設職員、幼稚園・小学校等教諭、民生委員等 （注2）同等以上の能力を有すると認められる者の例：公的機関等の実施する所長研修等を受講した者等</p>	<p>1 資格を要する職種において、有資格者が勤務しているか。</p>	<p>(1)区家基条例第3条、第9条、附則第4条[共通]、第23条[家庭的保育]、第29条[小規模A型]、第32条[小規模B型]、第35条[小規模C型]、第46条[保育所型事業所内保育事業]、第50条[小規模型事業所内保育事業] (2)区家基施行規則第6条[家庭的保育] (3)留意事項 別紙6～8</p>	<p>(1)資格を要する職種に有資格者が勤務していない。</p>	C
	<p>4 保育士でない者は、保育士又はこれに紛らわしい名称を使用してはならない。</p>	<p>2 保育士でない者が、保育士又はこれに紛らわしい名称を使用していないか。</p>	<p>(1)児童福祉法第18条の23</p>	<p>(1)保育士でない者が、保育士又はこれに紛らわしい名称を使用している。</p>	C
(10)採用、退職	<p>1 事業主は、募集及び採用について、性別にかかわらず均等な機会を与えなくてはならない。</p>	<p>1 募集及び採用について、性別にかかわらず均等な取扱いをしているか。</p>	<p>(1)均等法第5条</p>	<p>(1)募集及び採用について、性別にかかわらず均等な取扱いをしていない。</p>	B
	<p>2 使用者は労働契約の締結に際し、労働者に対して賃金、労働時間その他の条件を明示しなければならない。 ① 労働契約の期間に関する事項 ② 期間の定めのある労働契約を更新する場合の基準に関する事項 ③ 就業の場所及び従事すべき業務に関する事項 ④ 始業及び終業の時刻、所定労働時間を超える労働の有無、休憩時間、休日、休暇並びに就業時転換に関する事項 ⑤ 賃金の決定、計算及び支払方法、賃金の締切及び支払いの時期並びに昇給に関する事項 ⑥ 退職に関する事項（解雇の事由を含む） 上記の事項については、必ず明示しなければならない。また昇給に関する事項を除き、書面交付の方法により明示する必要がある。 ※当該労働者が希望した場合は、ファクシミリ・電子メール送信によることも可。</p>	<p>2 職員の採用時に職務内容、給与等の労働条件を明示しているか。</p>	<p>(1)労働基準法第15条第1項 (2)労働基準法施行規則第5条</p>	<p>(1)採用時に労働条件の明示がない。 (2)採用時に労働条件の明示が不十分である。</p>	B B

項目	基本的考え方	観点	関係法令等（準拠を含む）	評価事項	評価
	<p>3 非常勤職員の雇用 就業規則等の交付等により雇用期間、賃金、勤務時間、職務内容等が明確であること。 労働の実態が就業規則等と異なる場合には、労働条件に関する事項を文書で明らかにする必要がある。 非常勤職員の採用時に、雇入通知書（雇用契約書）等の文書を交付し、必要な勤務条件を明示すること（上記2と同じ）。</p> <p><パートタイム・有期雇用労働法上の明示事項></p> <p>① 昇給の有無 ② 退職手当の有無 ③ 賞与の有無 ④ 相談窓口（短時間労働者の雇用管理の改善等に関する事項）</p>	<p>3 非常勤職員の採用時に、雇入通知書（雇用契約書）等の文書を交付し、必要な勤務条件を明示しているか。</p>	<p>(1)労働基準法第15条第1項 (2)労働基準法施行規則第5条 (3)パートタイム・有期雇用労働法第6条 (4)短時間労働者の雇用管理の改善等に関する法律施行規則（平成5年労働省令第34号）第2条</p>	<p>(1)非常勤職員に勤務条件の明示がない。 (2)非常勤職員に勤務条件の明示が不十分である。</p>	<p>B B</p>
(11) 関連帳簿の整備	<p>職員の状況を把握するため、関連帳簿を整備しておかなければならない。</p> <p>(1) 資格証明書（保育士証の写し、医師免許証の写し等） (2) 履歴書 (3) 労働者名簿 （労働基準法上の記載事項）</p> <p>① 氏名 ② 生年月日 ③ 履歴 ④ 性別 ⑤ 住所 ⑥ 従事する業務の種類 ⑦ 雇入れ年月日 ⑧ 退職年月日及びその理由 ⑨ 死亡年月日及びその原因等</p>	<p>1 資格が必要な職種の職員について、資格証明書を整備しているか。</p> <p>2 履歴書を整備しているか。</p> <p>3 労働者名簿は全職員分を整備しているか。</p>	<p>(1) 区家基条例第19条 (2) 区特基条例第49条</p> <p>(1) 区家基条例第19条 (2) 区特基条例第49条</p> <p>(1) 労働基準法第107条、第109条 (2) 労働基準法施行規則第53条、第56条 (3) 区特基条例第49条</p>	<p>(1) 資格職種の資格証明書を整備していない。 (2) 一部職員の資格証明書を整備していない。</p> <p>(1) 履歴書を整備していない。</p> <p>(1) 労働者名簿を整備・保管していない。</p>	<p>C B B B</p>

項目	基本的考え方	観点	関係法令等（準拠を含む）	評価事項	評価
5 勤務状況 (1)勤務体制	事業所における職員の労働時間や休日等の勤務体制は、労働基準法を遵守すること	1 勤務体制が労働基準法上、適正か。	(1)労働基準法第32条～第41条 (2)区特基条例第47条	(1)勤務体制が労働基準法上、適正でない。	B
(2)均等な待遇の確保	1 事業主は、労働者の配置、昇進、教育訓練、福利厚生、定年、退職及び解雇等について性別を理由とする差別的取扱いをしてはならない。 2 事業主は、女性労働者が保健指導又は健康診査を受けるために必要な時間を確保することができるようにしなければならない。 また、その指導事項を守ることができるよう必要な措置を講じなければならない。 3 事業主は、正社員と非正規社員との間で、基本給や賞与などのあらゆる待遇について、不合理な待遇差を設けてはならない。	1 性別にかかわらず均等な取扱いをしているか。 2 妊娠中及び出産後の女性労働者に対して、保健指導等の時間を確保しているか。 また、保健指導等に基づく指導事項を守れるよう、勤務の軽減等必要な措置を講じているか。 3 正社員と非正規社員との間で、基本給や賞与など、不合理な待遇差を設けていないか。	(1)均等法第6条～第9条 (1)均等法第12条、第13条 (1)パートタイム・有期雇用労働法第8条、第9条、第15条	(1)性別による差別的取扱いをしている。 (1)勤務の軽減等必要な措置を講じていない。 (1)正社員と非正規社員との間で、不合理な待遇差を設けている。	B B B
(3)妊娠した労働者等の就業環境の整備	1 事業主は、女性労働者が妊娠・出産・産前産後休業の申請取得等に関する発言により就業環境が害されることのないよう、当該労働者からの相談に応じ、適切に対応するために必要な体制の整備その他の必要な措置を講じなければならない。 2 事業主は、労働者が育児・介護休業等の利用に関する言動により就業環境が害されることのないよう、当該労働者からの相談に応じ、適切に対応するために必要な体制の整備その他の必要な措置を講じなければならない。	1 妊娠・出産等に関するハラスメントの防止措置をとっているか。 2 育児・介護休業等の利用に関するハラスメントの防止措置をとっているか。	(1)均等法第9条、第11条の3、第11条の4 (2)雇用の分野における男女の均等な機会及び待遇の確保等に関する法律施行規則（昭和61年労働省令第2号）第2条の2 (1)育児・介護休業法第10条、第16条、第16条の4、第16条の7、第25条、第25条の2	(1)妊娠・出産等に関するハラスメントの防止措置を行っていない。 (1)育児・介護休業等の利用に関するハラスメントの防止措置を行っていない。	B B
(4)勤務状況の帳簿の整備	職員の状況を把握するため、関連帳簿を整備しておかなければならない。 ・出勤・退勤に関するもの（タイムカード） ・出張（外出）に関するもの ・所定時間外勤務に関するもの ・休暇取得に関するもの 等	1 勤務関連帳簿を整備しているか。	(1)労働基準法第109条 (2)労働安全衛生法第66条の8の3 (3)労働安全衛生規則第52条の7の3 (4)区家基条例第19条 (5)区特基条例第49条	(1)勤務に関する帳簿を整備していない。 (2)勤務に関する帳簿の一部が整備されていない。又は記録の内容に不備がある。	C B

項目	基本的考え方	観点	関係法令等（準拠を含む）	評価事項	評価
6 職員給与等の状況 (1)本俸・諸手当	職員の給与については、適正に支給することが必須である。	1 給与は適正に支給されているか。	(1)労働基準法第15条、第24条～第28条、第37条、第89条 (2)経理等通知1(2)(準拠) (3)経理等取扱通知3(準拠)	(1)本俸・諸手当を規程どおり支給していない。 (2)初任給を規程どおりに決定していない。 (3)昇給及び昇格を規程どおりに行っていない。 (4)適正な給与水準となっていない。	B B B B
(2)社会保険	職員5人以上を使用する事業所は、健康保険、厚生年金保険、雇用保険及び労働者災害補償保険のいずれの保険においても、被保険者として強制加入又は強制適用となる。 常勤職員の労働時間の概ね3/4以上(1週の所定労働時間および1月の所定労働日数が3/4以上)の職員は、健康保険(75歳以上を除く。)・年金保険(70歳以上を除く。)の加入が必要である。 事業規模にかかわらず、週労働時間が20時間以上で31日以上の雇用見込みがある場合(平成29年1月1日以降は65歳以上も対象、ただし31年度末まで保険料徴収免除)、雇用保険の適用対象となる。 また、職員を1人でも雇用する事業所は、労災保険の適用対象となる。	1 社会保険への加入は適正か。 ・健康保険、厚生年金等の社会保険に加入しているか。 ・健康保険、厚生年金等の社会保険に未加入者はいるか。	(1)健康保険法(大正11年法律第70号)第3条 (2)健康保険法施行規則(大正15年内務省令第36号)第24条 (3)厚生年金保険法(昭和29年法律第115号)第6条第1項 (4)厚生年金保険法施行規則(昭和29年厚生省令第37号)第15条 (5)雇用保険法(昭和49年法律第116号)第5条 (6)雇用保険法施行規則(昭和50年労働省令第3号)第6条 (7)労働者災害補償保険法(昭和22年法律第50号)第3条第1項	(1)健康保険、厚生年金等いずれかの保険に未加入である。 (2)加入はしているが、いずれかの保険に未加入者がいる。	B B
(3)賃金台帳	使用者は、賃金台帳を調整し、賃金計算の基礎となる事項及び賃金の額その他法令で定める事項を賃金支払の都度遅滞なく記入しなければならない。	1 賃金台帳を整備しているか。	(1)労働基準法第108条、第109条 (2)労働基準法施行規則第54条、第55条、第56条 (3)区特基条例第49条	(1)賃金台帳を整備・保管していない。	B
7 健康管理 (1)安全衛生管理体制	労働者の健康の確保は、事業の円滑な遂行に不可欠な条件であり、法の定めにより定期的に健康診断を実施するとともに、労働者の安全又は衛生のための教育等が必要である。 ・労働者が常時10人以上50人未満の事業所においては、衛生推進者を選任し、衛生管理者に準じた職務を行わせること。 また、衛生に関する事項について関係労働者の意見を聴くための機会を設けること。	1 (職員が常時10人以上50人未満の事業所において)衛生推進者を選任しているか	(1)労働安全衛生法第12条の2 (2)労働安全衛生規則第12条の2～4、23条の2	(1)衛生推進者を選任していない。 (2)衛生推進者を職員に周知していない。	B B

項目	基本的考え方	観点	関係法令等（準拠を含む）	評価事項	評価
(2)健康診断	<p>常時使用する労働者を雇い入れる時は、健康診断を行わなければならない。（雇入時の健康診断）</p> <p>定期健康診断は1年以内ごとに1回、必要な項目について医師による健康診断を行わなければならない。また、夜間業務に従事する職員の場合には6か月以内ごとに1回の健康診断が必要となる。</p> <p>なお、1年以上使用されることが予定されている者及び更新により1年以上引続き使用されている者で、就労時間数が通常の就労者の4分の3以上の者についても同様に行うこと。</p> <ul style="list-style-type: none"> 結核診断の結果結核の発病のおそれがある者に対して、喀痰検査、胸部エックス線検査、聴診、打診その他必要な検査を行うこと。 健康診断個人票を作成して、これを5年保存すること。 腰部に著しい負担のかかる作業に常時従事する者に者に対しては、定期に医師による腰痛の健康診断を実施すること。 	<p>1 健康診断を適切に実施しているか。</p> <p>2 結果の記録を作成・保存しているか。</p>	<p>(1)区家基条例第17条第4項</p> <p>(2)労働安全衛生法第66条、第66条の10</p> <p>(3)労働安全衛生規則第43条～第45条、第52条の9～21</p> <p>(4)感染症の予防及び感染症の患者に対する医療に関する法律（平成10年法律第114号）第53条の2</p> <p>(5)感染症の予防及び感染症の患者に対する医療に関する法律施行規則（平成10年厚生省令第99号）第27条の2</p> <p>(6)平成31年1月30日基発第0130第1号「短時間労働者及び有期雇用労働者の雇用管理の改善等に関する法律の施行について」11（4）ト</p> <p>(7)平成25年6月18日基発0618第4号「職場における腰痛予防対策の推進について」</p> <p>(8)平成29年8月4日基発0804第4号「定期健康診断における診断項目の取扱い等について」</p> <p>(1)労働安全衛生規則第51条</p>	<p>(1)健康診断が未実施である。</p> <p>(2)調理・調乳に携わる者に健康診断の未受診者がいる。</p> <p>(3)健康診断の未受診者がいる。</p> <p>(4)健康診断の実施方法が不適切である。</p> <p>(1)健康診断実施記録の整備が不十分である。</p>	<p>C</p> <p>C</p> <p>B</p> <p>B</p> <p>B</p>

項目	基本的考え方	観点	関係法令等（準拠を含む）	評価事項	評価
8 職員研修	<p>事業者の職員は、知識及び技能の修得、維持及び向上に努めなければならない。</p> <p>事業者は、職員に対し、資質向上のための研修の機会を確保しなければならない。</p> <p>事業者は、職員に対し資質の向上及び人材確保のため、研修体系を構築し、研修等の充実を図るとともに、職員の自己研鑽が図られるよう、業務の中で必要な知識や技術を習得できる体制や、職場内や外部の研修受講の機会等の確保に努めなければならない。</p> <p>特に、個人の職務遂行能力に応じた、具体的内容をもった実施計画が立てられていることが望まれる。</p> <p>施設長は、保育所の全体的な計画や、各職員の研修の必要性を踏まえて、体系的・計画的な研修機会を確保するとともに、職員の勤務体制の工夫等により、職員が計画的に研修等に参加し、その専門性の向上が図られるよう努めなければならない。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・職場における研修の充実を図ること。 ・外部研修への参加機会が確保されるよう努めること。 ・職位や職務内容等を踏まえた体系的な研修計画を作成すること。 ・研修の受講は特定の職員に偏ることなく行われるよう、配慮すること。 ・研修効果を把握し、今後の研修計画に反映させること。 	<p>1 研修の機会を確保しているか。</p> <p>2 研修計画を適切に立てているか。</p> <p>3 研修の成果を活用しているか。</p>	<p>(1) 区家基条例第10条第2項 区特基条例第47条第3項</p> <p>(2) 保育所保育指針第1章3 (1)ウ、第5章2(2)、 3、4</p> <p>(3) 社会福祉法第90条</p> <p>(4) 平成19年8月28日厚生労働省告示第289号「社会福祉事業に従事する者の確保を図るための措置に対する基本的な指針」第3-2②③（準拠）</p>	<p>(1) 研修を実施していない。</p> <p>(2) 研修の実施が不十分である。</p> <p>(3) 研修の機会が公平に与えられていない。</p> <p>(1) 研修計画が適切に立てられていない。</p> <p>(1) 研修の成果を活用していない。</p>	<p>C</p> <p>B</p> <p>B</p> <p>B</p> <p>B</p>
9 施設長の責務	<p>1 施設長は、運営管理全般の統括、利用者との連絡調整、地域社会との連携など施設長としての職責を十分果たす必要がある。</p> <p>施設長は、保育施設の役割や社会的責任を遂行するために、法令等を遵守し、保育施設を取り巻く社会情勢等を踏まえ、施設長としての専門性等の向上に努め、当該保育施設における保育の質及び職員の専門性向上のために必要な環境の確保に努めなければならない。</p> <p>2 施設長は、職務に専念する必要がある。</p> <p>管理者設置加算を受けている事業所の場合、施設長は、保育事業の適正かつ円滑な推進を図るため専任であること。専任とは、常時実際にその事業所の運営管理の業務に専従し、かつ有給の者であること。従って、2以上の事業所若しくは他の業務と兼務し、施設長としての職務を行っていない者は施設長に該当しない。</p>	<p>1 施設長はその職責を果たしているか。</p> <p>2 施設長は専任となっているか。</p>	<p>(1) 保育所保育指針第5章2 (1)</p> <p>(1) 社会福祉法第66条 (2) 区家基条例 第29条第5項[小規模A型]、 第32条第4項[小規模B型]、 第46条第4項[保育所型事業 所内保育事業]、 第50条第4項[小規模型事業 所内保育事業]</p>	<p>(1) 運営管理上問題が生じている。</p> <p>(2) 運営管理上問題が生じている（軽微な場合）。</p> <p>(1) 他施設等の職員を兼務している。</p> <p>(2) 常時施設の運営管理の業務に専従していない。</p> <p>(3) 施設長としての勤務実態が不明確である。</p>	<p>C</p> <p>B</p> <p>C</p> <p>C</p> <p>B</p>

項目	基本的考え方	観点	関係法令等（準拠を含む）	評価事項	評価
	<p>3 相手の意に反する性的な言動で、それに対する対応によって仕事を遂行する上で、一定の不利益を与えたり、就業環境を悪化させること（セクシュアル・ハラスメント）は、職員個人としての尊厳を不当に傷つけるとともに、就業環境を悪化させ、能力の発揮を阻害するものである。</p> <p>4 同じ職場で働く者に対して、職務上の地位や人間関係などの職場内での優位性を背景に、業務の適正な範囲を超えて、精神的・身体的苦痛を与える又は就業環境を悪化させる行為（パワー・ハラスメント）は、職員個人としての尊厳を不当に傷つけるとともに、能力の発揮を阻害するものである。</p>	<p>3 セクシュアル・ハラスメントに関する方針を明確化し、周知・啓発しているか。また、相談・苦情に適切かつ柔軟に対応しているか。</p> <p>4 パワー・ハラスメントに関する方針を明確化し、周知・啓発しているか。また、相談・苦情に適切かつ柔軟に対応しているか。</p>	<p>(1) 均等法第 11 条、第 11 条の 2、第 15 条 (2) 平成 18 年度厚生労働省告示第 615 号「事業主が職場における性的な言動に起因する問題に関して雇用管理上講ずべき措置についての指針」</p> <p>(1) 労働施策総合推進法第 30 条の 2、第 30 条の 3 (2) 令和 2 年厚生労働省告示第 5 号「事業主が職場における優越的な関係を背景とした言動に起因する問題に関して雇用管理上講ずべき措置等についての指針」</p>	<p>(1) セクシュアル・ハラスメントの防止や必要な対策を講じていない。</p> <p>(1) パワー・ハラスメントの防止や必要な対策を講じていない。</p>	<p>B</p> <p>B</p>
10 建設設備等の管理 (1) 建物設備の状況	<p>1 子どもが、良好な環境のもとで生活を営むためには各法令に定められている建物設備の基準を確保する必要がある。建物設備等の内容を変更する場合は、区条例及びその他の法令を満たす必要がある。</p> <p>2 建物設備等の内容変更により、区条例を満たさないことが起こり得る。変更する場合には、内容変更の届出をする必要がある。また、面積が増加する場合も認可内容変更の届出をする必要がある。【認可内容の変更届出については 1 (2) 参照のこと。】認可関係書類、図面等は、事業所の設備の現状及び認可内容の状況を示すものであり、整備、保管しておくこと。</p> <p>3 規模及び構造の変更により、基準面積を下回ってはならない。 ・乳児室又はほふく室は、乳児又は満 2 歳に満たない幼児 1 人につき 3.3 m²（有効面積）以上。 ・保育室又は遊戯室は満 2 歳以上の幼児 1 人につき 1.98 m²（有効面積）以上。（ただし、家庭的保育事業及び小規模保育事業 C 型においては、3.3 m²（有効面積）以上） ・屋外遊戯場は満 2 歳以上の幼児 1 人につき 3.3 m²以上。</p>	<p>1 構造設備が基準を満たしているか。</p> <p>2 建物設備等の認可内容と現状に相違がないか。また、変更する場合、届出をしているか。</p> <p>3 在籍児に見合う基準面積を下回っていないか。</p>	<p>(1) 区家基条例第 3 条、第 6 条第 5 項</p> <p>(1) 児童福祉法施行規則第 36 条の 36 条第 3 項・第 4 項、第 37 条第 4 項～第 6 項</p> <p>(1) 区家基条例 第 22 条[家庭的保育]、 第 28 条[小規模 A 型]、 第 31 条[小規模 B 型]、 第 34 条[小規模 C 型]、 第 45 条[保育所型事業所内]、 第 49 条[小規模型事業所内]</p> <p>(2) 区家基条例施行規則 第 5 条[家庭的保育]、 第 7 条[小規模 A 型]、 第 9 条[小規模 B 型]、 第 11 条[小規模 C 型]、 第 12 条[保育所型事業所内]、 第 14 条[小規模型事業所内]</p>	<p>(1) 構造、設備が基準を満たしていない。</p> <p>(1) 建物設備等の認可内容と現状に著しい相違がある。 (2) 認可内容と現状に相違がある。</p> <p>(1) 基準面積が不足している。</p>	<p>C</p> <p>C</p> <p>B</p> <p>C</p>

項目	基本的考え方	観点	関係法令等（準拠を含む）	評価事項	評価
	<p>4 家庭的保育事業所等には、必要な医薬品その他の医療品を備えるとともに、それらの管理を適正に行わなければならない。</p> <p>5 乳児室又はほふく室、保育室又は遊戯室には、保育に必要な用具を備えること。</p>	<p>4 必要な医薬品等が備えられ、適正に管理されているか。</p> <p>5 保育に必要な用具が備えられているか。</p>	<p>(1) 区家基条例第 14 条第 3 項</p> <p>(1) 区家基条例施行規則 第 7 条〔小規模 A 型〕、第 9 条（準用）〔小規模 B 型〕、第 11 条〔小規模 C 型〕、第 12 条〔保育所型事業所内〕、第 14 条（準用）〔小規模型事業所内〕</p> <p>(2) 保育所保育指針第 1 章 1 (4)</p>	<p>(1) 必要な医薬品等の整備・管理が不十分である。</p> <p>(1) 用具等が備えられていない。</p> <p>(2) 用具等の備えが不十分である。</p>	<p>B</p> <p>C</p> <p>B</p>
(2) 建物設備の安全、衛生	<p>1 事業者の構造設備は、採光、換気等子どもの保健衛生及び子どもに対する危険防止に十分な考慮を払って設けられなければならない。</p> <p>具体的には、事業所の温度、湿度、換気、採光、音などの環境を常に適切な状態に保持するとともに、事業所内外の設備、用具等の衛生管理に努めること。</p> <p>そして、設備構造はもとより、事業所の運営管理上からも、子どもの安全確保が図られなければならない。</p> <p>2 事業者は、子どもの使用する設備等については、衛生的な管理に努め又は衛生上必要な措置を講じなければならない。</p> <p>3 建築物及び建築設備の適正な維持管理を図り、災害を未然に防止するために、建築基準法に基づく定期検査報告を特定行政庁に行わなければならない。</p> <p>建築物 3 年毎（※） 防火設備 毎年（※） 建築設備 毎年（※） 昇降機 毎年</p> <p>※児童福祉施設の場合、300㎡を超える規模のもの又は3階以上の階で、その用途に供する部分が対象になる。ただし、平屋建てで500㎡未満のものは除く。</p>	<p>1 構造設備に危険な箇所はないか。</p> <p>2 事業所の温度、湿度、換気、採光、音などの環境は適切か。</p> <p>3 保育室、便所等設備が清潔であるか。</p> <p>4 事業所内にある用具（寝具、遊具等）が清潔であるか。</p> <p>5 建築物及び建築設備等の定期検査を行っているか。</p>	<p>(1) 区家基条例第 6 条</p> <p>(2) 保育所保育指針第 3 章 3、4 (1)イ</p> <p>(1) 区家基条例第 6 条</p> <p>(2) 保育所保育指針第 3 章 3</p> <p>(1) 区家基条例第 14 条</p> <p>(2) 保育所保育指針第 3 章 3</p> <p>(1) 区家基条例第 14 条</p> <p>(2) 保育所保育指針第 3 章 3</p> <p>(1) 建築基準法（昭和 25 年 5 月 24 日法律第 201 号）第 12 条 第 1 項～第 4 項</p>	<p>(1) 構造設備に危険な箇所がある。</p> <p>(2) 備品が損傷して危険である。</p> <p>(3) 危険物が放置されている。</p> <p>(4) 構造設備その他にやや危険な箇所がある。</p> <p>(1) 採光・換気等が悪い</p> <p>(1) 衛生上、著しく問題がある。</p> <p>(2) 衛生管理が不十分である。</p> <p>(1) 衛生上、著しく問題がある。</p> <p>(2) 衛生管理が不十分である。</p> <p>(1) 建築物及び建築設備等の定期検査を行っていない。</p>	<p>C</p> <p>C</p> <p>C</p> <p>B</p> <p>C</p> <p>C</p> <p>B</p> <p>B</p> <p>B</p>

項目	基本的考え方	観点	関係法令等（準拠を含む）	評価事項	評価
(3)環境衛生の状況	<p>1 利用者の飲用に供する水については、衛生的な管理に努め、かつ衛生上必要な措置を講じなければならないことから、自家水及び受水槽等使用の場合、清浄な飲料水の確保を管理者自らが責任をもって行うこと。</p> <p>100人を超える居住者に地下水（井戸水）を供給する場合は、「専用水道」となり、保健所への確認申請、水道技術管理者の設置、水道事務月報の提出等が義務付けられている。</p> <p>なお、「専用水道」以外の「飲用井戸」の管理については、法的義務はないが「東京都小規模貯水槽水道等における安全で衛生的な飲料水の確保に関する条例」及び「飲用に供する井戸等の衛生管理指導要綱」（都福祉保健局）等により、衛生的措置を採るよう努めること。</p>	<p>1 水道法に基づく水質検査を定期的に行っているか。</p>	<p>(1)区家基条例第14条 (2)水道法第20条 (3)水道法施行規則第15条 (4)社援施第116号通知</p>	<p>(1)水質検査を定期的に行っていない。</p>	C
	<p>2 受水槽の有効容量の合計が10m³を超える設備を有する等、水道法で規定する簡易専用水道の場合には、次の事項を行う。</p> <p>(1) 厚生労働大臣が指定する検査機関による検査を年1回実施すること。</p> <p>(2) 次のような衛生管理を行うこと。</p> <p>① 貯水槽の清掃（年1回）（専門の清掃業者に委託）</p> <p>② 給水栓における水の色、濁り、臭い、味、その他の状態により供給する水に異常を認めるときは、必要な水質検査を行う。</p> <p>なお10m³以下の小規模給水施設管理者は法的義務はないが、「東京都小規模貯水槽水道等における安全で衛生的な飲料水の確保に関する条例」等により、衛生的措置を採るよう努めること。</p>	<p>2 10m³を超える簡易専用水道の場合において、法令等に基づいた適正管理衛生確保を図っているか。</p>	<p>(1)区家基条例第14条 (2)水道法第34条の2 (3)水道法施行規則第55条、第56条 (4)水道法施行令第2条</p>	<p>(1)10m³を超える簡易専用水道の場合において、水道法に定める検査、衛生的管理を実施していない。</p>	B
	<p>3 浄化槽を使用している場合、放流水の水質検査及び浄化槽の保守点検を定期的に行うことが義務付けられている。</p>	<p>3 浄化槽を使用している場合、定期的な点検及び水質検査を実施しているか。</p>	<p>(1)浄化槽法（昭和58年法律第43号）第10条、第11条</p>	<p>(1)浄化槽の定期的な点検及び水質検査を実施していない。</p>	B

項目	基本的考え方	観点	関係法令等（準拠を含む）	評価事項	評価
11 災害対策の状況 (1)管理体制（防火管理者）	<p>防火管理者は、防火対象物の位置、構造及び設備の状況並びにその使用状況に応じ、おおむね次の事項について当該防火対象物の管理について権限を有する者の指示を受けて消防計画を作成することとされている。</p> <p>(1) 選任（解任）・届出 事業所においては、防火管理者を選任し、所轄の消防署に遅滞なく届け出なければならない。</p> <p>(2) 資格 消防法施行令に規定する資格が必要である。</p> <p>(3) 業務 防火管理者は、防火管理上必要な業務を誠実に遂行するとともに、消防用設備等の点検及び整備、又は適切な防火管理上の指示を与えなければならない。</p> <p>（業務内容）</p> <p>① 消防計画の作成 ② 消防計画に基づく消火、通報及び避難訓練の実施 ③ 消防の用に供する設備、消防用水又は消火活動上必要な事業所の点検及び整備 ④ 火気の使用又は取扱いに関する監督 ⑤ 避難又は防火上必要な構造及び設備の維持管理 ⑥ 収容人員の管理 ⑦ その他防火管理上必要な業務</p>	<p>1 防火管理者を選任し、届け出ているか。 また、管理的あるいは監督的地位にある者を選任しているか。</p> <p>2 防火管理者としての業務が適正に行われているか。</p>	<p>(1) 消防法第8条 (2) 消防法施行令第3条 (3) 消防法施行規則第3条の2</p> <p>(1) 消防法施行令第3条の2</p>	<p>(1) 防火管理者を選任していない。 (2) 防火管理上必要な業務を適切に遂行することができる管理的又は監督的地位にある者を選任していない。 (3) 防火管理者の届出をしていない。</p> <p>(1) 防火管理者としての業務が適正に行われていない。</p>	<p>B B B B</p>
(2)防火対策	<p>保育施設のカーテン、敷物、建具等で可燃性のものについては、防災処理を施されたものを使用しなければならない。 ・消防署から防火対象物の建築物でないとされた場合は、上記の対象とならないが、保育施設であるという観点から防災処理を施された製品を使用することが望ましい。</p>	<p>1 カーテン、絨毯等は防災性能を有しているか。</p>	<p>(1) 区家基条例第6条第6項第28条[小規模A型]、第31条[小規模B型]、第34条[小規模C型]、第45条[保育所型事業所内]、第49条[小規模型事業所内] (2) 区家基条例施行規則第7条他 (3) 消防法第8条の3 (4) 消防法施行令第4条の3 (5) 消防法施行規則第4条の3 (6) 社施第107号通知（準拠）</p>	<p>(1) カーテン、絨毯等が防災性能を有していない。 (2) カーテン、絨毯等の設置等で一部不備な点がある。</p>	<p>C B</p>

項目	基本的考え方	観点	関係法令等（準拠を含む）	評価事項	評価
(3)消防計画等	<p>1 消防計画は、火災等非常災害時における利用者、職員の安全確保を図るために、その基本となる具体的計画であり、消防法施行規則第3条に定める項目を満たして作成し、所轄の消防署に届け出る必要がある。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・防火管理者の選任をする必要がない事業所は、消防計画の作成・届出が不要となるが、保育施設であるという観点から消防計画を作成（消防署への届出不要）することが望ましい。 <p>(1) 消防計画の策定 非常災害時における児童の安全確保を図るためにその基本となる具体的計画を策定しなければならない。なお、消防計画の内容は、消防法令等に定める項目を満たすこと。</p> <p>(2) 消防署への届出 計画策定者は防火管理者であり、消防署に届け出なければならない。</p> <p>2 事業者は、非常災害に対する具体的計画を立て、これに対する不断の注意と訓練をするよう努めなければならない。</p> <p>事業者は、都及び区が作成する地域防災計画を基準として、事業活動に関して震災を防止するための事業所単位の防災計画を作成しなければならない。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・防災計画に、事業所防災計画に規定すべき事項を定めること。 <p>3 杉並区地域防災計画に定められた洪水浸水想定区域内等又は土砂災害警戒区域内の要配慮者利用施設の所有者又は管理者は、避難確保計画を作成し、区長に報告しなければならない。</p>	1 消防計画を作成しているか（防火管理者選任対象外の場合は指導事項としないう）。	(1) 区家基条例第8条第1項 (2) 消防法第8条 (3) 消防法施行令第3条の2 (4) 消防法施行規則第3条	(1) 消防計画を作成していない。 (2) 消防計画の内容に不備がある。	B B
		2 消防計画を所轄消防署に届出しているか。	(1) 消防法施行規則第3条の2	(1) 消防計画を届出していない。 (2) 変更の届出をしていない。	B B
		3 事業所防災計画を作成しているか。	(1) 区家基条例第8条第1項 (2) 震災対策条例第10条 (3) 東京都帰宅困難者対策条例（平成24年東京都条例第17号） (4) 消防庁告示第2号	(1) 事業所防災計画を作成していない。 (2) 事業所防災計画の内容に不備がある。	B B
		4 避難確保計画を作成し、区に報告しているか。	(1) 水防法第15条の3第1項、第2項 (2) 土砂災害防止法第8条の2第1項、第2項	(1) 避難確保計画を作成していない。 (2) 区に報告していない。	B B
(4)消防署の立入検査	消防法第4条に基づく消防署の立入検査の結果による指示事項については、事業所として速やかに指示事項を改善すること。	1 消防署の立入検査の指示事項について改善しているか。	(1) 消防法第4条	(1) 消防署の立入検査の指示事項に対する改善がされていない。 (2) 消防署の立入検査の指示事項に対する改善が不十分である。	B B

項目	基本的考え方	観点	関係法令等	評価事項	評価
(5)防災訓練等	<p>1 非常災害に平穏かつ迅速に対応するには、平素からの訓練が大切である。事業者は避難及び消火に対する訓練を、毎月1回以上実施しなければならない。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・避難及び消火訓練を毎月1回以上実施すること（図上訓練は含まない）。 ・消防計画に沿った訓練が定期的に行われること。 ・訓練を実施するときは、あらかじめ、消防機関に通知しておくこと。 ・原則として、訓練は全職員が参加して実施すること。 ・避難訓練については、地域の関係機関や保護者との連携の下に行うなど工夫すること。 ・訓練結果については、毎回記録し次回訓練等の参考にすること。 <p>なお、防災訓練については、少なくとも年1回は引渡し訓練を含んだものを行うよう努めること。この場合、降園時間などを活用して保護者の負担をできる限り少なくするよう配慮すること。</p> <p>また、災害発生時に、保護者等への連絡及び子どもの引渡しを円滑に行うため、日頃から保護者との連携に努めるとともに、連絡体制や引渡し方法等について確認しておくこと。</p>	<p>1 避難、消火・通報訓練を法令・通達で定められているとおり実施しているか。</p> <p>2 地域の関係機関や保護者との連携の下に避難訓練を実施しているか。</p> <p>3 地震想定訓練を実施しているか。</p>	<p>(1) 区家基条例第8条第2項 (2) 消防法施行令第3条の2第2項、第4項 (3) 保育所保育指針第3章4(2)イ、ウ</p> <p>(1) 保育所保育指針第3章4(3)</p> <p>(1) 社施第5号 (2) 社施第59号通知（準拠） (3) 社施第121号通知（準拠）</p>	<p>(1) 毎月避難及び消火訓練を実施していない。</p> <p>(2) 実施方法が不適切である。</p> <p>(1) 地域の関係機関や保護者との連携の下に避難訓練を実施していない。</p> <p>(1) 地震想定訓練を実施していない。</p>	<p>C</p> <p>B</p> <p>B</p> <p>B</p>
	<p>2 実施状況の記録は、実地の反省及び今後の訓練等の貴重な資料となるので、訓練目標、災害種別、訓練方法及びその状況、所要時間、講評等について、できるだけ詳細に記録する必要がある。</p> <p>訓練方法については、実効ある訓練を確保する見地から、災害発生の想定時間、発生場所等が十分に検討されたものであるかどうか確認し、訓練そのものが惰性的なものにならないようにする。</p>	<p>4 訓練結果の記録を整備しているか。</p>	<p>(1) 区家基条例第19条 (2) 消防法施行規則第4条の2の4第2項 (3) 火災予防条例（昭和37年東京都条例第65号）第55条の4第2項</p>	<p>(1) 訓練記録が整備されていない。</p> <p>(2) 訓練記録が不十分である。</p>	<p>B</p> <p>B</p>
	<p>3 杉並区地域防災計画に定められた洪水浸水想定区域内等又は土砂災害警戒区域内の要配慮者利用施設の所有者又は管理者は、避難確保計画で定めるところにより、避難訓練を実施し、その結果を区に報告しなければならない。</p>	<p>5 避難確保計画で定めるところにより、避難訓練を実施し、区に報告しているか。</p>	<p>(1) 水防法第15条の3第5項 (2) 土砂災害防止法第8条の2第5項</p>	<p>(1) 避難確保計画で定めるところにより、避難訓練を実施していない。</p> <p>(2) 区に報告していない。</p>	<p>B</p> <p>B</p>
(6)災害発生時への備え	<p>実際に火災や地震などの災害に直面した時のために、保育施設として適切に行動できるよう次のとおり備えておくこと。</p> <p>① 保育施設の立地条件や規模、地域の実情等を踏まえた上で、地域や火災などの災害が発生した時の対応等について各事業所でマニュアルを作成し、事業所の防災対策を確立しておく必要がある。</p>	<p>1 災害の発生に備え、マニュアルを作成しているか。</p>	<p>(1) 保育所保育指針第3章4(2)ア (2) 雇児給発0909第2号通知</p>	<p>(1) 災害発生に備えたマニュアルを作成していない。</p>	<p>B</p>

項目	基本的考え方	観点	関係法令等	評価事項	評価
	② 地域の関係機関及び関係者との連携については、区の支援の下、連絡体制の整備をはじめ地域の防災計画に関連した協力体制を構築していくことが重要である。各関連機関等とは、定期的に行う避難訓練等への協力なども含め、地域の実情に応じて必要な連絡や協力が得られるようにしておくことが重要である。	2 地域の関係機関と日常的な連携を図り、必要な協力が得られるよう努めているか。	(1) 保育所保育指針第3章4(3)イ (2) 雇児総発 0909 第2号通知	(1) 地域の関係機関と日常的な連携を図り、必要な協力が得られるよう努めていない。	B
(7) 保安設備	1 家庭的保育事業等は、消火器等の消火用具、非常口その他非常災害に必要な設備を設け、これに対する日常的な点検を怠らないようにする。 2 非常警報器具又は非常警報設備の設置 (1) 区家基条例による設置 [家庭的保育] 火災報知器及び消火器を設置 [上記以外] 保育室等を3階以上の階に設置する場合、非常警報器具、非常警報設備又は消防機関へ火災を通報する設備 (2) 消防法施行令による設置 ① 非常警報設備(非常ベル、自動式サイレン、放送設備) 収容人員50人以上の場合に設置 ただし、自動火災報知設備を基準に従い設置しているときは、当該設備の有効範囲内については、この限りではない。	1 消防用設備等の点検及び報告をしているか。 2 消防用設備等の自主点検をしているか。 3 点検後の不良箇所を改善しているか。 4 避難器具を設置しているか。 5 非常警報器具又は非常警報設備を設置しているか。	(1) 区家基条例第8条第1項 (2) 消防法第17条の3の3 (1) 消防法施行令第3条の2第2項、第4項 (2) 社施第59号通知6 (1) 社施第59号通知6 (1) 区家基条例 第8条第1項[家庭的保育]、 第28条[小規模A型]、 第31条[小規模B型]、 第34条[小規模C型]、 第45条[保育所型事業所内]、 第49条[小規模型事業所内] (2) 区家基条例施行規則第5条他 (3) 消防法施行令第25条 (1) 区家基条例施行規則 第5条第7号[家庭的保育]、 第7条第9号カ[小規模A型]、 第9条(準用)[小規模B型]、 第12条第8号キ[保育所型事業所内]、 第14条(準用)[小規模型事業所内] (2) 消防法施行令第24条	(1) 消防用設備等の点検及び報告をしていない。 (1) 消防用設備等の自主点検をしていない。 (1) 不良箇所の改善を行っていない。 (1) 避難器具を設置していない。 (1) 未設置である。 (2) 整備が不十分である。	B B B B C B

項目	基本的考え方	観点	関係法令等	評価事項	評価
	<p>② 非常警報器具（非常警報器具、手動式サイレン、その他）収容人員 20 人以上 50 人未満のとき ただし、自動火災報知設備又は非常警報設備を基準に従い設置しているときは、当該設備の有効範囲内については、この限りではない。</p> <p>3 消防機関へ通報する設備等の設置</p> <p>(1) 区家基条例による設置</p> <p>① 消防機関へ火災を通報する設備 3 階以上の保育事業施設</p> <p>(2) 消防法施行令による設置</p> <p>① 自動火災報知機設備 延面積が 300 m²以上の防火対象物（利用者を入居させ、又は宿泊させるものはすべて）</p> <p>② 消防機関へ通報する火災報知設備 延面積が 500 以上の防火対象物</p> <p>③ 漏電火災報知器 特定の場所を準不燃材以外の材料で造った場合であつて、延面積が 300 m²以上又は契約電気量 50A を超える場合</p>	<p>2 地域の関係機関と日常的な連携を図り、必要な協力が得られるよう努めているか。</p>	<p>(1) 保育所保育指針第 3 章 4 (3) イ</p> <p>(2) 雇児総発 0909 第 2 号通知</p>	<p>(1) 地域の関係機関と日常的な連携を図り、必要な協力が得られるよう努めていない。</p>	B
(8)安全対策	<p>法人及び施設管理者並びに従事者は、子どもの安全の確保について、特別の注意を有し、日常の安全管理と緊急時の安全確保に努めなければならない。</p> <p>外部からの不審者等の侵入防止、事故発生時等の適切な救命措置、その他重大事故等のための措置や訓練など不測の事態に備えて必要な対応を図ること。</p> <p>〈例〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・職員の共通理解を図り、役割を明確にし、協力体制をとる。 ・施設設備面の安全確保を図り、点検する。 ・関係機関や地域との連携を図る。 ・送迎バス等一定台数以上の自動車の使用者は、自動車の使用の本拠（事業所等）ごとに、安全運転管理者の選任等を行う。 	<p>1 安全対策について、必要な措置を講じているか。</p>	<p>(1) 保育所保育指針第 3 章 3 (2)、第 3 章 4 (1)</p> <p>(2) 雇児総発第 402 号通知</p> <p>(3) 道交法（昭和 35 年 6 月 25 日法律第 105 号）第 74 条の 3</p> <p>(4) 道交法施行規則（昭和 35 年 12 月 3 日総理府令第 60 号）第 9 条の 9、10</p>	<p>(1) 安全対策について、必要な措置を講じていない。</p> <p>(2) 安全対策について、必要な措置が不十分である。</p>	C B

項目	基本的考え方	観点	関係法令等	評価事項	評価
	<p>1 安全計画 保育所は、児童の安全を図るため、設備の安全点検、職員、児童等に対する保育所外での活動、取組等を含めた保育所での生活その他の日常生活における安全に関する、指導、職員の研修及び訓練その他保育所における安全に関する事項についての計画（以下「安全計画」という。）を策定し、当該安全計画に基づき必要な安全措置を講じなければならない。 策定した安全計画について保育所は職員に周知し、研修や訓練を定期的実施しなければならない。 保育所は、児童の安全の確保に関して保護者との連携を図られるよう、保護者等に対し、保育所での安全計画に基づく取組内容等を周知しなければならない。 保育所は、定期的に安全計画の見直しを行い、必要に応じて安全計画の変更を行うものとする。</p> <p>2 自動車を運行する場合の所在の確認 保育所は児童の送迎を目的とした自動車を日常的に運行するときは、当該自動車にブザーその他の車内の児童の所在の見落としを防止する装置を備え、これを用いて降車の際の所在の確認を行わなければならない。 参考「送迎用バスの置き去り防止を支援する安全装置のガイドライン（令和4年12月20日 送迎用バスの置き去り防止を支援する安全装置の仕様に関するガイドラインを検討するワーキンググループ編） ※安全装置設置の経過措置期間は令和6年3月31日まで（可能な限り令和5年6月末までに設置することが望ましい。） なお、経過措置期間内において安全装置が設置されるまでの間は、代替措置を講ずること。</p>	<p>2 安全計画を策定しているか。</p> <p>3 安全計画に定める研修及び訓練を定期的実施しているか。</p> <p>4 保護者に対し、安全計画に基づく取組の内容について周知しているか。</p> <p>5 「送迎用バスの置き去り防止を支援する安全装置のガイドライン」に適合している見落とし防止装置が設置されているか。</p> <p>6 安全装置を用いて降車の際の所在確認を行っているか。</p>	<p>(1)区家基条例第8条の2第1項～第4項</p> <p>(1)区家基条例第8条の3第1項、第2項</p>	<p>(1)安全計画を策定していない。</p> <p>(1)安全計画に定める研修及び訓練を実施していない。</p> <p>(1)保護者に対し、安全計画に基づく取り組みの内容等について周知していない。</p> <p>(1)送迎用バスに見落とし防止装置が設置されていない。</p> <p>(2)安全装置を用いて降車の際の所在確認を行っていない。</p>	<p>C</p> <p>C</p> <p>C</p> <p>C</p> <p>C</p>
12 利用手続等 (1)情報提供及び虚偽・誇大広告の禁止	<p>1 事業者は、保護者が、その希望を踏まえ適切に事業所を選択できるよう、保育の内容に関する情報の提供を行うよう努めなければならない。</p> <p>2 事業所について、虚偽又は誇大な内容の広告をしてはならない。</p>	<p>1 保護者に対して情報提供に努めているか。</p> <p>1 虚偽又は誇大な広告をしていないか。</p>	<p>(1)区特基条例第50条により準用第28条第1項</p> <p>(1)区特基条例第50条により準用第28条第2項</p>	<p>(1)情報の提供が十分に行われていない。</p> <p>(1)虚偽又は誇大な広告を行っている。</p>	<p>B</p> <p>C</p>

項目	基本的考え方	観点	関係法令等	評価事項	評価
(2)重要事項の説明	<p>1 事業者は、保育の提供の開始に際しては、あらかじめ、利用申込者の教育・保育の選択に資すると認められる重要事項を、文書の交付または所定の方法により提供して説明を行い、当該提供の開始について、利用申込者の同意を得なければならない。</p> <p>なお、上記の文書の交付については、利用申込者の承諾がある場合、電磁的方法により提供することができる。</p> <p>2 事業所は、利用申込者の事業所の選択に資すると認められる重要事項を掲示しなければならない。</p>	<p>1 保育の提供の開始に際して、重要事項を記した文書を所定の方法で交付して説明を行い、同意を得ているか。</p> <p>2 事業所の見やすい場所に重要事項を掲示しているか。</p>	<p>(1)区特基条例第 38 条 区特基条例第 53 条の 6 項により準用第 53 条第 1 項～第 5 項</p> <p>(1)区特基条例第 50 条により準用第 23 条</p>	<p>(1)保育の提供の開始に際して、説明を行っていない。または、保護者の同意を得ていない。</p> <p>(2)説明、同意が不十分である。</p> <p>(1)掲示していない</p>	<p>C</p> <p>B</p> <p>B</p>
(3)あっせん等に対する協力	<p>1 事業所は、子ども・子育て支援法第 42 条第 1 項の規定により区が行うあっせん及び要請にできる限り協力しなければならない。</p>	<p>1 区にできる限り協力しているか</p>	<p>(1)区特基条例第 40 条</p>	<p>(1)正当な理由なく拒否する等、区に協力していない。</p>	<p>C</p>
(4)受給資格等の確認	<p>1 事業所は、保育の提供を求められた場合は、保護者の提示する支給認定証によって、認定の有無、区分、有効期間及び保育必要量等を確認するものとする。</p>	<p>1 支給認定証の提示を受け、内容を確認しているか。</p>	<p>(1)区特基条例第 50 条により準用第 8 条</p>	<p>(1)提示させ確認していない。</p>	<p>B</p>
(5)給付認定の申請に係る援助	<p>1 事業所は、支給認定を受けていない保護者から利用の申込があった場合は、速やかに申請が行われるよう必要な援助を行わなければならない。</p> <p>2 事業所は、緊急その他やむを得ない理由がある場合を除き、給付認定の変更の申請が、従前の認定の有効期間の満了の日の 30 日前までに行われるよう必要な援助を行わなければならない。</p>	<p>1 支給認定の申請に係る援助を適切に行っているか。</p>	<p>(1)区特基条例第 50 条により準用第 9 条</p>	<p>(1)適切な援助を行っていない。</p>	<p>B</p>
(6)支給認定保護者に関する区への通知	<p>1 事業所の職員は、子どもに係る保護者が偽りその他不正の手段によって施設型給付費の支給を受け、又は受けようとしたときは、遅滞なく、意見を付してその旨を区に通知しなければならない。</p> <p>2 区への通知についての記録を整備し、その完結の日から 5 年間保存しなければならない。</p>	<p>1 保護者の不正行為を知った場合に、遅滞なく、意見を付して区に通知しているか。</p> <p>1 区への通知についての記録を整備し、完結の日から 5 年間保存しているか。</p>	<p>(1)区特基条例第 50 条により準用第 19 条</p> <p>(1)区特基条例第 49 条第 2 項</p>	<p>(1)区への通知を怠っている。</p> <p>(1)記録を整備していない、又は保存していない。</p> <p>(2)記録が不十分である。</p>	<p>C</p> <p>C</p> <p>B</p>
(7)利益供与等の禁止	<p>1 事業所は、地域子ども・子育て支援事業、教育・保育施設若しくは地域型保育を行う者等又はその職員等に対し、小学校就学前子ども又はその家族に対し、当該事業所を紹介することの対償として、金品その他の財産上の利益を供与してはならない。</p> <p>2 事業所は、地域子ども・子育て支援事業、教育・保育施設若しくは地域型保育を行う者等又はその職員から、小学校就学前子ども又はその家族を紹介することの対償として、金品その他の財産上の利益を収受してはならない。</p>	<p>1 金品その他の財産上の利益を供与又は収受していないか。</p>	<p>(1)区特基条例第 50 条により準用例 29 条</p>	<p>(1)金品その他の財産上の利益を供与又は収受していないか。</p>	<p>C</p>

保 育 編

目 次

1	保育の状況	
(1)	保育の基本原則	1
(2)	人権の尊重	2
(3)	養護に関する基本的事項	3
(4)	全体的な計画の作成	3
(5)	指導計画の作成	3
(6)	指導計画の展開	4
(7)	保育内容等の評価	5
(8)	保育の体制	6
(9)	整備すべき帳簿	7
(10)	保護者との連携	7
(11)	相談及び援助	7
2	食事の提供の状況	
(1)	食育計画	8
(2)	食事計画と献立業務	8
(3)	食事の提供	10
(4)	衛生管理	12
(5)	給食供給者の届出等	14
(6)	調理業務委託	14
(7)	食事の外部搬入	15
3	健康・安全の状況	
(1)	保健計画	16
(2)	子どもの健康診断	16
(3)	健康状態の把握	17
(4)	虐待等への対応	17
(5)	疾病等への対応	17
(6)	乳幼児突然死症候群の予防及び睡眠中の事故防止	19
(7)	子どもの安全確保	20

[凡例]

以下の関係法令及び通知等を略称して次のように表記する。

No.	関係法令及び通達等	略称
1	平成 26 年 10 月 14 日条例第 27 号「杉並区家庭的保育事業等の設備及び運営の基準に関する条例」	区家基条例
2	平成 26 年 10 月 14 日条例第 28 号「杉並区特定教育・保育施設及び特定地域型保育事業の運営の基準に関する条例」	区特基条例
3	平成 29 年 3 月 31 日厚生労働省告示第 117 号「保育所保育指針」	保育所保育指針
4	昭和 22 年 12 月 12 日法律第 164 号「児童福祉法」	児童福祉法
5	平成 12 年 5 月 24 日法律第 82 号「児童虐待の防止等に関する法律」	児童虐待の防止等に関する法律
6	平成 28 年 8 月 23 日府子本第 571 号「特定教育・保育等に要する費用の額の算定に関する基準等の改正に伴う実施上の留意事項について」	留意事項通知
7	平成 30 年 9 月 27 日公定価格に関する FAQ【Ver.12】	公定価格に関する FAQ
8	令和 3 年 3 月 19 日子発 0319 第 1 号「保育所等における短時間勤務の保育士の導入について」	子発 0319 第 1 号通知
9	平成 30 年 3 月 30 日子保発 0330 第 2 号「保育所保育指針の適用に関しての留意事項について」	子保発 0330 第 2 号通知
10	令和 2 年 3 月 31 日子発 0331 第 1 号「児童福祉施設における食事の提供に関する援助及び指導について」	子発 0331 第 1 号通知
11	平成 17 年 6 月 17 日法律第 63 号「食育基本法」	食育基本法
12	平成 16 年 3 月 29 日雇児保発第 0329001 号「保育所における食を通じた子どもの健全育成（いわゆる食育）に関する取組の推進について」	雇児保発第 0329001 号通知
13	令和 3 年 4 月 1 日子保発 0401 第 2 号通知「第 4 次食育推進基本計画」に基づく保育所における食育の推進について」	子保発 0401 第 2 号通知
14	令和 2 年 3 月 31 日子母発 0331 第 1 号「児童福祉施設における「食事摂取基準」を活用した食事計画について」	子母発 0331 第 1 号通知
15	令和 2 年 1 月 21 日厚生労働省告示第 10 号「食事による栄養摂取量の基準」の一部を改正する件	食事による栄養摂取量の基準
16	平成 13 年 8 月 1 日雇児総発第 36 号「児童福祉施設等における衛生管理及び食中毒予防の徹底について」	雇児総発第 36 号通知
17	平成 9 年 3 月 31 日社援発第 65 号「社会福祉施設における衛生管理について」	社援発第 65 号通知
18	平成 8 年 6 月 18 日社援発第 97 号「社会福祉施設における食中毒事故発生防止の徹底について」	社援発第 97 号通知
19	平成 16 年 1 月 20 日雇児発第 0120001 号「児童福祉施設等における衛生管理等について」	雇児発第 0120001 号通知
20	昭和 47 年 9 月 30 日労働省令第 32 号「労働安全衛生規則」	労働安全衛生規則
21	昭和 39 年 8 月 1 日児発第 669 号「児童福祉施設等における衛生管理の強化について」	児発第 669 号通知
22	平成 20 年 3 月 7 日雇児総発第 0307001 号「社会福祉施設等における食品の安全確保について」	雇児総発第 0307001 号通知
23	平成 8 年 7 月 25 日社援発第 117 号「社会福祉施設における保存食の保存期間について」	平成 8 年社援発第 117 号通知
24	平成 17 年 2 月 22 日健発第 0222002 号、薬食発第 0222001 号、雇児発第 0222001 号、社援発第 0222002 号、老発第 0222001 号「社会福祉施設等における感染症発生時に係る報告について」	雇児発第 0222001 号通知
25	平成 8 年 8 月 8 日児企発第 26 号「腸管出血性大腸菌感染症の指定伝染病への指定等に伴う保育所等における対応について」	児企発第 26 号通知
26	昭和 22 年 12 月 24 日 法律第 233 号「食品衛生法」	食品衛生法
27	昭和 28 年 8 月 31 日 政令第 229 号「食品衛生法施行令」	食品衛生法施行令

No.	関係法令及び通達等	略称
28	昭和23年7月13日 厚生省令第23号「食品衛生法施行規則」	食品衛生法施行規則
29	令和2年8月5日 薬生食監発0805第3号「食品衛生法等の一部を改正する法律の施行に伴う集団給食施設の取扱いについて」	薬生食監発0805第3号通知
30	令和3年4月1日 2福保健食第2373号「法による営業の許可や届出を要しない小規模給食施設及びボランティア等による食事の提供について」	2福保健食第2373号
31	平成10年2月18日 児発第86号「保育所における調理業務の委託について」	児発第86号通知
32	昭和33年4月10日 法律第56号「学校保健安全法」	学校保健安全法
33	昭和33年6月10日 政令第174号「学校保健安全法施行令」	学校保健安全法施行令
34	昭和33年6月13日 文部省令第18号「学校保健安全法施行規則」	学校保健安全法施行規則
35	昭和58年4月21日 児発第284号「保育所における嘱託歯科医の設置について」	児発第284号通知
36	平成31年3月29日 東京都条例第50号「東京都子供への虐待の防止等に関する条例」	東京都子供への虐待の防止等に関する条例
37	平成31年2月28日 府子本第189号、30文科初第1616号、子発0228第2号、障発0228第2号「児童虐待防止対策に係る学校等及びその設置者と市町村・児童相談所との連携の強化について」	子発0228第2号通知
38	平成31年2月28日 府子本第190号、30文科初第1618号、子発0228第3号、障発0228第3号「学校、保育所、認定こども園及び認可外保育施設等から市町村又は児童相談所への定期的な情報提供について」	子発0228第3号通知
39	平成28年3月23日 27福保子保第3650号「保育施設における睡眠中の事故防止及び救急対応策の徹底について（通知）」	27福保子保第3650号通知
40	平成30年10月12日 30福保子保第3635号「保育施設における睡眠中の事故防止及び救急対応策の徹底について（通知）」	30福保子保第3635号通知
41	昭和46年7月31日 児発第418号「児童福祉施設における事故防止について」	児発第418号通知
42	平成25年2月8日 「保育所及び認可外施設における事故防止について」	雇児保第0308号第1号
43	平成13年6月15日 雇児総発第402号「児童福祉施設等における児童の安全の確保について」	雇児総発第402号通知
44	平成12年4月25日 児発第471号「児童福祉行政指導監査の実施について」	児発第471号通知
45	令和2年6月12日 府子本第659号、4初幼教第9号、子少発0613第1号、子保発0613第1号「教育・保育施設等においてプール活動・水遊びを行う場合の事故の防止について（通知）」	府子本第659号通知
46	昭和57年7月2日 57福児母第353号「保育所における事故防止について」	都第353号通知
47	平成26年9月5日 雇児発0905第2号「家庭的保育事業等の設備及び運営に関する基準の運用上の取扱いについて」	雇児発0905第2号通知
48	平成27年3月27日 26福保子保第2984号「特定教育・保育施設等における事故発生時等の対応について」	26福保子保第2984号通知
49	平成28年3月31日 府子本第191号・27文科初第1788号・雇児総発0331第6号・雇児職発0331第1号・雇児福発0331第2号・雇児保発0331第2号「教育・保育施設等における重大事故の再発防止のための事後的な検証について」	重大事故の再発防止のための事後的な検証通知
50	平成29年11月10日 府子本第912号、29初幼教第1号、子保発1110第1号、子子発1110第1号、子家発1110第1号「特定教育・保育施設等における事故の報告等について」	府子本第912号通知

項目	基本的考え方	観点	関係法令等（準拠を含む）	評価事項	評価
<p>1 保育の状況 (1) 保育の基本原則</p>	<p>(役割) 特定地域型保育事業者（家庭的保育事業、小規模保育事業、または事業所内保育事業を行う者をいう。以下、「事業者」という。）は、児童福祉法第6条の3第9項から第12項の規定に基づき、保育を必要とする子どもの保育を行い、その健全な心身の発達を図ることを目的とする事業であり、当該保育を必要とする子どもの最善の利益を考慮し、その福祉を積極的に増進することに最もふさわしい生活の場でなければならない。 特定地域型保育事業所（特定地域型保育事業を行う事業所をいう。以下、「事業所」という。）における保育は、保育所保育指針に規定される保育の内容に係る基本原則を踏まえ、各地域型保育事業所の特性に留意して、保育する子どもの心身の状況等に応じた保育を提供しなければならない。</p> <p>(目標) 事業所は、子どもが生涯にわたる人間形成にとって極めて重要な時期に、その生活時間の大半を過ごす場である。このため、事業所の保育は、子どもが現在を最も良く生き、望ましい未来をつくり出す力の基礎を培うために、次の目標を目指して行わなければならない。 乳児保育では身体的発達に関する視点「健やかにのびのび育つ」、社会的発達に関する視点「身近な人と気持ちを通じ合う」及び精神的発達に関する視点「身近なものとの関わり感性が育つ」を目指す。 1歳以上児では、心身の健康に関する領域「健康」、人との関わりに関する領域「人間関係」、身近な環境との関わりに関する領域「環境」、言葉の獲得に関する領域「言葉」、及び感性と表現に関する領域「表現」を目指す。 事業者（地域型保育事業を行う者をいう。以下同じ。）は、当該保育を必要とする子どもの保護者に対し、その意向を受け止め、子どもと保護者の安定した関係に配慮し、事業所の特性や保育士等の専門性を生かして、その援助に当たらなければならない。</p> <p>(方法) 保育の目標を達成するために、保育士等は、次の事項に留意して保育しなければならない。 ① 一人一人の子どもの状況や家庭及び地域社会での生活の実態を把握するとともに、子どもが安心感と信頼感を持って活動できるよう、子どもの主体としての思いや願いを受け止めること。 ② 子どもの生活リズムを大切にし、健康、安全で情緒の安定した生活ができる環境や、自己を十分に発揮できる環境を整えること。</p>	<p>1 保育の内容は適切か。</p>	<p>(1) 区家基条例第25条[家庭的]、第30条[小規模A型]、第33条[小規模B型]、第37条[小規模C型]、第48条[保育所型事業所内]、第51条[小規模型事業所内] (2) 保育所保育指針第1章、第2章</p>	<p>(1) 保育の内容が適切でない。 (2) 保育の内容が不十分である。</p>	<p>C B</p>

項目	基本的考え方	観点	関係法令等（準拠を含む）	評価事項	評価
<p>(2)人権の尊重 ア 人格を尊重した保育</p> <p>イ 虐待等の行為</p>	<p>③ 子どもの発達について理解し、一人一人の発達過程に応じて保育すること。その際、子どもの個人差に十分配慮すること。</p> <p>④ 子ども相互の関係作りや互いに尊重する心を大切にし、集団における活動を効果あるものにするよう援助すること。</p> <p>⑤ 子どもが自発的、意欲的に関わられるような環境を構成し、子どもの主体的な活動や子ども相互の関わりを大切にすること。特に、乳幼児期にふさわしい体験が得られるように、生活や遊びを通して総合的に保育すること。</p> <p>⑥ 一人一人の保護者の状況やその意向を理解、受容し、それぞれの親子関係や家庭状況等に配慮しながら、様々な機会をとらえ、適切に援助すること。</p> <p>(環境) 保育の環境には、保育士等や子どもなどの人的環境、施設や遊具などの物的環境、更には自然や社会の事象などがある。事業所は、こうした人、物、場などの環境が相互に関連し合い、子どもの生活が豊かなものとなるよう、計画的に環境を構成し、工夫して保育しなければならない。</p> <p>(社会的責任) 事業者は、地域社会との交流や連携を図り、保護者や地域社会に当該事業者が行う保育の内容を適切に説明するよう努めなければならない。</p> <p>事業者は、入所する子ども等の個人情報適切に取り扱うとともに、保護者の苦情などに対し、その解決を図るよう努めなければならない。</p> <p>事業者は、子どもの最善の利益を考慮し子どもの人権に十分配慮するとともに、子ども一人一人の人格を尊重して保育を行わなければならない。</p> <p>一人一人の子どもが、自分の気持ちを安心して表すことができ周囲から主体として受け止められ、主体として育ち、自分を肯定する気持ちが育まれるようにすること。</p> <p>事業所の保育士は倫理観に裏付けられた専門的知識、技術及び判断をもって、子どもを保育すること。</p> <p>事業所の職員は、入所中の子どもに対し次に掲げる行為その他子どもの心身に有害な影響を与える行為をしてはならない。</p> <p>① 子どもの身体に外傷が生じ、又は生じるおそれのある暴行を加えること。</p> <p>② 子どもにわいせつな行為をすること又は子どもにわいせつな行為をさせること。</p> <p>③ 子どもの心身の正常な発達を妨げるような著しい減食又は長時間の放置、同居人若しくは生活を共にする他の子どもによる①、②又は④の行為の放置、その他の事業所職員としての養育</p>	<p>1 子ども一人一人の人格を尊重した保育を行っているか。</p> <p>2 子どもの心身に有害な影響を与える行為をしていないか。</p>	<p>(1)区家基条例第6条第2項 (2)区特基条例第50条により準用第31条</p> <p>(1)区家基条例第6条第1項 (2)区家基条例第12条 (3)保育所保育指針第1章1 (1)ア、エ(5)ア、2 (2)イ(ア)②、③</p> <p>(1)区家基条例第13条 (2)児童福祉法第33条の10 (3)児童虐待の防止等に関する法律第3条 (4)保育所保育指針第1章1 (1)ア、エ(5)ア</p>	<p>(1)子ども一人一人の人格を尊重した保育を行っていない。</p> <p>(2)子ども一人一人の人格を尊重した保育が不十分である。</p> <p>(2)心身に有害な影響を与える行為をしている。</p>	<p>C</p> <p>B</p> <p>C</p>

項目	基本的考え方	観点	関係法令等（準拠を含む）	評価事項	評価
(3) 養護に関する基本的事項	<p>又は業務を著しく怠ること。</p> <p>④ 子どもに対する著しい暴言又は著しく拒絶的な対応、その他の子どもに著しい心理的外傷を与える言動を行うこと。</p> <p>(理念) 保育における養護とは、子どもの生命の保持及び情緒の安定を図るために保育士等が行う援助や関わりであり、事業所における保育は養護及び教育を一体的に行うことをその特性とするものである。事業所における保育全体を通じて、養護に関するねらい及び内容を踏まえた保育が展開されなければならない。</p>	1 養護の内容は適切か。	(1) 区特基条例第 44 条 (2) 保育所保育指針第 1 章 2	(1) 養護の内容が適切でない。 (2) 養護の内容が不十分である。	C B
(4) 全体的な計画の作成	<p>事業所は、保育所保育指針第 1 章 1 の (2) に示した保育の目標を達成するため、各事業所の保育の方針や目標に基づき、子どもの発達過程を踏まえて、保育の内容が組織的・計画的に構成され事業所での生活の全体を通して、総合的に展開されるよう、全体的な計画を作成しなければならない。</p> <p>全体的な計画は、子どもや家庭の状況、地域の実態、保育時間などを考慮し、子どもの育ちに関する長期的見通しをもって適切に作成されなければならない。</p> <p>全体的な計画は、事業所の保育の全体像を包括的に示すものとし、これに基づく、指導計画、保健計画、食育計画等を通じて、各事業所が創意工夫して保育できるよう、作成されなければならない。</p>	1 全体的な計画を作成しているか。 2 全体的な計画の内容は十分か。	(1) 区特基条例第 49 条 (2) 保育所保育指針第 1 章 3 (1) ア、イ、ウ	(1) 全体的な計画を作成していない。 (2) 全体的な計画の内容が不十分である。	C B
(5) 指導計画の作成 ア 指導計画の構成	<p>事業所は、全体的な計画に基づき、具体的な保育が適切に展開されるよう、子どもの生活や発達を見通した長期的な指導計画と、それに関連しながら、より具体的な子どもの日々の生活に即した短期的な指導計画を作成しなければならない。</p>	1 長期的な指導計画を作成しているか。 2 短期的な指導計画を作成しているか。	(1) 区特基条例第 49 条 (2) 保育所保育指針第 1 章 3 (2) ア	(1) 長期的な指導計画を作成していない。 (2) 短期的な指導計画を作成していない。	C C
イ 作成上の留意事項	<p>子ども一人一人の発達過程や状況を十分踏まえるとともに、次の事項に留意しなければならない。</p> <p>① 3 歳未満児については、一人一人の子どもの生育歴、心身の発達、活動の実態等に即して、個別的な計画を作成すること。</p> <p>② 3 歳以上児については、個の成長と、子ども相互の関係や協同的な活動が促されるよう配慮すること。</p> <p>③ 異年齢で構成される組やグループでの保育においては、一人一人の子どもの生活や経験、発達過程などを把握し、適切な援助や環境構成ができるよう配慮すること。</p>	1 3 歳未満児について、個別的な指導計画を作成しているか。 2 個別的な指導計画の内容は十分であるか。	(1) 区特基条例第 49 条 (2) 保育所保育指針第 1 章 3 (2) イ (ア) (イ) (ウ)	(1) 3 歳未満児について、個別的な指導計画を作成していない。 (2) 個別的な指導計画の内容が不十分である。	B B

項目	基本的考え方	観点	関係法令等（準拠を含む）	評価事項	評価
ウ ねらい及び内容、環境構成	<p>指導計画においては、事業所の生活における子どもの発達過程を見通し、生活の連続性、季節の変化などを考慮し、子どもの実態に即した具体的なねらい及び内容を設定すること。</p> <p>また、具体的なねらいが達成されるよう、子どもの生活する姿や発想を大切に適切な環境を構成し、子どもが主体的に活動できるようにする。</p>	<p>1 具体的なねらい及び内容が設定されているか。</p> <p>2 具体的なねらいが達成されるよう、適切な環境を設定しているか。</p>	<p>(1)区特基条例第 49 条 2 (1)</p> <p>(2)保育所保育指針第 1 章 3 (2) ウ</p>	<p>(1)具体的なねらい及び内容が設定されていない。</p> <p>(2)具体的なねらいが達成されるよう、適切な環境を設定していない。</p>	<p>B</p> <p>B</p>
エ 生活リズムの調和	<p>1 日の生活リズムや在園時間が異なる子どもが共に過ごすことを踏まえ、活動と休息、緊張感と解放感等の調和を図るよう配慮すること。</p>	<p>1 生活リズムの調和を図るよう配慮しているか。</p>	<p>(1)保育所保育指針第 1 章 3 (2) エ</p>	<p>(1)生活リズムの調和を図るよう配慮していない。</p>	<p>B</p>
オ 午睡の環境確保と配慮	<p>午睡は生活のリズムを構成する重要な要素であり、安心して眠ることのできる安全な睡眠環境を確保するとともに、在園時間が異なることや、睡眠時間は子どもの発達の状況や個人によって差があることから、一律とならないよう配慮すること。</p>	<p>1 午睡等の適切な休息をとっているか。</p> <p>2 安全な睡眠環境を確保しているか。</p> <p>3 一律とならないよう配慮しているか。</p>	<p>(1)区特基条例第 10 条</p> <p>(2)区家基条例第 6 条第 6 項</p> <p>(3)保育所保育指針 第 1 章 2 (2) ア (イ) ④ 第 1 章 2 (2) イ (イ) ④ 第 1 章 3 (2) オ</p>	<p>(1)午睡等の適切な休息をとっていない。</p> <p>(2)安全な睡眠環境を確保していない。</p> <p>(3)一律とならないよう配慮していない。</p>	<p>C</p> <p>B</p> <p>B</p>
カ 長時間にわたる保育	<p>長時間にわたる保育については、子どもの発達過程、生活のリズム及び心身の状態に十分配慮して、保育の内容や方法、職員の協力体制、家庭との連携などを指導計画に位置付けること。</p>	<p>1 長時間にわたる保育について、保育の内容等を指導計画に位置付け、適切に対応しているか。</p>	<p>(1)保育所保育指針第 1 章 3 (2) カ</p>	<p>(1)長時間にわたる保育について、指導計画への位置付け、対応が不十分である。</p>	<p>B</p>
キ 障害のある子どもの保育	<p>障害のある子どもの保育については、一人一人の子どもの発達過程や障害の状態を把握し、適切な環境の下で、障害のある子どもが他の子どもとの生活を通して共に成長できるよう、指導計画の中に位置付けること。また、子どもの状況に応じた保育を実施する観点から、家庭や関係機関と連携した支援のための計画を個別に作成するなど適切な対応を図ること。</p>	<p>1 障害のある子どもの保育について、発達過程や障害の状態を把握し、指導計画の中に位置付け、適切に対応しているか。</p>	<p>(1)保育所保育指針 第 1 章 3 (2) キ 第 3 章 2 (2) ウ 第 4 章 2 (2) イ</p>	<p>(1)障害のある子どもの保育について、指導計画への位置付け対応が不十分である。</p> <p>(2)障害のある子どもの保育について、家庭や専門機関との連携が不十分である。</p>	<p>B</p> <p>B</p>
(6)指導計画の展開	<p>1 指導計画に基づく保育の実施に当たっては、次の事項に留意しなければならない。</p> <p>① 施設長、保育士などすべての職員による適切な役割分担と協力体制を整えること。</p> <p>② 子どもが行う具体的な活動は、生活の中で様々に変化することに留意して、子どもが望ましい方向に向かって自ら活動を展開できるように必要な援助を行うこと。</p> <p>③ 子どもが主体的な活動を促すためには、保育士等が多様な関わりをもつことが重要であることを踏まえ、子どもの情緒の安定や発達に必要な豊かな体験が得られるよう援助すること。</p>	<p>1 指導計画に基づく保育が十分であるか。</p>	<p>(1)保育所保育指針 第 1 章 3 (3) ア、イ、ウ</p>	<p>(1)指導計画に基づく保育が不十分である。</p> <p>(2)職員による役割分担と協力体制が不十分である。</p>	<p>B</p> <p>B</p>

項目	基本的考え方	観点	関係法令等（準拠を含む）	評価事項	評価
(7)保育内容等の評価	<p>2 保育士等は、子どもの実態や子どもを取り巻く状況の変化などに即して保育の過程を記録するとともに、これらを踏まえ、指導計画に基づく保育の内容の見直しを行い、改善を図ること。</p> <p>3 保育日誌は、保育の過程（全体的な計画・指導計画に基づく保育集団の状況）の記録である。保育の実践を正確に把握し、保育士の反省の資料として次の保育の手がかりとなる重要な記録簿である。 なお、合同保育を行っている場合には合同保育日誌の作成が必要である。</p>	<p>2 指導計画に基づく保育の内容の見直しを行い、改善を図っているか。</p> <p>3 保育日誌を作成しているか。</p> <p>4 保育日誌の記録は十分か。 0・1歳児は個人別記録も作成しているか。</p>	<p>(1)保育所保育指針 第1章3(3)エ(5)イ</p> <p>(1)区家基条例第19条 (2)区特基条例第49条 (3)保育所保育指針第1章3(3)エ</p>	<p>(1)指導計画に基づく保育の内容の見直し、改善が不十分である。</p> <p>(1)保育日誌を作成していない。</p> <p>(2)保育日誌の記録内容が不十分である。</p>	<p>B</p> <p>C</p> <p>B</p>
	<p>1 保育士等は、保育の計画や保育の記録を通して、自らの保育実践を振り返り、自己評価することを通して、その専門性の向上や保育実践の改善に努めなければならない。</p> <p>① 保育士等による自己評価に当たっては、子どもの活動内容やその結果だけでなく、子どもの心の育ちや意欲、取り組み過程などに十分配慮するよう留意すること。</p> <p>② 保育士等は、自己評価における自らの保育実践の振り返りや職員相互の話し合い等を通じて、専門性の向上及び保育の質の向上のための課題を明確にするとともに、事業所全体の保育の内容に関する認識を深めること。</p>	<p>1 保育士等の自己評価を行い、専門性の向上や保育実践の改善を行っているか。</p>	<p>(1)区家基条例第6条第3項 (2)保育所保育指針 第1章3(4)ア(5)</p>	<p>(1)保育士等の自己評価を行わず、専門性の向上や保育実践の改善を行っていない。</p>	<p>B</p>
	<p>2 事業者は、自らその行う児童福祉法第6条の3⑨⑩⑪⑫に規定する業務の質の評価を行い、常にその改善を図らなければならない。 事業者の自己評価は、保育の計画の展開や保育士等の自己評価を踏まえて行い、結果を公表するよう努めなければならない。 事業者が自己評価を行うに当たっては、地域の実情や事業所の実態に即して、適切に評価の観点や項目等を設定し、全職員による共通理解をもって取り組むよう留意すること。</p> <p>3 事業者は、評価の結果を踏まえ、当該事業所の保育の内容等の改善を図ること。 保育の計画に基づく保育、保育の内容の評価及びこれに基づく改善という一連の取組により、保育の質の向上が図られるよう、全職員が共通理解をもって取り組むことに留意すること。</p> <p>参考 保育所における自己評価ガイドライン（厚生労働省）</p>	<p>2 事業所の自己評価を行っているか。</p> <p>3 評価の結果を踏まえ、保育の内容等の改善を図っているか。</p>	<p>(1)区家基条例第6条第3項 (2)保育所保育指針 第1章3(4)イ、(5)第5章1(2)</p>	<p>(2)事業所の自己評価を行っていない。</p> <p>(3)評価結果を踏まえ、保育の内容等の改善を図っていない。</p>	<p>C</p> <p>B</p>

項目	基本的考え方	観点	関係法令等（準拠を含む）	評価事項	評価
<p>(8)保育の体制</p> <p>ア 保育時間、開所時間及び開所日数</p>	<p>事業所における保育時間は、原則として一日につき小規模保育事業所・事業所内保育事業所は11時間、家庭的保育事業所は8時間とし、子どもの保護者の労働時間、家庭の状況等を考慮し、事業所の長がこれを定めること。</p> <p>事業所は、保育を必要とする子どもを日々保護者の下から通わせて保育を行うことを目的とする事業所であり、理由なく保育時間を短縮したり休所することは許されない。</p> <p>休所又は一部休所（事業所としては開所しているが、一部の子どもを休ませている場合をいう。）の理由とは、</p> <p>① 感染症の疾患 ② 非常災害の発生 ③ 大規模地震対策特別措置法に基づく「警戒宣言」の発令などである。</p>	<p>1 保育時間、開所・閉所時間、開所日数が適切に設けられているか。</p>	<p>(1)区家基条例第24条[家庭的]、第30条[小規模A型]、第33条[小規模B型]、第37条[小規模C型]、第48条[事業所内保育]、第51条[小規模型事業所内]</p>	<p>(1)事業所の都合で保育時間を短縮している。 C (2)保育時間を定めるに当たって保護者の労働時間等を考慮していない。 C (3)小規模保育事業所・事業所内保育事業所は11時間、家庭的保育事業所は8時間の開所時間を確保していない。 C (4)全部又は一部休所している。 C (5)家庭保育を依頼している。 B</p>	
<p>イ 保育士及び保育従事者の配置</p>	<p>保育に直接従事する職員は、児童の定員及び入所している児童の数それぞれについて、区家基条例及び留意事項通知（特定教育・保育等に要する費用の算定に関する基準等の改正に伴う実施上の留意事項について）（平成28年8月23日府子本第571号雇児発0823第1号通知をいう。以下同じ。）における基本分単価に定める計算式により算出し、いずれか多い方の員数とする。</p> <p>小規模保育事業A型及びB型、事業所内保育事業については、常勤の保育士（法18条の18第1項の登録を受けた者又は区家基条例第29条第3項、32条第3項、46条第3項、50条第3項に定める者に限る。）が各組や各グループに1人以上（乳児を含む組又はグループにかかる区家基条例上の保育士定数が2人以上の場合は、2人以上）配置されていること。</p>	<p>1 保育士を適正に配置しているか。</p> <p>2 常勤の保育士が各組や各グループに1人以上配置されているか。</p>	<p>(1)区家基条例第23条、第29条、第32条、第35条、第40条 (2)区特基条例第47条 (3)留意事項通知別紙2 (4)杉並区特定地域型保育事業運営費等支給要綱</p> <p>(1)公定価格に関するFAQ (2)子発0319第1号</p>	<p>(1)区家基条例及び留意事項における基本分単価に定める職員を配置していない。 C (2)その他不適正な事項がある。 C (1)常勤の保育士を各組や各グループに1人（場合により2人）以上配置していない。 C</p>	

項目	基本的考え方	観点	関係法令等（準拠を含む）	評価事項	評価	
(9)整備すべき帳簿	1 児童出欠簿は、入退所の状況又は各種報告の基礎になるものであり、全ての子どもについて毎日正確に記録し、保管場所を定めておく必要がある。	1 児童出欠簿を作成しているか。	(1)区家基条例第19条 (2)区特基条例第50条により準用第12条、第49条	(1)児童出欠簿を作成していない。 (2)児童出欠簿の記録が不十分である。	C B	
	2 児童票には、個々の子どもの状態を把握するものとして子どもの保育経過記録と、子どもの保育上必要な最低限の家庭の状況等の参考記録が必要である。	2 児童票を作成しているか。	(1)区家基条例第19条 (2)区特基条例第50条により準用第12条、第49条 (3)保育所保育指針第1章3(3)エ	(1)児童票を作成していない。 (2)児童票の記録が不十分である。	C B	
	3 事業者は、子どもに対する保育の提供に関する次に掲げる記録を整備し適切に保存しなければならない。 (1)保育所保育指針に基づく特定教育・保育の提供にあたっての計画 (2)特定教育・保育を提供した際の、提供した日、内容その他必要な事項 整備すべきものは、上記児童出欠簿、児童票ほか、項目(4)「全体的な計画の作成」、項目(5)「指導計画の作成」、項目(6)「指導計画の展開」を参照	3、必要な記録を整備し、保存しているか。	(1)区特基条例第34条第2項	(1)記録を整備し、適切に保存していない。 (2)記録が不十分である。	C B	
(10)保護者との連携	事業所の長は、常に入所している子どもの保護者と密接な連絡をとるとともに、保育の内容等につき、当該保護者の理解及び協力を得るよう努めなければならない。 日常の保育に関連した様々な機会を活用し子どもの日々の様子の伝達や収集、事業者の意図の説明などを通じて、保護者との相互理解を図るよう努めること。なお、3歳未満児については、連絡帳を備えること。	1 保護者との連携は十分か。	(1)区家基条例第26条[家庭的]、第30条[小規模A]、第33条[小規模B]、第37条[小規模C]、第51条[小規模事業所内] (2)区特基条例第50条により準用第17条 (3)保育所保育指針第1章2(2)ア(イ)第2章1(3)4(3)第3章1(1)、(3)第4章2(1)ア	(1)保護者との連絡体制ができていない。 (2)保護者との連絡が不十分である。 (3)緊急時の連絡先の把握が不十分である。	C B B	
	(11)相談及び援助	事業者は、常に子どもの心身の状況その置かれている環境等の的確な把握に努め、子どもまたはその保護者に対し、その相談に適切に応じるとともに、必要な助言その他の援助を行わなければならない。	1 個人面談等で子どもの心身の状況、置かれている環境等の把握に努めているか。	(1)区特基条例第10条、第17条 (2)保育所保育指針第2章1(3)エ、第4章1(1)2(1)(2)	(1)把握に努めていない。	B
		2 子ども又はその保護者に対し、相談に応じ、助言その他援助を行っているか。	(1)相談に応じていない。 (2)助言その他援助を行っていない。 (3)援助が不十分である。	C C B		

項目	基本的考え方	観点	関係法令等（準拠を含む）	評価事項	評価
2 食事の提供の状況	<p>（食育の環境の整備等）</p> <p>日々提供される食事について、食事内容や食事環境に充分配慮すること。また、子どもや保護者等に対する献立の提示等に関する情報の提供や、食事づくり等食に関する体験の機会の提供を行うとともに、「食育」の実践に努めること。</p> <p>子どもが自らの感覚や体験を通して、自然の恵みとしての食材や調理する人への感謝の気持ちが育つように、子どもと調理員との関わりや、調理室など食に関わる保育環境に配慮すること。</p> <p>ゆとりある時間と、採光や安全性の高い食事の空間を確保し、温かい雰囲気になるよう配慮すること。テーブル、椅子、食器や食具の材質や形などは子どもの発達に応じて選択し、食べる場に温かみを感じることができるよう配慮すること。</p> <p>保護者や地域の多様な関係者との連携及び協働の下で、食に関する取組が進められること。また、区の支援の下に、地域の関係機関等との日常的な連携を図り、必要な協力が得られるよう努めること。</p> <p>参考「保育所における食事の提供ガイドライン」「楽しく食べる子どもに～保育所における食育に関する指針～」（厚生労働省）</p>		<p>(1)区家基条例第15条 (2)保育所保育指針第3章2 (3)子母発 0331 第1号通知 (4)食育基本法 (5)雇児保発第 0329001 号通知</p>		
(1)食育計画	<p>乳幼児期にふさわしい食生活が展開され、適切な援助が行われるよう、食事の提供を含む食育の計画を全体的な計画に基づいて作成し、保育の計画に位置付けるとともに、その評価及び改善に努めること。栄養士が配置されている場合は、専門性を生かした対応を図ること。</p> <p>作成に当たっては、柔軟で発展的なものとなるように留意し、同時に、各年齢を通して一貫性のあるものとする必要がある。</p> <p>食育の計画を踏まえて実践が適切に進められているかどうかを把握し、次の食育の資料とするため、その経過や結果を記録し、自己の食育実践を評価し、改善するように努めること</p>	1 食事の提供を含む食育計画を全体的な計画に基づいて作成しているか。	<p>(1)区家基条例第15条 (2)保育所保育指針第3章2 (1)ウ (3)雇児保発第 0329001 号通知 (4)子保発 0401 第2号通知</p>	(1)食事の提供を含む食育計画を全体的な計画に基づいて作成していない。	B
(2)食事計画と献立業務 ア 食事計画	1 食事の提供に当たっては、子どもの発育・発達状況、栄養状態、生活状況等について把握し、提供する食事の量と質についての計画（以下「食事計画」という。）を立てること。食事計画について、「食事による栄養摂取量の基準」を活用する場合には、園や子どもの特性に応じた適切な活用を図ること。	1 食事による栄養摂取量の基準を活用した食事計画を策定しているか。	<p>(1)区家基条例第15条第5項 (2)子発 0331 第1号通知 (3)子母発 0331 第1号通知 (4)食事による栄養摂取量の基準</p>	(1)食事による栄養摂取量の基準を活用した食事計画を策定していない。	B

項目	基本的考え方	観点	関係法令等（準拠を含む）	評価事項	評価
イ 献立の作成	<p>2 子どもの年齢、発育・発達状況、栄養状態、生活状況等を把握・評価し、提供することが適当なエネルギー及び栄養素の量（以下「給与栄養量」という。）の目標を設定するよう努めること。</p> <p>昼食など1日のうち特定の食事を提供する場合には、対象となる子どもの生活状況や栄養摂取状況を把握、評価した上で、1日全体の食事に占める特定の食事から摂取されることが適当とされる給与栄養量の割合を勘案し、その目標を設定するよう努めること。</p>	2 給与栄養量の目標を設定しているか。	(1)区家基条例第15条第2項 (2)子発 0331 第1号通知 (3)子母発 0331 第1号通知	(1)給与栄養量の目標を設定していない。	B
	<p>3 献立作成、調理、盛りつけ・配膳、喫食等各場面を通して関係する職員が多岐にわたることから、定期的に施設長を含む関係職員による情報の共有を図るとともに、常に施設全体で、食事計画・評価を通して食事の提供に係る業務の改善に努めること。</p>	3 定期的に施設長を含む関係職員が参加の上、給食（献立）会議等による情報の共有を図っているか。	(1)子発 0331 第1号通知 2 (4) (2)子母発 0331 第1号通知 3 (2)	(1)定期的に施設長を含む関係職員参加の上、給食（献立）会議による情報の共有を図っていない。	B
	<p>事業所において、子どもに食事を提供するに当たっては、食品の種類及び調理方法について、栄養並びに子どもの身体的状況及び嗜好を考慮するとともに、可能な限り変化に富み、子どもの健全な発育に必要な栄養量を含有する献立によらなければならない。</p> <p>献立作成に当たっては、子どもの食に関する嗜好や体験が広がりかつ深まるよう、季節感や地域性等を考慮し、品質が良く、多様な食品や料理の組み合わせにも配慮すべきであり、簡易な食事の提供は認められない。簡易な食事の提供とは、米飯の外注・既製品の多用・副食の一部外注のほか、パンと牛乳・カップラーメンなどの調理の手間を省いている食事をいう。</p> <p>献立作成に当たっては、子どもの咀嚼や嚥下機能、食具使用の発達状況等を観察し、その発達を促すことができるよう、食品の種類や調理方法に配慮すること。</p> <p>日々提供される食事については、食事内容や食事環境に十分配慮すること。また、子どもや保護者等に対する献立の掲示等食に関する情報の提供や、食事づくり等食に関する体験の機会の提供を行うとともに、将来を見据えた食を通じた自立支援につながる食育の実践に努めること。</p> <p>例示</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 2週間周期以上の献立となっている。 ・ 誕生会、行事食等が盛り込まれている。 ・ 四季に応じた食品が使用されている。 	1 献立を適切に作成しているか。	(1)区家基条例第15条 第2項 3項 (2)子発 0331 第1号通知 (3)子母発 0331 第1号通知	<p>(1)献立を作成していない。</p> <p>(2)予定献立の記載が不十分である。</p> <p>(3)責任者の関与がない</p> <p>(4)簡易な食事の提供の回数が著しく多い、又は継続している。</p> <p>(5)献立が季節感などを考慮した変化に富む内容になっていない。</p> <p>(6)既製品（インスタント食品・市販の調理済み製品等）の使用が随所にみられる。</p> <p>(7)おやつが甘味品・菓子類に偏っている。</p>	C B B C B B B

項目	基本的考え方	観点	関係法令等（準拠を含む）	評価事項	評価
ウ 給食材料の用意、保管	<p>献立で計画されたメニューを可能な限り正確に実施するには、日々食数を把握し、必要量を購入することになる。そして、食品購入（の手続き）受払等は、適切に管理、把握しなければならない。給食規模の大小にかかわらず、発注・払出は伝票等により把握すること。</p> <p>原料食品の購入に当たっては、品質、鮮度、汚染状態等に留意する等検収を確実に実施し、事故発生の防止に努めること。</p>	1 給食材料を適切に用意、保管しているか。	(1) 区家基条例第 15 条、第 19 条 (2) 雇児総発第 36 号通知 (3) 社援施第 65 号通知 (4) 社援第 97 号通知 (5) 児発第 471 号通知 別紙 1-2(2)第 2 [共通事項](3)	(1) 正当な理由なく、献立に従って食品を購入していない。 (2) 数量に大幅な違いがみられる。 (3) 発注書・納品書がない、又は不十分である。 (4) 発注に当たって責任者の関与がない。 (5) 食品材料の検収を全く行っていない。 (6) 在庫食品の受払を把握していない、又は不十分である。	C C B B C B
(3)食事の提供 ア 献立に基づく提供	調理は、あらかじめ作成された献立に従って行わなければならない。	1 あらかじめ作成された献立に従って食事を提供しているか。 2 食事の提供に関する記録（給食日誌、実施献立等）を作成しているか。	(1) 区家基条例第 15 条第 4 項 (2) 児発第 471 号通知 別紙 1-2(2)第 2 [共通事項](4)	(1) 正当な理由なく、献立に従って食事を提供していない。 (1) 食事の提供に関する記録を作成していない。 (2) 実施献立の記載内容が不十分である。	C C B
イ 子どもの状況に応じた配慮	<p>1 一人一人の子どもの生活リズム、発達過程、保育時間などに応じて、活動内容のバランスや調和を図りながら、適切な食事がとれるようにすること。</p> <p>体調不良、食物アレルギー、障害のある子どもなど、一人一人の子どもの心身の状態等に応じ、嘱託医、かかりつけ医等の指示や協力の下に適切に対応すること。栄養士が配置されている場合は、専門性を生かした対応を図ること。</p> <p>2 「食事による栄養摂取量の基準」は、乳児、1～2歳児、3～5歳児の各段階で給与栄養目標量を定めているが、3歳未満児は食品の種類・調理方法に子どもの身体的状況及び発達段階での咀嚼力向上について考慮する必要がある。</p> <p>(乳児) 乳児の食事は、個人差に応じて授乳を行い、離乳を進めていく中で、様々な食品に少しずつ慣れ、食べることを楽しめるよう配慮すること。</p> <p>健康な心と体を育てるためには望ましい食習慣の形成が重要であることを踏まえ、離乳食が完了期へと徐々に移行する中で様々な食品に慣れるようにするとともに、和やかな雰囲気の中で食べる喜びや楽しさを味わい、進んで食べようとする気持ちが育つようにすること。</p>	1 子どもの状況に応じた配慮をしているか。 2 乳児及び1歳以上3歳未満児に対する配慮をしているか。	(1) 区家基条例第 15 条第 3 項 (2) 保育所保育指針 第 1 章 2 (2) イ (イ) ④ 第 3 章 2 (2) ウ (1) 区家基条例第 15 条 (2) 保育所保育指針 第 2 章 1 (2) ア (イ) ① ③、(ウ) ② 第 2 章 1 (3) ウ 第 2 章 2 (2) ア (イ) ② ④、(ウ) ②④ (3) 子母発 0331 第 1 号通知 (4) 食事による栄養摂取量の基準 (5) 児発第 471 号通知 別紙 1-2(2)第 2 [共通事項](5)	(1) 子どもの状況に応じた配慮を行っていない。 (2) 子どもの状況に応じた配慮が不十分である。 (1) 3歳未満児に対する配慮を行っていない。 (2) 3歳未満児に対する配慮が不十分である。	C B C B

項目	基本的考え方	観点	関係法令等（準拠を含む）	評価事項	評価
ウ 食事の中止等	<p>乳児保育に関わる職員間の連携や嘱託医との連携を図り、保育所保育指針第3章に示す事項を踏まえ適切に対応すること。栄養士及び看護師等が配置されている場合は、その専門性を生かした対応を図ること。</p> <p>（1歳以上3歳未満児）</p> <p>1歳以上3歳未満児の食事は、一人一人の状態に応じ、落ち着いた雰囲気の中で行うようにし、自分でしようとする気持ちを尊重すること。また、基本的な生活習慣の形成に当たっては家庭での生活経験に配慮し、家庭との適切な連携の下で行うようにすること。</p> <p>健康な心と体を育てるためには望ましい食習慣の形成が重要であることを踏まえ、ゆったりとした雰囲気の中で食べる喜びや楽しさを味わい、進んで食べようとする気持ちが育つようにすること。</p> <p>参考「授乳・離乳の支援ガイド」（厚生労働省）</p> <p>3 子どもの健康と安全の向上に資する観点から、子どもの食物アレルギー等に配慮した食事の提供を行うとともに、食物アレルギー対策に取り組み、食物アレルギーを有する子どもの生活がより一層、安心・安全なものとなるよう誤配および誤食等の発生予防に努めること。</p> <p>子ども自身が自分の食物アレルギーの状況を自覚し、食物アレルギーを有していることを自身の言葉で伝えることが困難であることなども踏まえ、生活管理指導表等を活用するなどして状況を把握するとともに、平素より危機管理体制を構築しておくこと。</p> <p>*具体定な対応については3健康・安全の状況（5）参照</p> <p>参考「保育所におけるアレルギー対応ガイドライン」（厚生労働省）「食物アレルギー緊急時対応マニュアル」「保育園・幼稚園・学校における食物アレルギー日常生活・緊急時対応ガイドブック」（東京都福祉保健局）</p> <p>食事は主食、副食及び間食を毎日提供する必要がある。理由なく食事を提供しないことは一種の保護者負担を共有することになる。</p> <p>なお、食事の中止が認められる理由とは、</p> <p>① 感染症の発生に伴う保健所の指示</p> <p>② 非常災害等で給食することが不可能などである。</p>	<p>3 食物アレルギーへの対応を適切に行っているか。</p> <p>1 事業所の都合で食事を中止していないか。</p>	<p>(1)保育所保育指針 第2章1(2)ア(ウ)② 第2章2(2)ア(ウ)②</p> <p>(2)子発 0331 第1号通知</p> <p>(1)区家基条例第15条</p> <p>(2)保育所保育指針 第1章2(2)イ(イ)④ 第2章3(2)ア(イ)⑤</p> <p>(3)子母発 0331 第1号通知</p>	<p>(1)食物アレルギーへの対応を適切に行っていない。</p> <p>(2)食物アレルギーへの対応が不十分である。</p> <p>(1)食事の提供を中止している。</p> <p>(2)間食を提供していない。</p> <p>(3)その他不適正な事項がある。</p>	<p>C</p> <p>B</p> <p>C</p> <p>B</p> <p>B</p>

項目	基本的考え方	観点	関係法令等（準拠を含む）	評価事項	評価
(4)衛生管理 ア 検便	<p>食事の提供で最も留意しなければならないことは、衛生上の安全対策であり、調理や調乳を行う者については、事業所における衛生管理及び食中毒予防を徹底しなければならない。特に、赤痢、サルモネラやO157等の感染症・食中毒の予防は極めて重要であり、調理従事者及び調乳担当者については、月1回以上の検便を実施すること。また、雇入れの際及び調理又は調乳業務への配置換えの際の検便を適切に実施し、検便結果を確認した上で調理又は調乳業務に従事させること。</p> <p>検便検査には、腸管出血性大腸菌の検査を含めることとし、10月から3月までの間には月1回以上または必要に応じてノロウイルスの検便検査に努めること。</p>	<p>1 調理従事者及び調乳担当者の月1回以上の検便を適切に実施及び確認の上従事させているか（雇入れの際及び調理又は調乳業務への配置換えについても同様に行っているか）。</p> <p>2 検便の検査結果を適切に保管しているか。</p>	<p>(1)食品衛生法施行規則第66条の2、別表第17 (2)薬生食監発0805第3号通知 (3)区家基条例第17条4項 (4)区家基条例第19条 (5)雇児総発第36号通知 (6)社援施第65号通知 (7)雇児発第0120001号通知 (8)労働安全衛生規則第47条、第51条 (9)子母発0331第1号通知3 (4)</p>	<p>(1)調理従事者及び調乳担当者の検便を適切に行っていない。 (2)その他不十分な事項がある。（検査項目不足等） (1)検査結果を適切に保管していない。</p>	<p>C B C</p>
イ 調理従事者の健康チェック及び調理室等の点検	<p>調理従事者及び調乳担当者は、食品衛生上必要な健康状態の把握に留意し、下痢、嘔吐、発熱などの症状があった時、手指等に化膿創があった時は調理作業に従事しないこと。下痢又は嘔吐等の症状がある調理従事者及び調乳担当者については、直ちに医療機関を受診し、感染症疾患の有無を確認すること。</p> <p>施設長等の責任者は、事業所の衛生管理に関する責任者（以下「衛生管理者」という。）に調理室等の衛生管理の点検作業を行わせるとともに、そのつど点検結果を報告させ、適切に点検が行われたことを確認して記録を保管すること。</p> <p>施設長等の責任者は、衛生管理者に毎日作業開始前に、各調理従事者等及び各調乳担当者の健康状態を確認させ、その結果を記録させること。</p> <p>調理室、食器等及び飲用に供する水について、衛生的な管理に努め、衛生上必要な措置を講じること。</p>	<p>1 調理従事者及び調乳担当者の健康チェックを毎日行い記録しているか。</p> <p>2 調理室、食材等の衛生管理は適切か。</p>	<p>(1)食品衛生法施行規則第66条の2、第66条の3、別表第17、別表第18 (2)食品衛生法施行令第34条の2 (3)薬生食監発0805第3号通知 (4)区家基条例第19条 (5)雇児総発第36号通知 (6)社援施第65号通知 (7)子母発0331第1号通知3 (4)</p> <p>(1)食品衛生法施行規則第66条の2、第66条の3、別表第17、別表第18 (2)食品衛生法施行令第34条の2 (3)薬生食監発0805第3号通知 (4)区家基条例第14条1、第16条1（1） (5)雇児総発第36号通知 (6)社援施第65号通知 (7)児発第669号通知</p>	<p>(1)調理従事者及び調乳担当者の健康チェックを行っていない。（下痢、嘔吐、発熱、手指の傷・化膿創等） (2)調理従事者・調乳担当者の健康チェックが不十分である。 (1)調理室の衛生管理が不適切である。 (2)衛生管理の自主点検を行い、記録していない。 (3)食材及び食器等の洗浄及び保管が不適切である。</p>	<p>C B B C</p>

項目	基本的考え方	観点	関係法令等（準拠を含む）	評価事項	評価
ウ 食中毒事故対策	<p>1 食中毒事故の発生防止については、新鮮な食品の入手、適温管理をはじめ、特に調理、盛りつけ時の衛生（なま物はなるべく避け、加熱を十分行う、盛りつけは手で行わない等）には十分留意すること。また、調理後はなるべく速やかに喫食させるようにし、やむを得ない場合は冷蔵保存等に努めること。</p> <p>食中毒の発生を防止するための措置等について、必要に応じ保健所の助言、指導を求めるとともに密接な連携を保つこと。施設内外の適切な環境の維持に努めるとともに乳幼児及び職員が、手洗い等により清潔を保つようにすること。また、職員は衛生知識の向上に努めること。</p>	<p>1 食中毒事故の発生予防を行っているか。</p>	<p>(1)食品衛生法施行規則第66条の2、第66条の3、別表第17、別表第18</p> <p>(2)食品衛生法施行令第34条の2</p> <p>(3)薬生食監発0805第3号通知</p> <p>(4)区家基条例第14条1.2.4</p> <p>(5)子母発0331第1号通知3(4)</p> <p>(6)社援施第65号通知</p> <p>(7)保育所保育指針第3章3(1)</p> <p>(8)社援施第97号通知</p> <p>(9)雇児発第0222001号通知</p>	<p>(1)食中毒事故の発生予防を行っていない。</p> <p>(2)食中毒事故の発生予防が不十分である。</p>	<p>C</p> <p>B</p>
	<p>2 検食を食事提供前に行い、異味、異臭その他の異常が感じられる場合には、直ちに食事の提供を中止するなどの措置を講ずること。</p>	<p>2 検食を適切に行っているか。</p>	<p>(1)雇児総発第0307001号</p>	<p>(1)検食を適切に行っていない。</p> <p>(2)検食の実施方法が不十分である。</p> <p>(3)検食の記録を作成していない。</p>	<p>C</p> <p>B</p> <p>B</p>
	<p>3 万一、食中毒事故が発生した場合、あるいはその疑いが生じた場合には医師の診察を受けるとともに、速やかに最寄りの保健所に連絡を取り指示を仰ぐなどの措置を取り、事故の拡大を最小限にとどめるように徹底すること。</p>	<p>3 食中毒事故が発生した場合の事後対策がとられているか。</p>	<p>(1)保育所保育指針第3章3(1)</p> <p>(2)社援施第97号通知</p> <p>(3)雇児発第0222001号通知</p> <p>(4)児企発第26号通知</p>	<p>(1)食中毒事故が発生した場合の事後対策がとられていない。</p> <p>(2)食中毒事故が発生した場合の事後対策が不十分である。</p>	<p>C</p> <p>B</p>
	<p>4 食中毒事故の原因究明のため、検査用保存食を保存すること。原材料及び調理済み食品を食品ごとに50g程度ずつ清潔な容器(ビニール袋等)に密封して入れ、-20℃以下で2週間以上保存すること。原材料は、特に洗浄、殺菌等を行わず、購入した状態で保存すること。</p> <p>小規模保育施設(*)では、可能な限り、メニューごとに提供する食品を約50gずつポリ小袋等清潔な容器に採取し、冷凍保存しておくこと。期間は2週間程度が望ましいが難しい場合はできる範囲で差し支えない。</p> <p>*小規模給食施設とは、営業以外の場合で1回の提供食数が20食程度未満の、少数特定の者に継続的に食事を供給する給食施設をいう。</p>	<p>4 検査用保存食を適切に保存しているか。</p>	<p>(1)2福保健食第2373号別紙</p> <p>(2)平成8年社援施第117号</p> <p>(3)雇児総発第36号通知</p>	<p>(1)検査用保存食を保存していない。</p> <p>(2)検査用保存食の保存方法・保存期間等が一部不適切である。</p>	<p>C</p> <p>B</p>

項目	基本的考え方	観点	関係法令等（準拠を含む）	評価事項	評価
(5)営業の届出等（集団給食施設） ア 営業の届出（集団給食施設）	<p>集団給食施設（*）の設置者又は管理者は、事業所の所在地、名称等について、事業所の所在地を管轄する保健所等に届け出なければならない（令和3年6月1日時点で現に稼働している集団給食施設については、令和3年11月30日までに届け出なければならない）。</p> <p>なお、調理業務を外部事業者へ委託する場合、事業所の調理場を使用するか否かにかかわらず、受託事業者は通常の営業と同様に飲食店営業の許可を受ける必要がある。</p> <p>*集団給食施設—営業以外の場合で学校、病院その他の施設において継続的に不特定又は多数の者に食品を供与する事業所。 ・20食程度未満の給食施設については上記の事項は適用されない。</p>	1 営業の届出をしているか。	(1)食品衛生法第57条、第68条 (2)食品衛生法施行規則第70条の2 (3)薬生食監発0805第3号通知	(1)営業の届出をしていない。	B
イ 食品衛生責任者の選任	<p>集団給食施設の設置者又は管理者は、食品衛生責任者を定めること。</p> <p>食品衛生責任者には、医師、歯科医師、薬剤師、獣医師、栄養士等のほか、都道府県知事等が行う講習会又は都道府県知事等が適正と認める講習会を受講した者を当てることが可能。 ・20食程度未満の給食施設については上記の事項は適用されない。</p>	1 食品衛生責任者を選任しているか。	(1)食品衛生法施行規則第66条の2、別表第17 (2)2福保健食第2373号別紙 (3)薬生食監発0805第3号通知	(1)食品衛生責任者を選任していない。	B
(6)調理業務委託	<p>調理業務については、事業者が責任を持って行えるよう事業所の職員により行われることが原則であり、望ましい。</p> <p>しかしながら、事業所の管理者が業務上必要な注意を果たし得るような体制及び契約内容により、事業所職員による調理と同様な食事の質が確保される場合には、保育内容の確保につながるよう十分配慮しつつ、当該業務を第三者に委託することは差し支えない。</p> <p>調理業務を委託する場合は、事業所や保健所、区の栄養士により、献立等について栄養面での指導を受けられるような体制にあるなど栄養面での配慮をするほか、児発第86号通知を順守すること。</p> <p>また、契約内容、事業所と受託業者との業務分担及び経費負担を明確にした契約書を取り交わすこと。契約書には、以下の事項を含めること。</p>	1 調理業務を委託している場合に、適切に行っているか。	(1)児発第86号通知 (2)雇児発0905第2号	(1)調理業務委託契約書を作成していない。 (2)調理業務委託契約書に必要な事項が盛り込まれていない。 (3)食事の質が確保されていない。 (4)事業所内の調理室を使用して調理していない。 (5)栄養面での配慮がされていない。 (6)事業所が行う業務を行っていない。 (7)事業所が行う業務が不十分である。 (8)その他児発第86号通知に違反している事項がある。	C C C C C C B C

項目	基本的考え方	観点	関係法令等（準拠を含む）	評価事項	評価
(7)食事の外部搬入	<p>① 受託業者に対して、事業所側から必要な資料の提出を求めることができる。</p> <p>② 受託業者が契約書で定めた事項を誠実に履行しないと事業者が認めるとき、その他受託業者が適正な給食を確保する上で支障となる行為を行ったときは、契約期間中であっても事業所側において契約を解除できること。</p> <p>③ 受託業者の労働争議その他の事情により、受託業務の遂行が困難となった場合の業務の代行保証に関すること。</p> <p>④ 受託業者の責任で法定伝染病又は食中毒等の事故が発生した場合及び契約に定める義務を履行しないため事業所に損害を与えた場合は、受託業者は事業所に対し、損害賠償を行うこと。</p> <p>⑤ 事業所における給食の趣旨を十分認識し、適正な給食材料を使用するとともに所要の栄養量が確保される調理を行うものであること。</p> <p>⑥ 調理業務に従事する者の大半は、当該業務について相当の経験を有するものであること。</p> <p>⑦ 調理業務従事者に対して、定期的に、衛生面及び技術面の教育又は訓練を実施するものであること。 調理業務従事者に対して、定期的に、健康診断及び検便を実施するものであること</p> <p>1 事業者は、子どもに食事を提供するときは、当該施設内で調理する方法により行うことが原則である。 しかしながら、次の各号に掲げる要件を満たす事業所の子どもへの食事の提供について、次項に規定する施設（以下「搬入施設」という。）において調理し、搬入する方法により提供することができる。ただし、当該事業所で行うべき調理のための加熱、保存等の調理機能を有する設備を備えなければならない。</p> <p>① 子どもに食事を提供する責任が当該事業所にあり、その管理者が、衛生面、栄養面等業務上必要な注意を果たし得るような体制及び調理義務の受託者との契約内容が確保されていること。</p> <p>② 当該事業所等又は他の事業所、保健所、区等の栄養士により、献立等について栄養の観点からの指導を受ける等、必要な配慮が行われること。</p> <p>③ 調理業務の受託者については、当該事業所による給食の趣旨を十分に認識し、衛生面、栄養面等、調理業務を適切に遂行できる能力を有するとともに、子どもの年齢及び発達の段階並びに健康状態に応じた食事の提供、アレルギー、アトピー等への配慮、必要な栄養素量の給与等に適切に対応できる者とする事。</p>	<p>1 食事を外部搬入により提供している場合に、適切に行っているか。</p>	<p>(1)区家基第16条1、2 (2)雇児発 0905 第2号通知</p>	<p>(1)条例で定める基準を満たさずに、当該事業所外で調理し、搬入している。</p>	<p>C</p>

項目	基本的考え方	観点	関係法令等（準拠を含む）	評価事項	評価
3 健康・安全の状況	<p>④ 食を通じた子どもの健全育成を図る観点から、子どもの発育及び発達過程に応じて食に関し配慮すべき事項を定めた食育に関する計画に基づき食事を提供するよう努めること。</p> <p>2 搬入施設は、次の各号に掲げるいずれかの事業所とする。</p> <p>① 連携施設</p> <p>② 当該事業者と同一の法人または関連法人が運営する小規模保育事業若しくは事業所内保育事業を行う事業所、社会福祉施設、医療機関等</p> <p>子どもの健康及び安全の確保は、子どもの生命の保持と健全な生活の基本であり、事業所においては、一人一人の子どもの健康の保持及び増進並びに安全の確保とともに、事業所全体における健康及び安全の確保に努めることが重要となる。</p> <p>また、子どもが、自らの体や健康に関心を持ち、心身の機能を高めていくことが大切である。</p>				
(1) 保健計画	<p>子どもの健康に関する保健計画を全体的な計画に基づいて作成し、全職員がそのねらいや内容を踏まえ、一人一人の子どもの健康の保持及び増進に努めていくこと。</p>	1 保健計画を作成しているか。	(1) 保育所保育指針第3章1(2)ア	(1) 保健計画を作成していない。	B
(2) 子どもの健康診断	<p>事業者は、子どもに対し利用開始時の健康診断、少なくとも1年に2回の定期健康診断及び臨時の健康診断を学校保健安全法（昭和33年法律第56号）に規定する健康診断に準じて行わなければならない。</p> <p>子どもの心身の健康状態や疾病等の把握のために、嘱託医等により定期的に健康診断を行い、その結果を記録し、活用するとともに、保護者に連絡し、保護者が子どもの状態を理解し、日常生活に活用できるようにすること。</p>	1 健康診断を適切に行っているか。	(1) 区家基17条 (2) 学校保健安全法第11条第13条、第17条 (3) 学校保健安全法施行令 (4) 学校保健安全法施行規則 (5) 保育指針第3章1(2)イ (6) 児発第284号通知	(1) 利用開始時の健康診断を行っていない。 (2) 健康診断を年2回行っていない。 (3) 実施時期・方法等が不適切である。	C C B
		2 健康診断の記録を作成しているか。	(1) 区家基第17条 (2) 保育所保育指針第3章1(2)イ	(1) 子どもの健康診断の実施状況とその結果を記録していない。 (2) 健康診断記録が不十分である。	C B
		3 保護者と健康診断結果について連絡をとっているか。	(1) 区家基第26条 (2) 保育所保育指針第3章1(2)イ	(1) 保護者と連絡をとっていない。 (2) 保護者との連絡が不十分である。	C B

項目	基本的考え方	観点	関係法令等（準拠を含む）	評価事項	評価
(3)健康状態の把握	<p>1 一人一人の子どもの平常の健康状態や発育及び発達状態を的確に把握し、異常を感じる場合は、速やかに適切に対応すること。</p> <p>保護者からの情報とともに、登所時及び保育中を通じて子どもの状態を観察し、何らかの疾病が疑われる状態や傷害が認められた場合には、保護者に連絡するとともに、嘱託医と相談するなど適切な対応を図ること。看護師等が配置されている場合には、その専門性を生かした対応を図ること。</p> <p>2 子どもの心身の状態に応じて保育するために、子どもの健康状態並びに発育及び発達状態について定期的、継続的に、また、必要に応じて随時把握すること。</p>	<p>1 日々の健康状態を観察しているか。</p> <p>2 必要に応じ、保護者に連絡をしているか。</p> <p>3 身長、体重等の測定を定期的に行っているか。</p>	<p>(1)区家基第25条[家庭的] 30条[小規模A型] 33条[小規模B型] 37条[小規模C型] 48条[事業所内保育] 51条[小規模型事業所内保育]</p> <p>(2)保育所保育指針 第1章2(2)ア(イ)① 第3章1(1)イ</p> <p>(1)保育所保育指針第3章1(1)ア</p> <p>(2)区家基第25条[家庭的]、30条[小規模A型]、33条[小規模B型]、37条[小規模C型]、48条[事業所内保育]、51条[小規模型事業所内保育]</p>	<p>(1)日々の健康状態を観察していない。</p> <p>(2)日々の健康状態の観察が不十分である。</p> <p>(1)保護者と連絡をとっていない。</p> <p>(2)保護者との連絡が不十分である。</p> <p>(1)身長、体重等の測定を定期的に行っていない。</p>	<p>C</p> <p>B</p> <p>C</p> <p>B</p> <p>B</p>
(4)虐待等への対応	<p>子どもの心身の状態を観察し、不適切な養育の兆候が見られる場合、また、虐待が疑われる場合には、速やかに区又は子ども家庭支援センター、児童相談所に通告し、適切な対応を図ること。</p>	<p>1 子どもの虐待の早期発見のために子どもの心身の状態等を観察しているか。</p> <p>2 虐待が疑われる場合や不適切な養育の兆候が見られる場合に、適切に対応しているか。</p>	<p>(1)区特基条例第3条4</p> <p>(2)保育所保育指針第3章1(1)ウ 第4章2(3)イ</p> <p>(3)児童虐待の防止等に関する法律第5条第6条</p> <p>(4)児童福祉法第25条</p> <p>(5)東京都子供への虐待の防止等に関する条例第7条</p> <p>(6)子発0228第2号通知</p> <p>(7)子発0228第3号通知</p>	<p>(1)児童虐待の早期発見のために子どもの心身の状態等を観察していない。</p> <p>(1)適切に対応していない。</p> <p>(2)関係機関との連携が図られていない。</p>	<p>C</p> <p>C</p> <p>C</p>
(5)疾病等への対応 ア 体調不良・傷害	<p>保育中に体調不良や傷害が発生した場合には、子どもの状態等に応じて、保護者に連絡するとともに、適宜、嘱託医や子どものかかりつけ医等と相談し、適切な処置を行うこと。看護師等が配置されている場合には、その専門性を生かした対応を図ること。</p>	<p>1 体調不良等への対処を適切に行っているか。</p>	<p>(1)区特基条例第50条により準用第18条</p> <p>(2)保育所保育指針第3章1(3)ア</p>	<p>(1)体調不良等への対処を適切に行っていない。</p>	<p>C</p>
イ 感染症	<p>感染症の発生又はまん延を防止するため、必要な措置を講じるよう努めなければならない。</p> <p>最も重要な対策は手洗い等により手指を清潔に保つことである。適切な手洗いの手順に従って、丁寧に手洗いすることが接触感染対策の基本であり、そのためには、全ての職員が正しい手洗</p>	<p>1 感染症の予防対策を講じているか。</p>	<p>(1)区家基第14条2</p> <p>(2)保育所保育指針第3章1(3)イ</p> <p>(3)雇児発第0222001号通知</p>	<p>(1)感染症予防対策を適切に行っていない。</p> <p>(2)感染症予防対策が不十分である。</p>	<p>C</p> <p>B</p>

項目	基本的考え方	観点	関係法令等（準拠を含む）	評価事項	評価
ウ アレルギー疾患	<p>この方法を身につけ、常実施する必要がある。 子どもの年齢に応じて、手洗いの介助を行うことや適切な手洗いの方法を指導することが大切である。 タオルの共用は絶対に行わず、ペーパータオルを使用することが望ましい。</p> <p>（感染症予防対策の例） ・タオル、コップ等を共用していないか。 ・食事の直前及び排泄又は排泄の世話をした職員は直後に、石鹸を使って流水で十分に手指を洗っているか。 ・ビニールプール等で水遊びをする際に、下痢気味の子ども等を水に入れていないか。 参考 保育所における感染症対策ガイドライン（厚生労働省）</p>	<p>2 利用前の既往歴及び予防接種等の状況を把握しているか。</p> <p>3 感染症発生時にまん延防止対策を講じているか。 再発防止対策に、園全体で取り組んでいるか。</p>	<p>(1) 保育所保育指針第3章1(3)</p> <p>(1) 医家基第14条2 (2) 保育所保育指針第3章1(3)イ (3) 雇児発第0222001号通知</p>	<p>(1) 利用時の既往歴及び予防接種等の状況を把握していない、又は不十分である。</p> <p>(1) まん延防止対策を講じていない。 (2) まん延防止対策が不十分である。</p>	<p>B</p> <p>C</p> <p>B</p>
	<p>感染症やその他の疾病の発生予防に努め、その発生や疑いがある場合には、必要に応じて嘱託医、区、保健所等に連絡し、その指示に従うとともに、保護者や全職員に連絡し、予防等について協力を求めること。また、感染症に関する事業所の対応方法等について、あらかじめ関係機関の協力を得ておくこと。看護師等が配置されている場合には、その専門性を生かした対応を図ること。</p>	<p>4 感染症発生時には、速やかに地域の医療機関と連携し、また保健所等へ報告しているか。</p>	<p>(1) 雇児発第0222001号通知</p>	<p>(1) 地域の医療機関や保健所等との連携・報告が行われていない、又は不十分である。</p>	<p>B</p>
	<p>アレルギー疾患を有する子どもの保育については、保護者と連携し、医師の診断及び指示に基づき、適切な対応を行うこと。また、食物アレルギーに関して、関係機関と連携して、当該事業所の体制構築など、安全な環境の整備を行うこと。看護師や栄養士等が配置されている場合には、その専門性を生かした対応を図ること。</p> <p>（対策例） ○生活管理指導表により、保護者等と情報を共有する。 ○生活管理指導表に基づいた対応について、保育士等が保護者と面談を行い、相互の連携を図る。 ○誤食事故は、注意を払っていても、日常的に発生する可能性があることを踏まえ、食器の色を変える、座席を固定する、食事中に保育士等が個別的な対応を行うことができるようにする等の環境面における対策を行う。 参考 保育所保育指針 第3章1(3) ・人的エラーの対策としては、食事内容を記載した配膳カードを作成し、食物アレルギーを有する子どもの調理、配膳、食事の提供までの間に2重、3重のチェック体制をとること、食物アレルギーを有する子どもの食器の色などを変えて注意喚起することなどが挙げられる。 参考「保育所におけるアレルギー対応ガイドライン」（平成31年4月厚生労働省）</p>	<p>1 アレルギー疾患への対応を適切に行っているか。</p> <p>・生活管理指導表等により、保護者等と情報を共有しているか。 ・食器の色を変える、座席を固定する、食事中に保育士等が個別的対応をとる等、安全性を最優先とした対策がとられているか。 ・全職員を含め、関係者の共通理解の下で、組織的に対応しているか。</p> <p>・施設長、調理員や栄養士等の専門職、保育士等が子どもの現状を把握し、保護者と面談等を行い、相互の共通理解及び連携を図っているか。</p>	<p>(1) 保育所保育指針第3章1(3)ウ 第3章3(2)ア、イ (2) 児発第418号通知 (3) 雇児総発第402号通知 (4) 児発第471号通知 別紙1-2(2)第1-1 [保育所](5)</p>	<p>(1) アレルギー疾患への対応を適切に行っていない。</p> <p>(2) アレルギー疾患への対応が不十分である。</p>	<p>C</p> <p>B</p>

項目	基本的考え方	観点	関係法令等（準拠を含む）	評価事項	評価
<p>(6) 乳幼児突然死症候群の予防及び睡眠中の事故防止</p>	<p>参考「教育・保育施設等における事故防止及び事故発生時の対応のためのガイドライン」（平成28年3月 内閣府）</p> <p>乳児は、疾病への抵抗力が弱く、心身の機能の未熟さに伴う疾病の発生が多いことから、一人一人の発育及び発達の状態や健康状態についての適切な判断に基づく保健的な対応を行うこと。</p> <p>乳幼児突然死症候群（SIDS）の予防及び睡眠中の事故防止の観点から、医学上の理由を除いてうつぶせ寝を避け、仰向けに寝かせ、睡眠中の乳幼児の顔色や呼吸の状態をきめ細かく観察するなどの基本事項を順守すること。</p> <p>1歳以上であっても乳幼児の発達状況により、仰向けに寝かせること。また、預かり始めの乳幼児については特に注意し、きめ細かな見守りが重要である。</p> <p>（対策例）</p> <ul style="list-style-type: none"> ○子どもの顔が見える仰向けに寝かせる。 ○照明は、子どもの顔色が観察できる程度の明るさを保つ。 ・子どもの顔色、呼吸の状態をきめ細かく観察する。（0歳児は5分に1回、1～2歳児は10分に1回が望ましい） ・睡眠前には口の中に異物等がないかを確認する。 ・柔らかい布団やぬいぐるみ等を使用しない。 ・ヒモ及びヒモ状のものをそばに置かない。 ・厚着をさせすぎない。暖房を効かせすぎない。 ・子どものそばを離れない。機器の使用の有無にかかわらず、必ず職員がそばで見守る。子どもを1人にしない。（子どもだけにしない。） ・保育室内は禁煙とする。 <p>参考 「教育・保育施設等における重大事故防止策を考える有識者会議」からの注意喚起について（平成29年12月18日付内閣府子ども・子育て本部参事官付・文部科学省初等中等教育局幼児教育課・厚生労働省子ども家庭局保育課事務連絡）</p>	<p>1 乳幼児突然死症候群（SIDS）の予防及び睡眠中の事故防止対策を講じているか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・子どもの顔が見える仰向けに寝かせる、子どもの顔色・呼吸の状態をきめ細かく観察する、厚着をさせすぎない、職員がそばで見守る等、睡眠中の事故防止対策が講じられているか。 <p>2 睡眠時チェック表を作成しているか。</p>	<p>(1) 保育所保育指針 第2章1(3)ア 第3章1(3)イ 第3章3(2)ア、イ</p> <p>(2) 児発第471号通知別紙1-2(2)第1-1 [保育所](5) 第2 [共通事項](2)</p> <p>(3) 27 福保子保第3650号</p> <p>(4) 30 福保子保第3635号通知</p> <p>(1) 保育所保育指針 第3章3(2)ア、イ</p> <p>(2) 児発第471号通知別紙 1-2(2)第1-1 [共通事項](2)</p> <p>(3) 27 福保子保第3650号通知</p> <p>(4) 30 福保子保第3635号通知</p>	<p>(1) 乳幼児突然死症候群の予防及び睡眠中の事故防止対策を講じていない。</p> <p>(2) 乳幼児突然死症候群の予防及び睡眠中の事故防止対策が不十分である。</p> <p>(1) 睡眠時チェック表を作成していない。</p> <p>(2) 睡眠時チェック表の記録が不十分である。</p>	<p>C</p> <p>B</p> <p>C</p> <p>B</p>

項目	基本的考え方	観点	関係法令等（準拠を含む）	評価事項	評価
<p>(7)子どもの安全確保 ア 事故防止</p>	<p>1 保育中の事故防止のために、子どもの心身の状態等を踏まえつつ、施設内外の安全点検に努め、安全対策のために職員の共通理解や体制づくりを図るとともに、家庭や地域の関係機関の協力の下に安全指導を行うこと。</p> <p>事故防止の取組を行う際には、特に、睡眠中、プール活動水遊び中、食事中、送迎等の場面では重大事故が発生しやすいことを踏まえ、子どもの主体的な活動を大切にしつつ、施設内外の環境の配慮や指導の工夫を行うなど、必要な対策を講じること。</p> <p>(対策例)</p> <ul style="list-style-type: none"> ○危険な場所、設備等を把握しているか。 ○窒息の可能性のある玩具、小物等が不用意に保育環境下に置かれていないかなどについて、保育室内及び園庭内の点検を定期的実施する。 ・事業所・事業者は、あらかじめ点検項目を明確にし、定期的に点検を実施した上で、文書として記録するとともに、その結果に基づいて、問題のある箇所の改善を行い、また、その結果を職員に周知して情報の共有化を図る。 <p>参考「教育・保育施設における事故防止及び事故発生時の対応のためのガイドライン」（平成28年3月 内閣府）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・子どもの食事に関する情報（咀嚼や嚥下機能を含む発達等）や当日の子どもの健康状態を把握し、誤嚥等による窒息のリスクとなるものを除去する。 ・過去に、誤嚥、窒息などの事故が起きた食材は、誤嚥を引き起こす可能性について保護者に説明し、使用しないことが望ましい。 ・クリスマスや年末年始、節分等の行事の際は、普段とは異なる内容・形態にて食事等の提供がなされていることを踏まえ、事故防止に万全を期すこと。 <p>参考「教育・保育施設等における事故防止及び事故発生時の対応のためのガイドライン」（平成28年3月 内閣府） 「食事の誤嚥による子どもの窒息事故の予防に向けた注意喚起について」（令和3年12月17日付厚生労働省子ども家庭局総務課少子化総合対策室・厚生労働省子ども家庭局保育課事務連絡）</p>	<p>1 子どもの事故防止に配慮しているか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・子どもの心身の状態等を踏まえつつ、年齢、場所、活動内容に留意し、事故の発生防止に取り組んでいるか。 ・事故発生防止のための指針の整備等を行っているか。 <p>2 窒息の可能性のある玩具等が保育環境下に置かれていないかなどについて、定期的に点検しているか。</p> <p>3 子どもの食事に関する情報等を把握し、誤嚥等による窒息のリスクとなるものを除去しているか。</p>	<p>(1)区特基条例第50条により準用第32条 (2)区家基第6条の6 (3)保育所保育指針第1章1(4)イ 第1章2(2)ア(イ)③ 第3章3(2)ア、イ (4)児発第418号通知 (5)雇児保第0308号第1号 (6)雇児総発第402号通知 (7)府子本第659通知</p> <p>(1)保育所保育指針第3章3(2)ア、イ (2)児発第418号通知 (3)雇児総発第402号通知 (4)児発第471号通知別紙1-2(2)第1-1 [保育所](5)</p> <p>(1)保育所保育指針第3章3(2)ア、イ (2)雇児総発第418号通知 (3)雇児総発第402号通知 (4)児発第471号通知別紙1-2(2)第1-1 [保育所](5)</p>	<p>(1)子どもの事故防止に配慮していない。</p> <p>(2)子どもの事故防止に対する配慮が不十分である。</p> <p>(1)定期的に点検していない。</p> <p>(2)定期的な点検が不十分である。</p> <p>(1)窒息のリスクとなるものを除去していない。</p> <p>(2)窒息のリスクとなるものの除去が不十分である。</p>	<p>C</p> <p>B</p> <p>C</p> <p>B</p> <p>C</p> <p>B</p>

項目	基本的考え方	観点	関係法令等（準拠を含む）	評価事項	評価
	<ul style="list-style-type: none"> ・園外保育時は、携帯電話等による連絡体制を確保し、複数の保育士等が対応する。 ・職員は子どもの列の前後（加えて人数に応じて列の中）を歩く、交差点等で待機する際には車道から離れた位置に待機する等のルールを決めて移動する。 ・散歩等の園外活動の前後等、場面の切り替わりにおける子どもの人数確認についてダブルチェック体制をとる等して徹底すること。 <p>○目的地への到着時や出発時、帰園後の子どもの人数確認等の迷子、置き去り防止策を行う。</p> <p>○散歩の経路等について、交通量や危険箇所等の点検を行う。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・目的地や経路について事前に安全の確認を行い、職員間で情報を共有するとともに、園外活動時の職員体制とその役割分担、緊急事態が発生した場合の連絡方法等について検討し、必要な対策を実施する。 <p>参考「保育所等での保育における安全管理の徹底について」（令和元年5月10日付内閣府子ども・子育て本部参事官（子ども・子育て支援担当）・厚生労働省子ども家庭局保育課事務連絡）</p> <p>「保育所における園外活動時の安全管理に関する留意事項（令和元年6月21日付厚生労働省子ども家庭局総務課少子化総合対策室・厚生労働省子ども家庭局保育課事務連絡）」</p> <p>「保育所、幼稚園、認定こども園及び特別支援学校幼稚園部における安全管理の徹底について」（令和3年8月25日付厚生労働省子ども家庭局保育課事務連絡）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・プール、水遊びを行う場合は、適切な監視、指導体制の確保と緊急時への備えを徹底する。 ・プール活動や水遊びを行う場合は、監視体制の空白が生じないように、専ら監視を行うものとプール指導等を行う者を分けて配置する。 <p>参考「教育・保育施設等における事故防止及び事故発生時の対応のためのガイドライン」（平成28年3月内閣府）</p> <p>「保育所等での保育における安全管理の徹底について」（令和元年5月10日付内閣府子ども・子育て本部参事官（子ども・子育て支援担当）・厚生労働省子ども家庭局保育課事務連絡）</p>	<p>4 園外保育時に複数の保育従事職員が（うち1人以上は常勤保育士）対応しているか。</p> <p>5 プール活動等を行う場合は、水の外で監視に専念する職員を配置しているか。</p>	<p>(1) 保育所保育指針第3章3(2)ア、イ</p> <p>(2) 雇児総発第418号通知</p> <p>(3) 雇児総発第402号通知</p> <p>(4) 児発第471号通知別紙1-2(2)第1-1[保育所](5)</p> <p>(5) 事務取扱要綱第2-4(1)</p> <p>(1) 保育所保育指針第3章3(2)ア、イ</p> <p>(2) 雇児総発第418号通知</p> <p>(3) 雇児総発第402号通知</p> <p>(4) 府子本第679号通知</p> <p>(5) 児発第471号通知(2)第1-1[保育所](5)</p>	<p>(1) 園外保育時に複数の職員（うち1人以上は常勤保育士）対応している。</p> <p>(2) 園外保育時における複数の職員（うち1人以上は常勤保育士）の対応が不十分である。</p> <p>(1) 監視に専念する職員を配置していない。</p> <p>(2) 監視に専念する職員の配置が不十分である。</p>	<p>C</p> <p>B</p> <p>C</p> <p>B</p>

項目	基本的考え方	観点	関係法令等（準拠を含む）	評価事項	評価
イ 損害賠償保険	<p>2 子どもの登降園は、送迎時における子どもの安全確保上、原則として保護者が行うべきことを保護者に徹底する必要がある。また外部からの人の出入りを確認するとともに、保護者以外の者が迎えに来る場合、原則としてその都度職員が保護者に確認する必要がある。</p>	<p>6 子どもの送迎は保護者等が行うよう周知を徹底しているか。</p>	<p>(1) 保育所保育指針第3章3 (2) ア、イ、ウ (2) 雇児総発第402号通知別添2-1（職員の共通理解と所内体制）及び（保育所・障害児通園施設の通所時における安全確保）</p>	<p>(1) 周知していない。 (1) 周知が不十分である。</p>	<p>C B</p>
	<p>3 子どもの施設外での活動、取組等のための移動その他の子どもの移動のために自動車を使用するときは、子どもの乗車及び降車の際に、点呼等により、子どもの所在を確認しなければならない。</p> <p>学校安全会、損害保険に加入することによって、事故に対する補償について万全を期すること。</p>	<p>7 自動車への乗降車時に、子どもの所在を確認しているか。</p>	<p>(1) 区家基条例第8条の3第1項、第2項</p>	<p>(1) 自動車への乗降車の際に、子どもの所在確認をしていない。 (2) 自動車への乗降車の際に、子どもの所在確認が不十分である。</p>	<p>C B</p>
ウ 事故発生時の対応	<p>1 事故により傷害等が発生した場合には、子どもの状態等に応じて、保護者に連絡するとともに、適宜、嘱託医や子どものかかりつけ医等と相談し、適切な処置を行うこと。看護師等が配置されている場合には、その専門性を生かした対応を図ること。</p> <p>再発防止等に役立てるため、事故の経過及び対応を事故簿等に記録するとともに事業所全体で振り返りを行い、速やかに再発防止策を講じること。</p> <p>保護者へは、緊急時には早急にまた簡潔に要点を伝え、事故原因等については、改めて具体的に説明すること。事業所における死亡事故等の重大事故に係る検証が実施された場合には、検証結果を踏まえた再発防止の措置を講じること。</p>	<p>1 損害賠償保険に加入しているか。</p> <p>2 損害賠償保険の内容が適切か。</p>	<p>(1) 区特基条例第50条より準用第32条の4 (2) 都第353号通知 (3) 雇児発0905第2号通知2(5) (4) 杉並区特定地域型保育事業運営費等支給要綱第5条(5)</p>	<p>(1) 損害賠償保険に加入していない。 (2) 損害賠償保険の内容が不適切である。</p>	<p>B B</p>
	<p>1 事故が発生した場合に適切に対応しているか。 ・事故の経過及び対応を事故簿等に記録しているか。</p>	<p>1 事故が発生した場合に適切に対応しているか。 ・事故の経過及び対応を事故簿等に記録しているか。</p>	<p>(1) 区特基条例第50条より準用第32条第3項 (2) 保育所保育指針第3(3)ア (3) 26福保子保第2984号通知 (4) 重大事故の再発防止のための事後的な検証通知 (5) 児発第471号通知1-2(2)第1-1[保育所](7)</p>	<p>(1) 事故発生後の対応を適切に行っていない。 (2) 事故発生後の対応が不十分である。</p>	<p>C B</p>

項目	基本的考え方	観点	関係法令等（準拠を含む）	評価事項	評価
	<p>2 次に掲げる事故等が発生した場合には区に報告すること。</p> <p>① 死亡事故</p> <p>② 治療に要する期間が30日以上を負傷や疾病等を伴う重篤な事故等</p> <p>③ 感染症若しくは食中毒の発生又は発生が疑われる状況が生じ、次のア、イ又はウに該当する場合</p> <p>ア 同一の感染症若しくは食中毒による又はそれらによると疑われる死亡者又は重篤患者が1週間内に2名以上発生した場合</p> <p>イ 同一の感染症若しくは食中毒の患者又はそれらが疑われる者が10名以上又は全利用者の半数以上発生した場合</p> <p>ウ ア及びイに該当しない場合であっても、通常の発生動向を上回る感染症等の発生が疑われ、特に園長が報告を必要と認めた場合</p> <p>④ 迷子、置き去り、連れ去り等が発生し又は発生しかけた場合</p> <p>⑤ その他、子どもの生命または身体被害に係る重大な事故に直結するような事案が発生した場合</p> <p>事故報告の第1報は原則事故発生当日（遅くとも事故発生翌日）、第2報は原則1か月以内程度とし、状況の変化や必要に応じて、追加の報告を行うこと。また、事故発生の要因分析や検証等の結果については、でき次第報告すること。</p> <p>3 事故の状況及び当該事故に際してとった処置についての記録を整備し、その完結の日から5年間保存しなければならない。</p>	<p>2 報告対象となる事故を区に速やかに報告しているか。</p> <p>3 事故の状況、処置についての記録を整備し、完結の日から5年間保存しているか。</p>	<p>(1)区特基条例第50条により準用第32条第2項</p> <p>(2)保育所保育指針第3章(3)</p> <p>(3)26福保子保第2984号通知</p> <p>(4)府子本第912号通知</p> <p>(5)児発第471号通知別紙1-2(2)第1-1[保育所](5)</p> <p>(1)区特基条例第50条により準用第32条第3項、第3章第49条第2項第5号</p>	<p>(1)事故報告が行われていない。</p> <p>(2)事故報告が速やかに行われていない。</p> <p>(1)記録を整備していない、又は保存していない。</p> <p>(2)記録が不十分である。</p>	<p>C</p> <p>B</p> <p>C</p> <p>B</p>

編 理 經 計 會

目 次

I	社会福祉法人の会計経理	1
II	共通(社会福祉法人とそれ以外の者)の会計経理	
1	会計の原則	
(1)	会計の区分	1
(2)	書類の整備、保管、適正な経理処理(経理規程を制定していない者)	1
2	運営費	
(1)	地域型保育給付費	1
(2)	補助金	2
(3)	その他	2
3	利用者負担	
(1)	利用者負担額等(上乗せ徴収、実費徴収)	2
(2)	領収証の発行	2
III	社会福祉法人以外の者の会計経理	
1	会計経理	
(1)	経理処理等	3
(2)	経理規程(経理規程を制定している者)	4
(3)	その他	4

〔凡例〕

以下の関係通知等を略称して次のように標記する。

No.	関係法令及び通知等	略称
1	平成24年8月22日 法律第65号「子ども・子育て支援法」	子ども・子育て支援法
2	平成26年10月14日 条例第27号「杉並区家庭的保育事業等の設備及び運営の基準に関する条例」	区家基条例
3	平成26年10月14日 条例第28号「杉並区特定教育・保育施設及び特定地域型保育事業の運営の基準に関する条例」	区特基条例
4	平成26年12月12日 雇児発1212第6号「家庭的保育事業等の認可等について」	1212第6号通知
5	平成28年3月31日 雇児発0331第15号・社援発0331第39号・老発0331第45号「社会福祉法人会計基準の制定に伴う会計処理等に関する運用上の取扱いについて」 平成28年3月31日 雇児総発0331第7号・社援基発0331第2号・障障発0331第2号・老総発0331第4号「社会福祉法人会計基準の制定に伴う会計処理等に関する運用上の留意事項について」	社福会計基準の関連通知
6	平成28年8月28日 府子本第571号・28文科初第727号・雇児発0823第1号「特定教育・保育等に要する費用の額の算定に関する基準等の実施上の留意事項について」	留意事項通知
7	令和2年7月30日 府子本第761号・2文科初第643号・子発0730第2号「施設型給付費等に係る処遇改善等加算Ⅰ及び処遇改善等加算Ⅱについて」	処遇改善通知
8	平成27年8月28日 内閣府子ども・子育て本部参事官（子ども・子育て支援担当）ほか事務連絡「施設型給付費等に係る処遇改善等加算について」の取扱いについて」	処遇改善事務連絡
9	平成27年12月8日 27杉並第45066号「杉並区特定地域型保育事業運営費等支給要綱」	区支給要綱
10	平成28年1月20日 27杉並第52069号「杉並区保育士等キャリアアップ補助金交付要綱」	キャリアアップ補助要綱
11	平成27年7月31日 27福保子保第643号「東京都保育士等キャリアアップ補助金等に係る財務情報等公表要領」 平成27年9月24日 27福保子保第691号「保育士等キャリアアップ補助金等に係る財務情報等公表要領」	財務情報等公表要領
12	平成28年1月20日 27杉並第52070号「杉並区保育サービス推進事業補助金交付要綱」	サービス推進事業補助要綱

項目	基本的考え方	観点	関係法令等	評価事項	評価
I 社会福祉法人の会計経理	社会福祉法人が経営する事業所等に係る会計経理については、社会福祉法人会計基準(平成 28 年 3 月 31 日厚生労働省令第 79 号)及び社福会計基準の関連通知等で定めるところに従い、会計処理を行わなければならない。【※】	【※】指導検査における観点、関係法令等及び評価事項(評価)については、平成 29 年 4 月 27 日雇児発 0427 第 7 号・社援発 0427 第 1 号・老発 0427 第 1 号「社会福祉法人指導監査実施要綱の制定について」別添「社会福祉法人指導監査実施要綱」別紙「指導監査ガイドライン」に定めるところによる。			
II 共通(社会福祉法人とそれ以外の者)の会計経理					
1 会計の原則 (1)会計の区分	特定地域型保育事業者(家庭的保育事業、小規模保育事業、または事業所内保育事業を行う者をいう。以下、「事業者」という。)は、特定地域型保育の事業の会計をその他の事業の会計と区分しなければならない。⇒III 1 (1)観点 1 を参照	1 特定地域型保育の事業の会計をその他の事業の会計と区分しているか	(1)区特基条例第 33 条、第 50 条 (2)1212 第 6 号通知第 1_3 (4)イ	(1)特定地域型保育の事業の会計をその他の事業の会計と区分していない。	C
(2)書類の整備、保管、適正な経理処理(経理規程を制定していない者)	事業者は、財産及び収支の状況を明らかにする帳簿、証憑書類等を整備し、事業所に備え付け、保管して、適正な会計管理及び施設運営を実施しなければならない。	1 事業者は事業の収支の状況を明らかにする帳簿、証憑書類等の書類を整備し、適正な会計管理をしているか。 2 関係書類の保管は適正か。	(1)区特基条例第 49 条第 1 項 (2)区家基条例第 19 条	(1)書類の整備、保管に重大な問題がある。 (2)適正な会計管理を行っていない。 (3)書類の整備、保管、会計管理が不十分である。	C C B
2 運営費 (1)地域型保育給付費	特定地域型保育事業所(特定地域型保育事業を行う事業所をいう。以下、「事業所」という。)は、子ども・子育て支援法第 29 条の規定による地域型保育給付費及び同法第 30 条の規定に基づく特例地域型保育給付費並びに区要綱等に基づき支給される補助金等について、その支給の目的等を十分に理解し、これを適正な運営費等に充てなければならない。	1 区分や基本分単価を適正に申請、受給しているか。 2 加算の認定を受けている場合は、加算の要件を満たしているか。 3 処遇改善等加算の認定を受けている場合は、適正に手続がなされ、事業所の職員に正しく支払われているか。 4 補助金等の支給要件を満たしているか。 5 補助金等を対象の経費に充てているか。	(1)留意事項通知別紙 5～8 (1)留意事項通知別紙 5～8 (1)処遇改善通知 (2)処遇改善事務連絡 (1)杉並区特定地域型保育事業運営費等支給要綱 (2)各補助金交付要綱等 ※(1)、(2)は観点 4、5 に共通	(1)申請又は受給が適正に行われていない。 (1)加算の要件を満たしていない。 (1)職員に正しく支払われていない。 (2)手続が適正でない。 (3)手続に不備がある。 (1)要件を充たしていないことに関し重大な問題がある。 (2)要件を充たしていない。 (1)用途が適正でないことに関し重大な問題がある。 (2)用途が適正でない。	C C C C C B

項目	基本的考え方	観点	関係法令等	評価事項	評価
(2)補助金	事業所は、それぞれの補助金交付に係る要綱の規定に定めるところにより、対象となる経費の補助を申請した場合、適正な対象経費に充てなければならない。	1 補助金の支給要件を満たしているか。	(1)キャリアアップ補助要綱 (2)財務情報等公表要領 (3)サービス推進事業補助要綱 (4)その他の関係補助要綱 ※(1)～(4)は観点1、2に共通	(1)要件を充たしていないことに関し重大な問題がある。	C
(3)その他		2 各種補助要綱に定められた対象経費に充てているか。		(2)要件を充たしていない。	B
3 利用者負担 (1)利用者負担額等（上乗せ徴収、実費徴収）	<p>事業者は、特定地域型保育の提供に当たって当該特定地域型保育の質の向上を図る上で特に必要と認められる対価について、当該保育に要する費用と見込まれるものの額と保育費用基準額の差額に相当する金額の範囲内で設定する額の支払を教育・保育給付認定保護者（以下この項で「保護者」という。）から受けることができる。（上乗せ徴収）</p> <p>事業者は、特定地域型保育において提供される便宜に要する費用のうち、区特基条例第43条第4項に掲げる費用の額の支払を保護者から受けることができる。（実費徴収）</p> <p>事業者は、上乗せ徴収及び実費徴収の支払を求める際は、予め、当該費用の用途及び額並びに保護者に費用の額の支払を求める理由について書面によって明らかにするとともに、保護者に対して説明を行い、同意を得なければならない。上乗せ徴収の場合は、文書による同意を必要とする。</p>	1 その他運営費に関することで不適正な事項はないか。	(1)区特基条例第43条第3項、第4項	(1)使途が適正でないことに関し重大な問題がある。	C
(2)領収証の発行		1 内容及び徴収額は適正か。		(1)区特基条例第43条第6項、第46条第5号	(2)使途が適正でない。
		2 費用の用途、額、理由について書面で明らかにし、文書（条例に規定する場合を除く）による同意を得たうえで徴収しているか。	(1)区特基条例第43条第5項、第53条第1項～第5項	(1)徴収に当たって、費用の用途、額、理由について書面で明らかにしていない	B
		3 領収書を発行しているか。		(2)徴収に当たって説明や同意がない。	B
				(1)領収書を発行していない	B

項目	基本的考え方	観点	関係法令等	評価事項	評価
III 社会福祉法人以外の者の 会計経理 1 会計経理 (1) 経理処理等	<p>社会福祉法人以外の者による保育所の経理処理については、1212 第6号通知の第1の3(4)に基づく杉並区の認可条件等により、経理処理を行う必要がある。</p> <p>なお、簡潔明瞭な会計処理を行う観点から、委託費については、社会福祉法人会計基準(平成28年厚生労働省令第79号)に基づく会計処理を行うことが望ましい。</p>	<p>1 収支計算書又は損益計算書に、保育所を経営する事業に係る区分を設けているか。</p> <p>2 企業会計の基準による会計処理を行っている者は、家庭的保育事業等を経営する事業に係る区分ごとに、以下の書類を作成しているか。</p> <p>(1) 企業会計の基準による貸借対照表(流動資産及び流動負債のみを記載)</p> <p>(2) 1212 第6号通知別紙1の借入金明細書</p> <p>(3) 1212 第6号通知別紙2の基本財産及びその他の固定資産(有形固定資産)の明細書</p>	<p>(1) 区特基条例第33条、第50条 (2) 1212 第6号通知第1の3(4)イ</p> <p>(1) 1212 第6号通知第1の3(4)ウ</p>	<p>(1) 収支計算書又は損益計算書に、家庭的保育事業等を経営する事業に係る区分を設けていない。</p> <p>(1) 企業会計の基準による貸借対照表(流動資産、及び流動負債のみを記載)を作成していない。</p> <p>(2) 借入金明細書を作成していない。</p> <p>(3) 基本財産及びその他の固定資産(有形固定資産)の明細書を作成していない。</p>	<p>C</p> <p>C</p> <p>C</p> <p>C</p>

項目	基本的考え方	観点	関係法令等	評価事項	評価
<p>(2) 経理規程(経理規程を制定している者)</p> <p>(3) その他</p>	<p>経理規程に従い適正な会計処理を行う必要がある。</p>	<p>3 毎会計年度終了後3か月以内に、次に掲げる書類に、家庭的保育事業等を営む事業に係る現況報告書を添付して、区長に提出しているか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・前会計年度末における貸借対照表 ・前会計年度の収支計算書又は損益計算書 ・その他会計に関し区が必要と認める書類 ・企業会計の基準による会計処理を行っている者は、家庭的保育事業等を営む事業に係る次の書類 <p>(1) 前会計年度末における企業会計の基準による貸借対照表(流動資産及び流動負債のみを記載)</p> <p>(2) 1212 第6号通知別紙1の借入金明細書</p> <p>(3) 1212 第6号通知別紙2の基本財産及びその他の固定資産(有形固定資産)の明細書</p> <p>1 経理規程に従って会計処理が行われているか。</p> <p>1 その他、社会福祉法人以外の者の経理処理に関することで不適正な事項はないか。</p>	<p>(1) 1212 第6号通知第1の3(4)エ</p>	<p>(1) 提出していない。</p> <p>(2) 一部不備がある。</p> <p>(1) 経理規程に従って会計処理が行われていない。</p> <p>(1) その他、社会福祉法人以外の者の経理処理に関して重大な問題がある。</p> <p>(2) その他、社会福祉法人以外の者の経理処理に関して問題がある。</p>	<p>C</p> <p>B</p> <p>B</p> <p>C</p> <p>B</p>